

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第175集

井尻B遺跡

1988

福岡市教育委員会

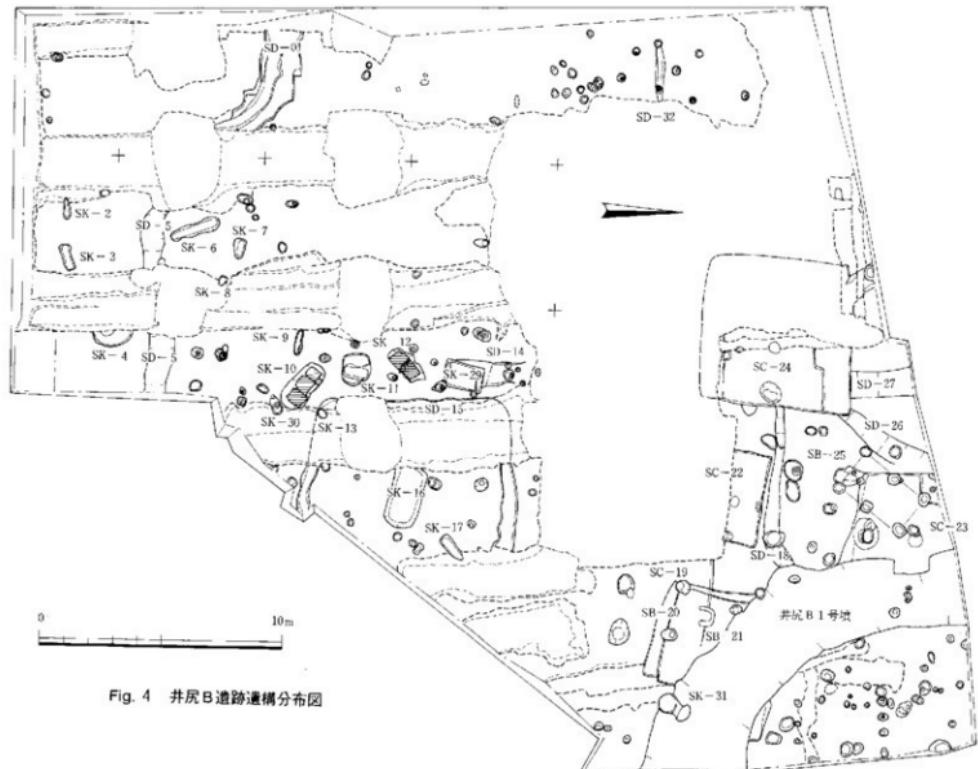


Fig. 4 井戸B遺跡遺構分布図

井尻B遺跡



1988

福岡市教育委員会

序 文

古くから大陸文化受窓の門戸として栄えてきた福岡市内には多くの埋蔵文化財が分布しています。本市では、特に文化財の保護、活用につとめてきてますが、市内の都市整備事業や各種の開発事業によって失われる遺跡については、記録保存のための発掘調査を行なっています。

本書もそうした遺跡の一つで、南区井尻五丁目175の共同住宅建設に先だって発掘調査を実施しました井尻B遺跡の報告書です。

発掘調査の結果、先土器時代、弥生時代から古墳時代の複合遺跡であることがわかり、貴重な資料を得ることができました。

信連建設株式会社をはじめとする関係各位の協力に対し感謝の意を表しますとともに、本書が文化財の理解の一助となり、広く活用されることを願っています。

昭和63年 3月31日

福岡市教育委員会

教育長 佐藤 善郎

例　　言

1. 本書は、南区井尻五丁目175-1 の信連建設株式会社による共同住宅建設に伴う事前調査として、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が1986年4月から5月にかけて発掘調査を実施した井尻B遺跡の調査報告書である。
2. 本書使用の遺構実測図は、山口譲治、吉留秀敏、平川裕介、角 浩之、野村俊之、城戸康利、李 弘鑑、土井基司、太田 瞳、上方高弘、池ノ上宏、中村清治、尾崎君枝、坂井昭美、藤野洋子、松本幸子、甲斐田嘉子、山崎美枝子、犬丸陽子、井手かすみがあたった。
3. 本書使用の遺物実測図は、石器・鉄器を山口、埴輪等土器・玉を主として古留が行ない、城戸、前田達雄、李があたった。
4. 本書に使用した写真は、主として上方があたった。
5. 本書使用の図面の整図は、遺物を山口、吉留がおこない、遺構図については、石田晴美、尾崎、山口朱美がおこなった。
6. 本書使用の方位は磁北である。
7. 墓地出土の赤色顔料については、本田光子氏に調査を依頼し、分析結果については第8章に収録した。
8. 本書の執筆分担は次のとおりである。
第5章3・第9章2を野村俊之、第5章4を城戸康利、第6章・第9章3・4を吉留秀敏、第7章2・第9章5を太田瞳が、他は山口譲治が執筆し、編集は、吉留、山口、城戸があたった。
9. 本調査出土遺物は、福岡市埋蔵文化財センターで一括収藏、保管し、公開して活用していく。

本文目次

第1章 序説	
1. はじめに	1
2. 調査体制	1
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	
1. 遺跡の位置と立地	3
2. 周辺の遺跡と歴史的環境	3
第3章 調査の概要	
1. 発掘区の設定	7
2. 調査の概要	7
第4章 調査の記録—先土器時代—	
1. 出土層位	9
2. 出土遺物	11
3. 遺物分布について	17
第5章 調査の記録—弥生時代から古墳時代前期の遺構と遺物—	
1. 積穴住居址	19
2. 挖立柱建物	21
3. 石蓋土塙墓	21
4. 土塙墓	24
5. その他の遺構と出土遺物	31
第6章 調査の記録—古墳と出土遺物—	
1. 古墳について	33
2. 出土遺物について	38
3. 付設溝 SK-31と出土遺物	45
第7章 調査の記録—その他の遺構と遺物—	
1. 積穴住居址	49
2. その他の出土遺物	52
第8章 井尻B遺跡出土の赤色顔料について	53
第9章 結章	
1. 福岡平野における先土器時代の様相	59

2. 石蓋土塙墓について	69
3. 井尻古墳群について	74
4. 博多 1 号墳出土の家形埴輪	80
5. 井尻 B 1 号墳出土の大甕と高坏について	87
6. おわりに	90

挿 図 目 次

Fig. 1 遺跡の位置と周辺の遺跡	2
Fig. 2 調査区位置図	5
Fig. 3 調査区地形図	6
Fig. 4 造構分布図	(折り込み)
Fig. 5 先土器時代調査区	9
Fig. 6 先土器時代遺物分布図および土層柱状図	10
Fig. 7 出土石器実測図 (1)	12
Fig. 8 出土石器実測図 (2)	13
Fig. 9 出土石器実測図 (3)	14
Fig. 10 出土石器実測図 (4)	15
Fig. 11 出土石器接合状態実測図	16
Fig. 12 第22・23号竪穴住居址出土土器実測図	17
Fig. 13 第22・23号竪穴住居址実測図	18
Fig. 14 第24号竪穴住居址および出土土器実測図	20
Fig. 15 第25号掘立柱建物実測図	22
Fig. 16 石蓋土塙墓実測図	23
Fig. 17 第2～4・6号土塙墓実測図	25
Fig. 18 第7～9・11号土塙墓実測図	26
Fig. 19 第13・16・17号土塙墓実測図	28
Fig. 20 第28～30号土塙墓実測図	30
Fig. 21 各造構出土土器実測図	31
Fig. 22 出土鉄器実測図	32

Fig. 23 出土石廻丁実測図	32
Fig. 24 井尻 B 1号墳周溝土層断面図	33
Fig. 25 周溝および遺物出土状態	34
Fig. 26 出土高坏実測図	35
Fig. 27 出土甕実測図	36
Fig. 28 円筒形埴輪実測図	37
Fig. 29 円筒・朝顔形埴輪実測図	39
Fig. 30 家形埴輪実測図 (1)	41
Fig. 31 家形埴輪実測図 (2)	42
Fig. 32 家形埴輪復元図	43
Fig. 33 出土鉄器・玉実測図	44
Fig. 34 第31号土塙実測図および土層断面図	46
Fig. 35 出土玉実測図	47
Fig. 36 第19~21号竪穴住居址実測図	49
Fig. 37 第19号竪穴住居址等出土土器実測図	50
Fig. 38 その他の出土土器実測図	51
Fig. 39 先土器時代遺跡分布地図	58
Fig. 40 各遺跡出土細石刃核実測図	60
Fig. 41 門田遺跡出土石器実測図	62
Fig. 42 諸岡遺跡出土石器実測図	64
Fig. 43 諸岡館址遺跡出土石器実測図	65
Fig. 44 福岡平野における先土器時代編年図	67
Fig. 45 福岡平野周辺の石蓋土塙墓分布図	69
Fig. 46 井尻周辺地形図	74
Fig. 47 博多 1号墳の位置と調査区	80
Fig. 48 博多 1号墳出土家形埴輪実測図 (1)	81
Fig. 49 博多 1号墳出土家形埴輪実測図 (2)	83
Fig. 50 博多 1号墳出土家形埴輪実測図 (3)	84
Fig. 51 博多 1号墳出土家形埴輪 A 復元図	85
Fig. 52 県内各遺跡出土大甕実測図	89

図 版 目 次

- PL. 1 調査区全景
- PL. 2 (1) 先土器時代土層断面 (2) 先土器時代遺物出土状況
- PL. 3 出土先土器時代石器
- PL. 4 積穴住居址
 - (1) SC-22 (2) SC-23 および第25号掘立柱建物 (SB-25) (3) SC-24
- PL. 5 第10号石蓋土塚墓
- PL. 6 第12号石蓋土塚墓
- PL. 7 土塚墓完掘状況 (1)
 - (1) SK-02 (2) SK-03 (3) SK-06
- PL. 8 土塚墓完掘状況 (2)
 - (1) SK-07 (2) SK-08 (3) SK-09
- PL. 9 土塚墓完掘状況 (3)
 - (1) SK-11 (2) SK-28 (3) SK-13
- PL. 10 井戸B 1号墳周溝内遺物出土状況
- PL. 11 井戸B 1号墳周溝内出土円筒埴輪
- PL. 12 井戸B 1号墳周溝内出土家形埴輪
- PL. 13 井戸B 1号墳周溝内出土須恵器
- PL. 14 井戸B 1号墳周溝内付設土塚
- PL. 15 井戸B 1号墳周溝内付設土塚前庭部出土玉
- PL. 16 出土鉄器・玉・石庵丁・須恵器

第1章 序 説

1. はじめに

南区井尻五丁目のスーパー跡地に、共同住宅建設が計画された。この地は、井尻B遺跡の中央部に位置しているが、集落化が進んでいる地域である。大型店舗が所在していたため、共同住宅建設の計画者である信連建設株式会社の依頼により、埋蔵文化財課（以下、埋文課）では昭和60年6月12日に試掘調査を実施した。

試掘調査の結果、地表面下30~40cmでローム層を基盤とする溝や柱穴が検出されるとともに、弥生時代から古代にかけての遺物が出土した。検出遺構、出土遺物およびローム層が新期上部ローム層であることから、弥生時代から古代にかけての集落址で、遺構の遺存状態も比較的良好であり、遺構も共同住宅建設計画地の全域に亘ることがわかった。以上の試掘調査結果を受け、埋文課は、井尻B遺跡の各時期の様相を把握する目的で、全面的な発掘調査が必要であると決定した。

以上の調査決定を受け、信連建設株式会社と埋文課は協議を重ね、調査費、調査期間、出土遺物の扱いなど契約事項が整い、調査契約が成立した。

本調査は、各時代、各時期の様相および遺構遺存状態の把握を目的として、1986年4月28日から同年5月31日にかけて約1ヶ月間実施した。

遺跡調査番号	8610	遺跡略号	I G B	
調査地 地籍	南区井尻五丁目175-1	分布地図番号	025-A-3	
開 発 面 積	1,406m ²	調査対象面積	1,406m ²	調査実施面積 930m ²
調査期間	1986年4月28日~同年5月31日(延べ)	32日		

2. 調査体制

調査体制として、以下に示す組織を構成した。緊急調査のため充分なる体制を組むことはできなかったが、調査依託者である信連建設株式会社をはじめとする関係各位の協力のもとに発掘調査および整理作業は順調に進行したことを明示して、協力者に謝意を表す。

調査主体／福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課第2係 教育長 佐藤善郎 文化部長(前) 河野清一 文化部長(現) 川崎賢治 埋蔵文化財課長 梅田純男 第1係長 折尾 学 第2係長 畠英憲雄 調査担当／山口謙治、古留秀敏 試掘調査担当／山崎純男(文化財主事)、松村道博(現第1係) 事務担当／松延好文 調査補助員／平川祐介(吉井町教育委員会)、角 浩之(前原町教育委員会)、野村俊之(筑紫野市教育委員会)、土井基司、李弘輝、太田謙(九州大学)、前田達雄、城戸康利、上方高弘、池ノ上宏、中村清治(福岡大学)、原野綾子

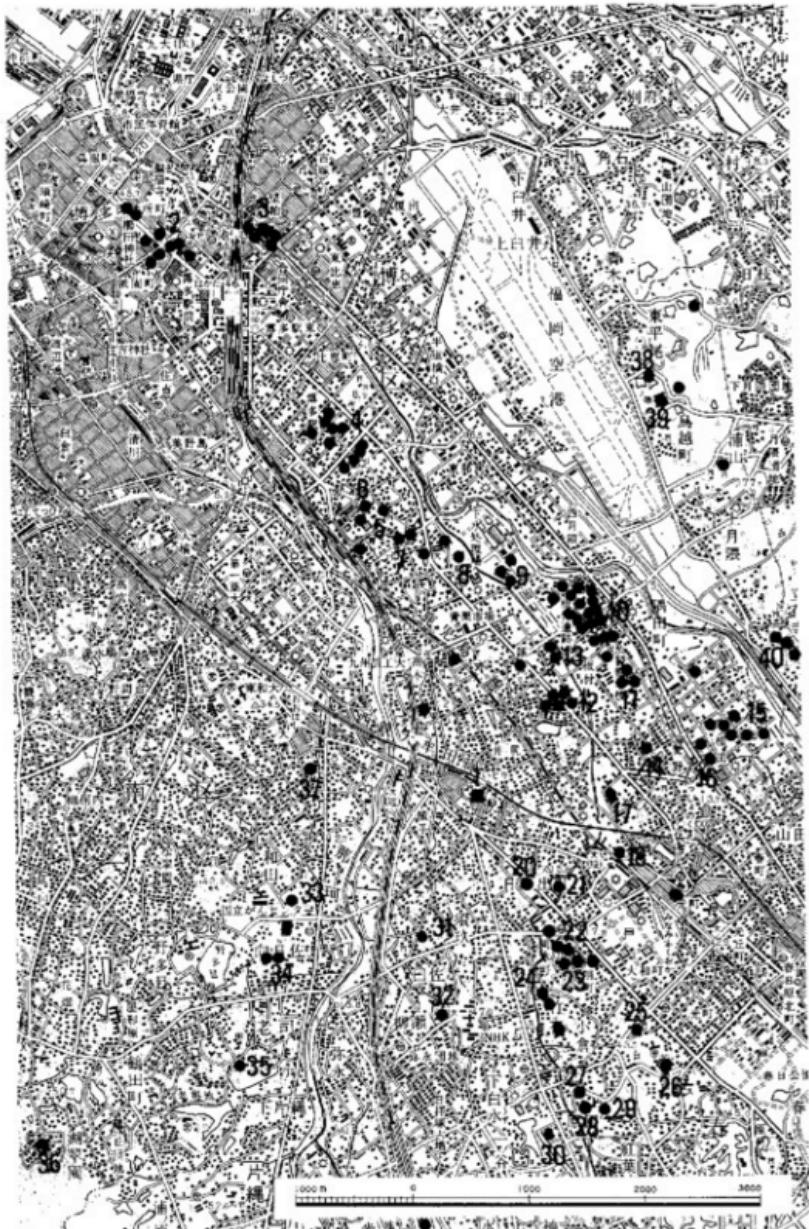


Fig. 1 遺跡の位置と周辺の遺跡

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

1. 遺跡の位置と立地 (Fig. 1 ~ 3)

福岡平野は、平野東部を北流する御笠川、平野中央部を北流する那珂川によって形成されている。両河川の中流域から上流にかけては多くの支流があり、各支流間には、北へ延びる中・低丘陵が発達している。両河川の中流域で、両河川は東西に離れていく、両河川間に那珂川町に源を発する諸岡川が北流している。諸岡川と那珂川間に南から北へ延びる標高50mから10mの洪積台地が所在している。

井尻B遺跡は、御笠川・那珂川中流域の諸岡川と那珂川に挟まれた須玖丘陵の先端部の標高12mから18m間に位置する遺跡である。本調査区は、井尻B遺跡の中央部の標高14mに位置し、現在は市街地となっている。なお、国土地理院発行の5万分の1地形図(福岡)の北から26.5cm、東から10.3cmの位置にある。

井尻B遺跡本調査区は、福岡平野のほぼ中央部に位置し、現在の行政単位では、福岡市の南部で、春日市との境界上に位置している。

2. 周辺の遺跡と歴史的環境 (Fig. 1.2)

本遺跡は、以下の章で述べるように、先土器時代、弥生時代から古代にかけての複合遺跡である。本遺跡をとりまく歴史的環境について、先土器時代と古墳については、結章で触れるので、ここでは、弥生時代を中心に研究史と歴史的環境についてみていくことにする。

本地域での調査・研究は、江戸時代から始まっているといつても過言ではあるまい。青柳種信は、「筑前國續風土記拾遺」の中で井尻の古墳および鋳型について以下のように述している。那珂郡井尻村の条「村の東南藤崎人家の後を大塚と云、塚有、いかなる人を葬りしか詳ならず。又寛政の末の頃熊野椎現の後廣簾を開き、溝を掘りたりしが、百姓惣吉という者塚の際より鉢の鎗範を掘出せり。右型長三尺斗、上下合せて有、石質温石の如し、須玖村に有鎗範の類なり。基の側より炭層多く出たり。然れば古此所に銅鉢を鋳たりしなるべし、由来不詳。此辺土中より古瓦多く出る。昔大寺など有し跡なるべきか」。これを受けて中山平次郎は、1925年考古学雑誌第14卷12号で「井尻村の弥生式遺跡」、1927年考古学雑誌第17卷12号で「井尻および寺福童の撫棺」と発表している。このなかで同氏は、いわゆる井尻大塚および鋳型出土地の追跡調

1. 井尻B遺跡
2. 博多遺跡群
3. 堅船遺跡群
4. 比恵遺跡群
5. 那珂遺跡群
6. 劍塚古墳
7. 那珂八幡古墳
8. 那珂深ワサ遺跡
9. 那珂君体道跡
10. 板付遺跡
11. 高畠遺跡
12. 鹿岡遺跡
13. 諸岡館址遺跡群
14. 麦野遺跡
15. 仲島遺跡
16. 井相田C遺跡
17. 三筑遺跡
18. 南八幡遺跡群
19. 井尻美松町遺跡
20. 府梨遺跡
21. 水田遺跡
22. 須玖岡本遺跡
23. 畑本四丁目遺跡
24. 赤井手遺跡
25. 伯安社遺跡
26. 西平塚遺跡
27. 大南塚遺跡
28. 大谷遺跡
29. 高辻遺跡
30. 一の谷遺跡
31. 日佐遺跡
32. 弥永原遺跡
33. 野多目遺跡
34. 野多目拾液遺跡
35. 老司古墳
36. 大牟田古墳群
37. 三宅廃寺
38. 赤穂ヶ浦遺跡
39. 宝満尾遺跡
40. 金隅遺跡

査を行っている。現在まで古墳および銅鉢鋳型出土地はわからなくなっていた。結論で触れるが井戸大塚は、今回調査で検出した形象を含む埴輪をもつ古墳である可能性が、中山平次郎の追跡調査、および野上淳次氏からの聞き込み、今回調査地点の小字が大塚であること、藤崎の集落が調査地点のすぐ西側に位置していることから大になったといえよう。また、銅鉢鋳型出土地は、熊野神社が移転しており、確実性はないが、古老の聞き込みから現在井戸公民館があるところ(Fig. 3)と考えられる。この銅鉢鋳型については、高橋健自もとりあげている(1917「銅鉢銅劍考」考古学雑誌第7卷第3号)

本遺跡が所在する須玖丘陵では、弥生時代の遺跡として須玖唐梨遺跡、弥永原遺跡、一の谷遺跡、辻田遺跡、門田遺跡などの調査が行われている。須玖唐梨遺跡では後期の掘立柱建物群や土塙墓などの墓地が検出されている。弥永原遺跡は後期の石棺墓などの墓地が検出され、青銅鏡も出土している。一の谷遺跡は、中期後半を主とする壺棺墓群が検出されている。辻田遺跡では台地際から終末期の農具を主とする多量の木製品が出土している。ここで終末期の木製農具の出土、特に開墾起耕具と考えられる三叉鍬の多量出土は、水稻耕作の広がりを考えるうえで興味がもたれる。門田遺跡では、前期後半から前期末の袋状竪穴、中期前半の竪穴住居址、中期の壺棺墓群が検出されている。須玖丘陵ではないが、那珂川東岸の日佐遺跡の調査を行っている。日佐遺跡では、前期前半の土器・石器が出土しており、前期前半の生活面を考えるうえで興味がもたれる。

本遺跡の東側の谷部に位置する井戸美松町遺跡では本遺跡とほぼ同時期の土塙墓群が検出されている。さらに東岸には諸岡丘陵があり、諸岡遺跡が所在している。現在まで18地点の調査が実施されており、突帯文土器期から中期後半の遺構が検出されている。突帯文土器期は方形プランをもつ竪穴住居址も検出されている。前期後半は、朝鮮無文土器が多量に出土する土塙群からなる地点と、袋状竪穴群からなる地点がある。直線距離で1km弱の板付遺跡では朝鮮無文土器はほとんど無く、朝鮮無文土器の北部九州へのいりかた、ひいては物の伝来を考えるうえで興味がもたれる。

諸岡川を挟んだ本遺跡東南の丘陵では、須玖永田遺跡、須玖岡本遺跡、赤井手遺跡、竹ヶ本遺跡、大南遺跡、大谷遺跡など調査が実施されている。伯元社遺跡で前期後半期の壺棺墓群が検出されている。須玖岡本遺跡は、中期中葉から後半の壺棺墓群が検出され、壺棺墓には、前漢鏡や青銅製武器などを副葬したものがあり、この遺跡の副葬品は当時としては卓越したものであり、首長墓群と考えられる。四丁目遺跡では銅鐸、大南遺跡では銅戈、水田遺跡では青銅鏡・銅鉢の鋳型が出土しており、唐梨遺跡もくるめて、この地域が後期には青銅器生産においても中心地であったと考えられる。大南遺跡では銅鐸も出土している。集落の面に目を移すと、四丁目遺跡、大谷遺跡では中期前半の竪穴住居址があり、後期にはいると永田遺跡や前述の唐



Fig. 2 調査区位置図

棧遺跡などで住居と考えられる掘立柱建物が出現している。

本遺跡の北東 2 km には板付遺跡、南西 2 km には野多目遺跡があり、調査が行われている。両遺跡では、突帯文土器期の水田址が検出され、完成した水稻耕作技術が伝わっていることがわかった。板付遺跡は中央・北・南の丘陵と東西の低湿地に位置する遺跡で、突帯文土器期から後期前半の集落（墓地を含む）、水田址からなっている。本遺跡の東南に位置する遺跡群が中期中葉から大規模になると好対称をなしている。

本遺跡の北 2 ~ 3 km の那珂・比恵丘陵には、那珂遺跡群、比恵遺跡群が所在し、それぞれ 14 地点、17 地点の調査が行われている。

以上、本遺跡を中心とした周辺の遺跡をみてきたが、本遺跡は中期中葉から後半期以後に福岡平野の中心をなすと考えられる須玖遺跡群の縁辺部に位置する遺跡であるといえよう。

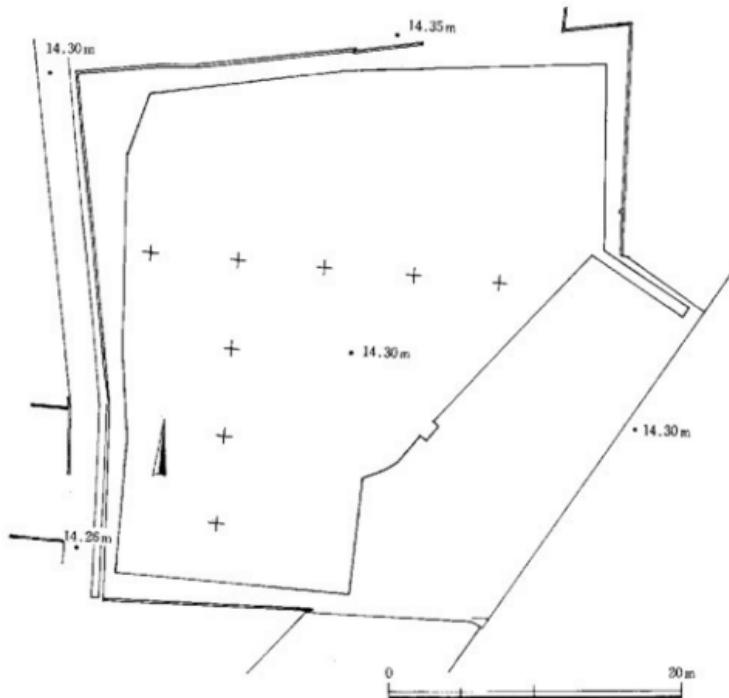


Fig. 3 調査区地形図

第3章 調査の概要

1. 発掘区の設定 (Fig. 3 ~ 5)

発掘対象地は、試掘調査によって、共同住宅建設計画地全域で、南北を道路に挟まれ、北側が広い台形状をなしている。まず、調査整理・作業員休憩および遺物・機材保管のためのプレハブを対象地の南東部に設定し、その横を調査用の駐車場とした。さらに、東・西の道路に面したところに安全柵を設けた。発掘区の北側は民家のブロック塀があり、南側はビルがあるためそれぞれ約1.5mの引きを取った。西側は安全柵があり、南北に大型店舗の基礎があるため、1.5~5mの引きを取り、東側はプレハブ・駐車場を残した形で発掘区を設定した。なお、プレハブ・駐車場スペースについては調査を行なう予定であったが、遺構の残存状態が比較的良く、先土器時代の包含層も確認されたため、調査期間の関係もあり、結局、調査できなかった。なお、調査期間中、北側のブロック塀が除去されたので、北側は民家との境界まで調査を行なうことができた。(Fig. 2・3 参照)

遺構実測のため、調査対象地に6mごとに測点を設け、北側から南へ1~7まで番号を付し、東側から西へA~Gまでのアルファベットを付した。これを用いて、区とした。表土の遺物は、F~4区表採というような形で取り上げた。また、先土器時代の調査はこの区を利用した。

検出遺構については、掘立柱建物をSB、竪穴住居をSC、土塙墓・石蓋土塙墓をSK、溝状遺構をSDとし、検出順に通し番号を付した。(例、SD-1……SK-3……SC-19)。なお、古墳周溝は、井戸B1号墳とし、古墳周溝内付設土塙はSK-31とした。なお、本書の中では、遺構名と遺構記号を併記していく。

2. 調査の概要

発掘は20~50cmの盛土を除去することから始めた。盛土を除去すると、新規上部ロームを基盤とする遺構面を検出した。この面は標高14.20m前後である。

調査区の中央部より北側には南北7.5m前後、東西18.5m前後のL字形の搅乱があり、この搅乱から南に延びる幅2m強の搅乱が5条、ほぼ等間隔で併列していた。しかし、搅乱がないところでは遺構残存状態が良く、弥生時代後期後半から古代にかけての遺構が検出できた。検出遺構としては、弥生時代から古墳時代前期の竪穴住居5基(SC-20~24)、掘立柱建物1棟(SB-25)、石蓋土塙墓2基(SK-10・12)、土塙墓14基(SK-2~4、6~9、11~13・16・17・28~30)、溝状遺構8条がある。5世紀後半の遺構として、古墳1基(井戸B1号墳)、古墳周溝内付設土塙1基(SK-31)がある。古代の遺構としては、竪穴住居1基(SB-19)

がある。他に、弥生時代から古墳時代前期がおもであると考えられる掘立柱建物や堅穴住居址の柱穴が120個強ある。(Fig. 4 参照)

弥生時代から古墳時代前期の遺構からみていくことにする。堅穴住居址は、いずれも調査区の北東部に分布し、墓地とは切り合ってなく、南側へ延びている。居住域と墓域が分かれていった可能性があるが、大擾乱が境目にあるため施設があったか否かはわからない。堅穴住居址はいずれも方形プランをもつものであるが、擾乱および古墳周溝によって切られ、完存しているものはない。遺存状態はSC-20・21が床面のみで、他は30cm前後である。墓地群は石蓋土塙墓・木棺墓・土塙墓からなり、主軸方位を東西方向にもつものが多い。また、水銀朱とベンガラが検出できたものが5基(SK-2・6・9・11・13)、ベンガラが検出できたものが5基(SK-7・8・10・12・28)と赤色顔料を入れたものが多いのも本遺跡墓地群の特徴といえよう。木棺墓(SK-29)、SK-4・16は擾乱および削平によって遺存状態は悪いが、他は30cm前後と残りが良い。ほとんどの墓は無遺物であるが、SK-2で銅鏡、SK-12で鉄器が出土している。なお、SK-16は、方形に巡るSD-15の中央部に位置していることから低墳丘古墳の主体部の可能性があるといえよう。

5世紀後半の古墳は周溝の一部を検出したのみであるが、円筒および家形埴輪、須恵器人壺・高壺など好資料を得ることができた。

遺構検出面が新期上部ロームの上部であることから、先土器時代の遺物包含の可能性が高いと考えられたので、遺構の調査が終了したG-3・4区を掘りさげたところ、繩石刃が出土し、先土器時代細石刃文化期の包含層が遺存していることがわかった。しかし、G-4区の南側は遺物が少ないため、遺構調査が終わったF-4~7区、E-4・5区について、先土器時代の調査を行なった。G-5~7区は、台地が傾斜しており、先土器時代の遺物は包含されていないと考えられる。E-6・7区、D-4・5区は包含層が削平されている。またG-2区は魔土置き場、C-1・2区、E・D-1・2区は、遺構調査が終了していなかったため先土器時代の調査はできなかった。(Fig. 5 参照)

第4章 調査の記録 —先土器時代—

1. 出土層位

本遺跡が所在する丘陵は、南から北へ延びている。発掘区の中では、遺構検出面がC-2区、D-4・5区、E-5～7区が標高14.20m前後と高く、G-3・4区では標高14mと低くなっている。このことは、本調査区が、丘陵の高い所から西に傾斜している位置にあたると考えられる。

本遺跡の層順は、20cm前後の盛上があり、場所によっては薄くクロボク状の黒褐色土があり、その下に漸移層として暗茶褐色土が堆積している。その下に、G-3・4区では7～15cm、F-4～7区では10～15cm、E-4・5区では20cm前後の厚さをもつ茶褐色ローム（第4層）が堆積している。その下は、70cm前後の淡褐色ロームが堆積しており（第5・6層）、第5層と第6層の境は不明瞭であるが、第6層は、第5層よりも明るく、粘性が強い。その下には、45cm前後の赤褐色ローム（第7層）が堆積している。第7層は粘質部が部分的にあるが、パサバサ

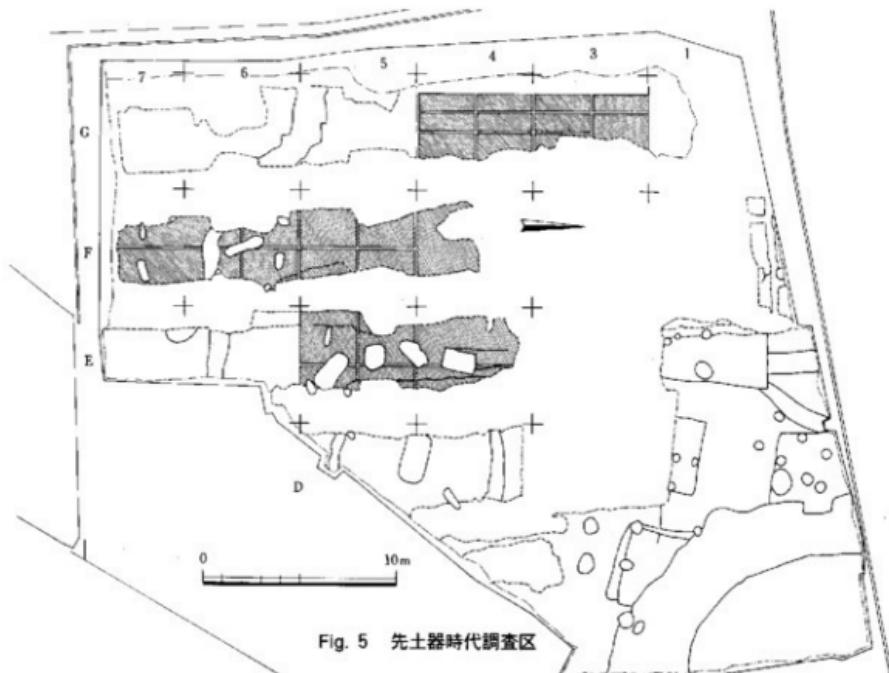


Fig. 5 先土器時代調査区

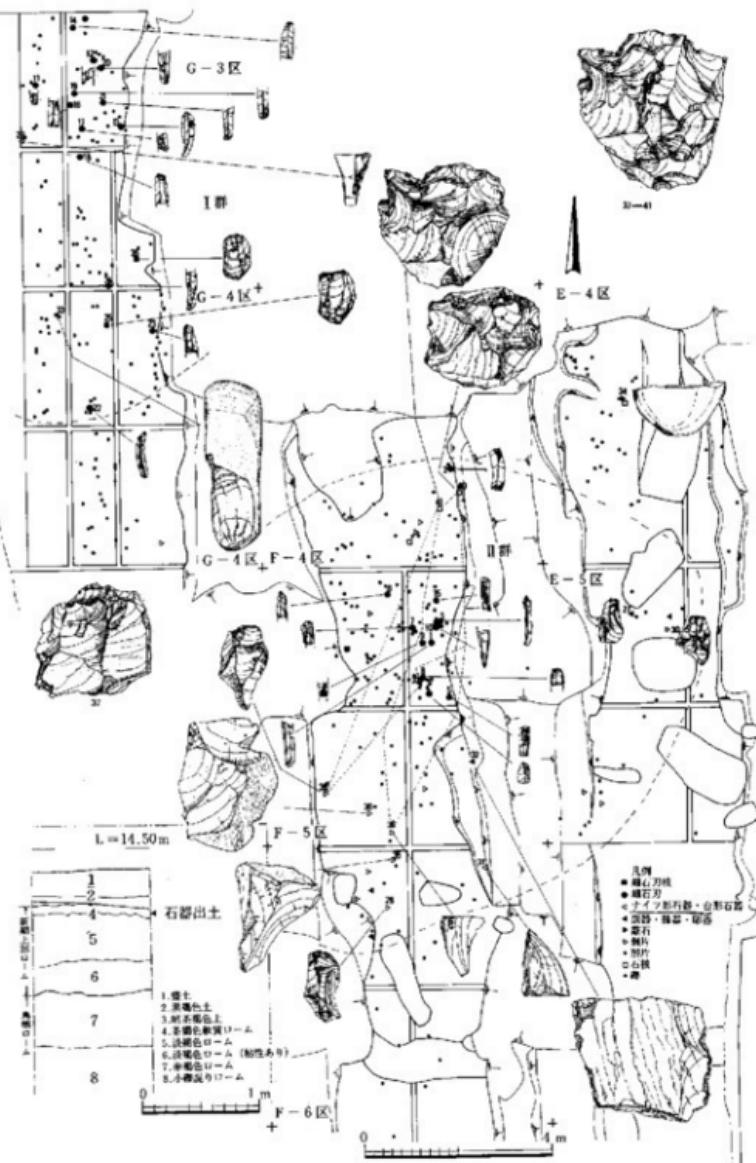


Fig. 6 先土器時代遺物分布図および土層柱状図

している。その下の第8層は、小礫が多くはないが含まれている。以下、標高12.60mまで確認したが湧水のため、土層確認は断念した（Fig. 6 参照）。第4層から第6層は新期上部ロームに、第7層と第8層は、鳥栖ロームに対比されると考えられる。

先土器時代の遺物は、G-3・4区では標高14.09～13.90mの間に、F-4～6区では、標高14.22～14.04mの間で出土した。また、遺物出土層位は第4層の中位で、5cm内に集中している。ただF-4～6区、E-4・5区では、くすんだ黒曜石製の剥片・削片が第4層下面で出土しているが、文化層は、分けず同一文化層とした。なお、第5層中においても、小礫・炭が分布しているため掘り下げたが、遺物は出土しなかった。

2. 出土遺物

出土遺物は、細石刃24点、細石刃核3点、台形石器1点、ナイフ形石器1点、彫器1点、敲石2点、削器5点、剥片15点、削片135点、石核4点の計190点の人工遺物がある。他に小円礫、炭が多数出土している。石材としては、良質の漆黒の黒曜石を素材としたものが多いが、良質のくすんだ黒曜石を素材とした剥片・削片が約20%前後、古銅輝石安山岩を素材としたものが15%前後あり、他に石英素面岩製1点、石英1点、その他1点がある。以下、出土遺物について、各器種ごとにみていくことにする。

細石刃 (Fig. 7、1～24) 1・3～10・15は、F-5区で集中して出土し、2はF-4区から出土した。11～14・16～21は集中し、24は離れてG-3区から出土した。22・23はG-4区の出土である。いずれも良質の黒曜石を素材としている。完存例は5点で、基部がないもの、先端部がないもの、基部のみのもの、基部と先端がないものがある。幅は5mm前後のものが多いが、11・22のように3.5mmのものもある。22・23は左縁辺に二次加工がみられ、18の両縁辺には使用によると考えられる刃こぼれがみられる。

細石刃核 (Fig. 7、25・26) 25はG-4区、26はG-3区と近い位置から出土している。もう1点F-5区で出土しているが、細片であるため図化しなかった。25・26は漆黒、他1点はくすんだ黒曜石を素材としている。25は側面加工が施され、丁寧な打面調整が加えられたあと、細石刃が剥出されている。なお、打撃甲板面と細石刃剥出面の角度は60°である。細石刃剥出面には10枚の細石刃剥出痕がみられ、左から右へ剥出されたことがわかる。26は小角礫を素材とし、幅1cm前後の平らな面を甲板面として、片側面は甲板面および基底部から、他側面は基底部から剥離加工を加え、打面調整を施したあと細石刃を剥出している。なお、打撃甲板面と細石刃剥出面の角度は80°である。細石刃剥出面には3枚の細石刃剥出痕がみられ、2枚の剥出失敗痕があり、以後の細石刃剥出を放棄したと考えられる。これも細石刃剥出は、左から右へといっていると考えられる。

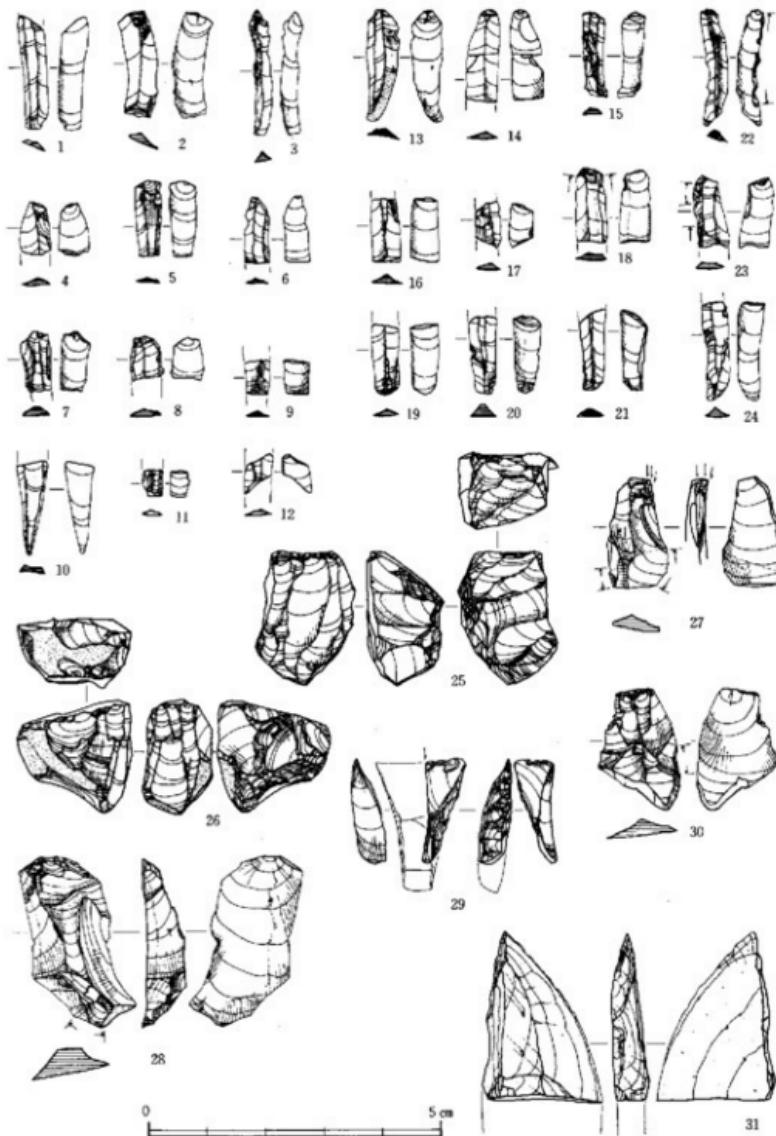


Fig. 7 出土石器実測図 (1)

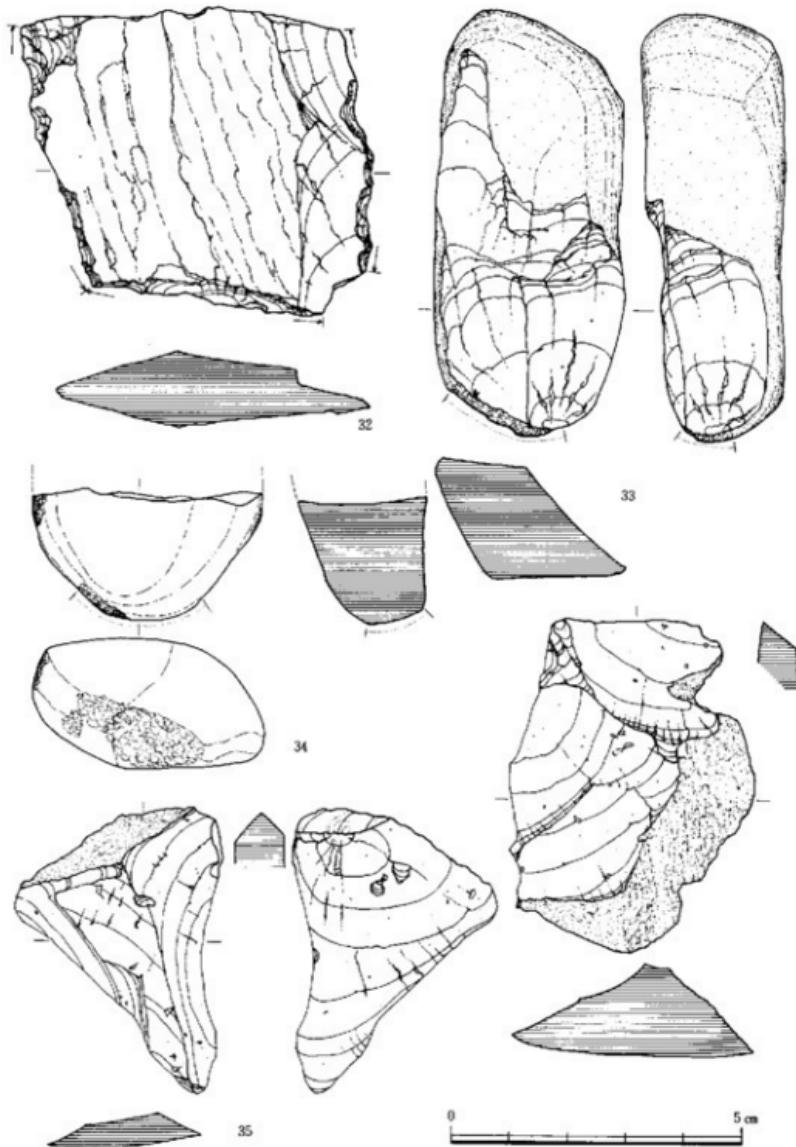


Fig. 8 出土石器実測図 (2)

彫器 (Fig. 7、27) E-5 区の出土で、良質の黒曜石製剝片を素材とし、基部を主要剥離面から折り取り、この面の右縁辺に 3 回の打撃を加え製作している。なお、両縁辺の先端部近くに使用によると考えられる刃こぼれがみられる。

削器 (Fig. 8、32) F-5 区の出土で、石英素面岩を素材としている。両側縁に二次加工を加え、刃部をつくり出している。

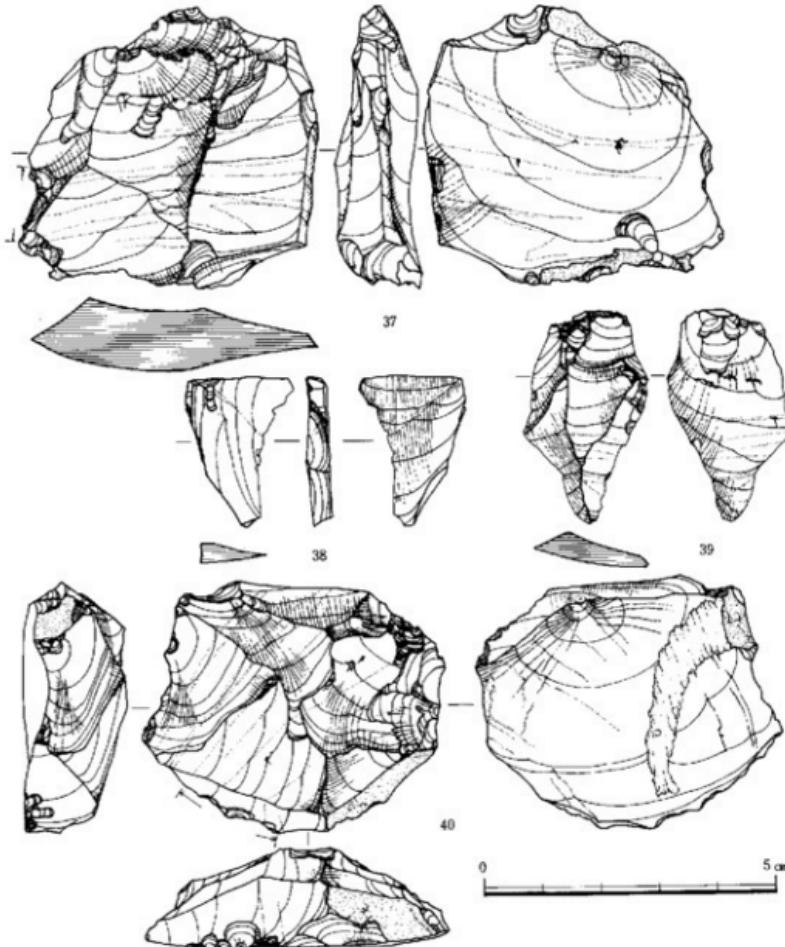


Fig. 9 出土石器実測図 (3)

敲石 (Fig. 8、33・34) 33はG-4区、34はE-4区から出土している。33は、長めの縦の端部に敲打痕がみられる。34は石英の円錐を素材としたもので、端部に敲打痕がみられる。

ナイフ形石器類 (Fig. 7、29・31) 29はG-3区、31はF-6区から出土している。29は良質の黒曜石製の剥片を素材とし、打点に主要剥離面から刃溝し加工を施した台形石器であるが、片側縁は欠損している。なお、直線的な刃部には刃こぼれがみられる。31は、古銅輝石安山岩製の横剥ぎの剥片を素材としたナイフ形石器である。本遺跡は、細石刃文化期の遺物が主体をなしているが、この2点は明らかにナイフ形石器文化期のものである。出土層位からみる限り、他の遺物と同じ層位の同じレベルで出土しているが、共伴するとは考えられない。なんらかの理由で持ち込まれたものといえよう。

剥片および剥片石器 (Fig. 7・8、28・30・35・36) 30はE-5区、28・35はF-6区、36はF-5区から出土している。28・30は良質の黒曜石、35・36は古銅輝石安山岩を素材としている。28は、比較的厚みのある剥片の先端部の一部に二次加工を加えている。30は、剥片の縁辺の一部に二次加工が加えられている。

接合遺物 (Fig. 9・10・11、37~41) 40・41

はF-4区、37~39はF-5区から出土している。黒曜石の角錐を素材としている。37は、41から幅広く剥出されている。自然痕が残る打点にはパンチ痕がみられる。また、剥片の縁辺の一部には二次加工が加えられ、削器として使用されている。38は、41から剥出された不定形剥片である。39は、37から剥出された剥片である。40は、41から幅広く剥出された剥片で、打点には2回のパンチ痕がみられる。また、厚い剥片の先端部には二次加工が施され、削器として使用されている。41は、剥出終了後の不正形の残核である。最初に39が剥出され、次に37が同じところから剥出されている。その後、 180° 打点を変えて40から剥片を剥出し、 90° 左にあり、

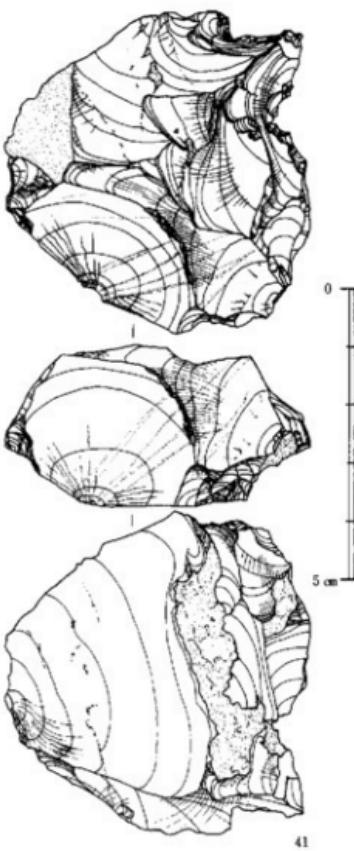


Fig. 10 出土石器実測図 (4)

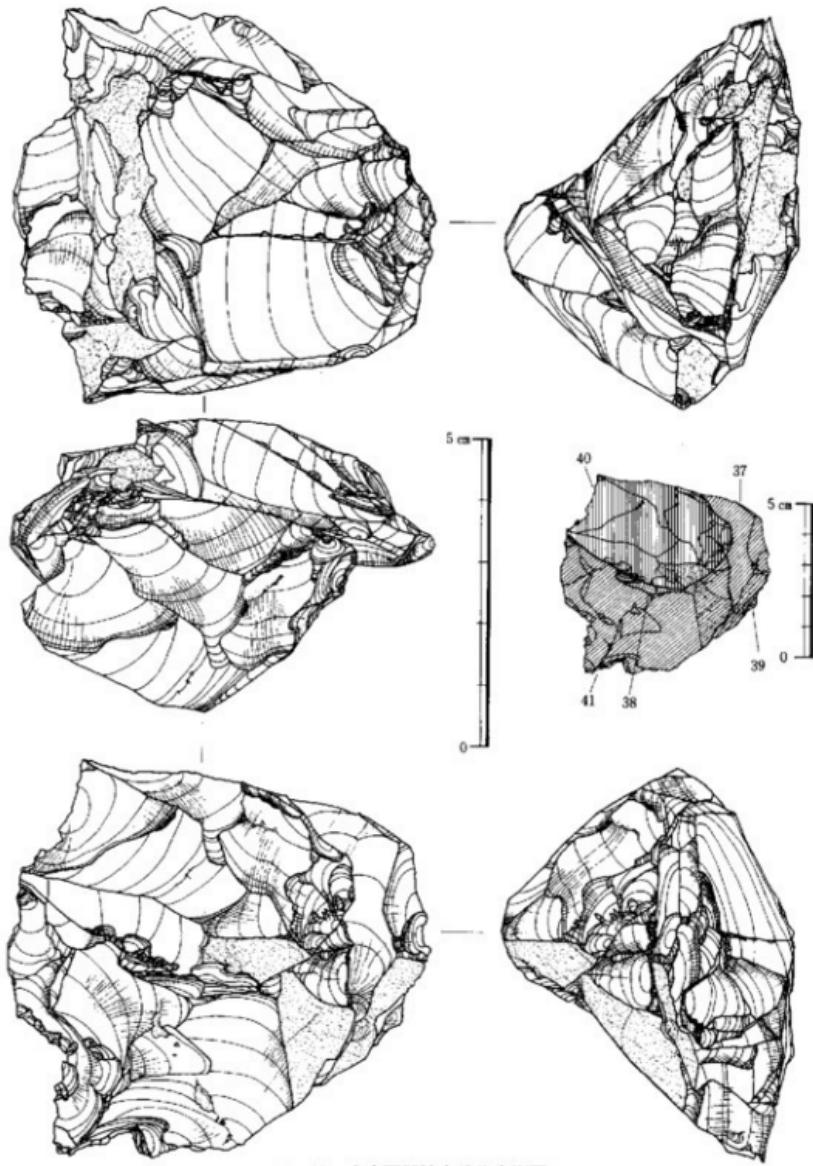


Fig. 11 出土石器接合状態実測図

37を剥出した後を甲板として40を剥出している。その後、180°打点を変えて38を剥出し、90°左にふり、剥片を剥出している。

3. 遺物分布について (Fig. 6 参照)

本遺跡での遺物分布はばらつきが多いが、G-3・4区とF-5区を中心とした遺物集中区がみられ、前者をI群、後者をII群とする。I群の遺物集中区は、細石刃13点、細石刃核2点、敲石1点、削片29点などからなっている。そのなかでもG-3区の北側に細石刃が集中し、細石刃核・敲石はG-3・4区の境目から出土し、分布を異にしている。

II群は、細石刃11点、細石刃核1点、剝器5点、彫器1点、剥片12点、削片72点、石核2点などからなっており、F-4区にとくに細石刃が集中し、削片も多い。II群をこの広さにしたのは、37~41の接合資料があるためである。なお、接合遺物は南北7m間に分布している。

I群が、石器素材として良質の漆黒の黒曜石を素材としているのに比較し、II群は、漆黒およびくすんだ黒曜石、古銅輝石安山岩を素材として用いている。I群・II群とも同時期のものと考えられるが、当時の場の利用の差が居住者の差なのか興味がもたれる。

前述したが、I群は、G-2区に広がっており、C・D-1・2区には別の遺物集中群があると考えられるが、調査期間がなく残念である。

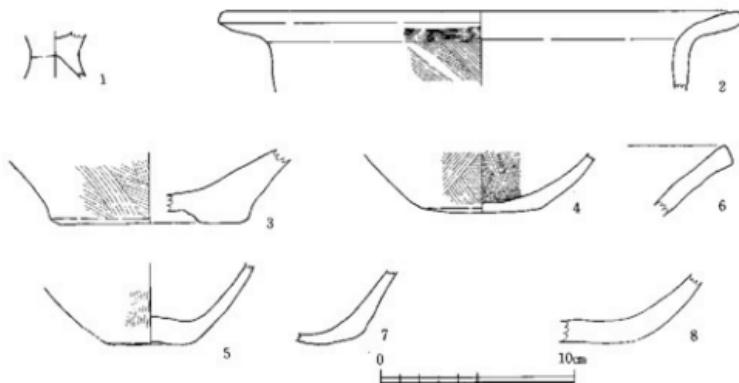


Fig. 12 第22・23号竪穴住居址出土土器実測図

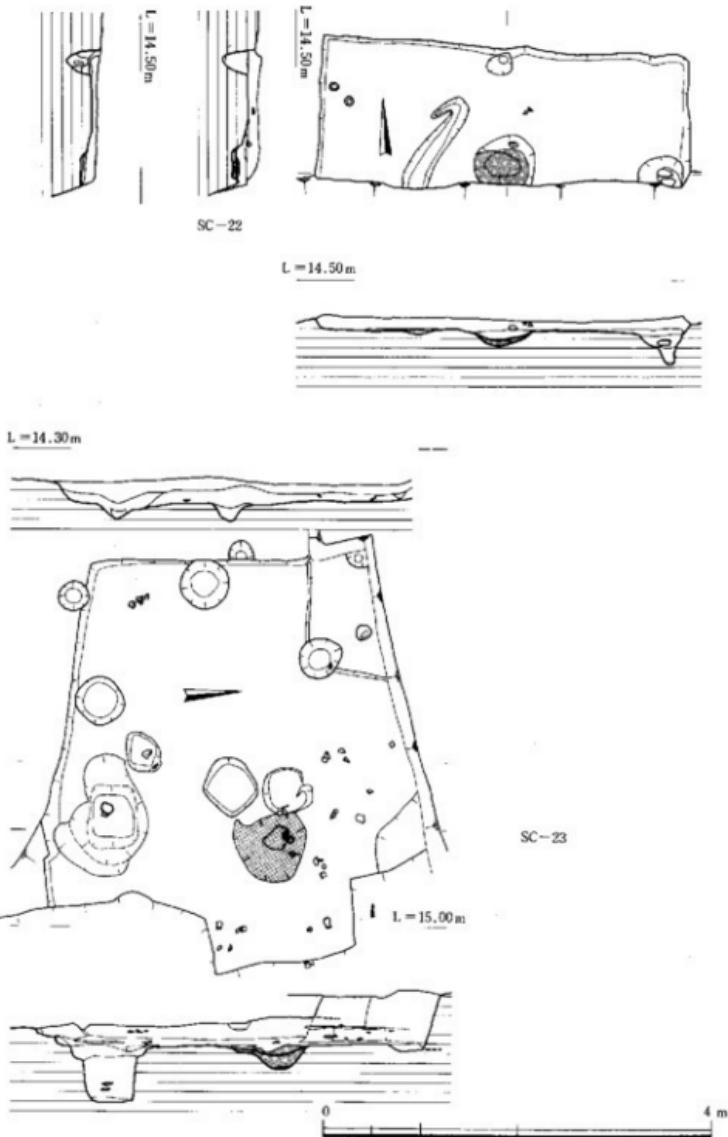


Fig. 13 第22・23号整穴住居址実測図

第5章 調査の記録

—弥生時代から古墳時代前期の遺構と遺物—

1. 竪穴住居址 (SC)

本遺跡では、6基の竪穴住居址を検出したが、SC-19は、出土須恵器から7世紀後半から末のものであるので、第7章で述する。また、SC-20・21もSC-19と切り合っているので第7章で述するので、ここでは、他の3基の住居址についてみていくことにする (Fig. 4 参照)。

(1) SC-22 (Fig. 12・13)

SC-20・23・24の間に位置する竪穴住居址であるが、南側を搅乱によって破壊されている。東西3.8m×南北1.5m+aの方形プランをもつもので、遺存状態は14cm前後である。黒色から茶褐色の粘性のない土を覆土とし、北壁から南に1.2m、南北でみるとほぼ中央部に浅い掘り込みをもつ炉がある。なお、炉壁は焼けており、住居址の床面はたたきしめられ、壁はほぼ直に立ち上がっている。北壁と東壁に主柱穴が残っており、4本柱を主柱穴とする竪穴住居址と考えられる。

出土遺物としては、少量の土器の細片がある。1 (Fig. 12) は、高坏の軸部である。本竪穴住居址は、古墳時代前期のものか。

(2) SC-23 (Fig. 12・13・22)

SC-22の北側に位置し、東側を井戸B 1号墳の周溝とSB-25に切られており、北側は調査区外のため未掘であるが、1辺5m前後の方形プランをもつ竪穴住居址である。遺存状態は50cm前後で、ローム混じりの黒褐色土を覆土としている。炉は住居址のほぼ中央部に位置し、径50cmの円形で擂鉢状に20cm掘られている。炉壁は焼けており、焼土は住居址床面まで堆積している。床面はたたきしめられており、壁はほぼ直に立ち上がっている。なお、西北部に床面から13cmの高さをもつベットがあり、コの字、またはL字状のベットをもち、2本の主柱穴からなる竪穴住居址と考えられる。

出土土器 (Fig. 12、2～8) 本住居址からは比較的多くの土器が出土したが、細片のみである。そのなかで固化できたのが2～8で、4は壺形土器、他は壺形土器と考えられる。いずれも灰褐色から黄褐色を呈し、胎土には石英粒を含み、堅綴で焼成も良い。器表面はハケ目調整が施され、内面は口縁部から内側にナデ調整が施されている。3・5の底部は平底で少し上底ぎみになっているが、4・7・8は丸みをもっている。

出土鉄器 (Fig. 22, 27・28) 27は主柱穴出土で、直線的な背をもち、先端部が外反していること、他縁が刃部状をなしていることから鉄鎌と考えられる。28は、3mm前後の厚みをもつ鉄

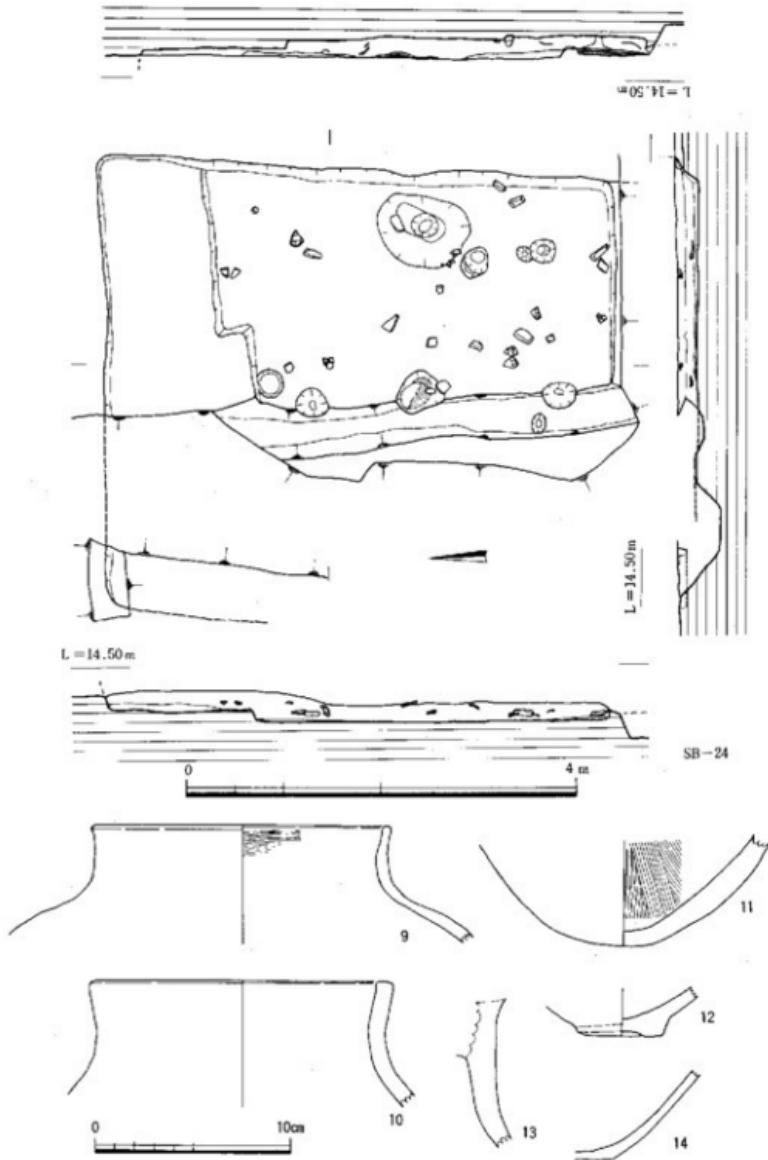


Fig. 14 第24号整穴住居址および出土土器実測図

器片で板状をなしている。

以上の出土土器と住居址の形状・型から、本住居址は、弥生時代後期後葉と考えられる。

(3) SC-24 (Fig. 14)

SC-22の西側に位置する堅穴住居址で、SD-18・26・27を切っている。南・西側の大部分を搅乱によって破壊されているが、1辺6m前後の方形プランをもつ堅穴住居址である。遺存状態は30cm前後で、黒色から茶褐色土を覆土としている。床面はたたきしめられており、壁は直に立ち上がっている。北側と南側にベットをもっているが、南側は搅乱によって破壊されている。相対する二面、またはコの字形のベットをもち、2本の主柱穴からなる方形の堅穴住居址である。

出土土器 (Fig. 14, 9~14) 9~11は壺形土器、12・14は甕形土器、13は高坏である。本住居址も出土した土器が多いが、遺存状態が悪く、器表面が剥離しており、器面調整がわかりにくい。いずれも赤褐色から灰褐色・黄褐色を呈し、砂粒・石英粒を含み、堅緻で焼成も良い。

2. 掘立柱建物 (SB)

本遺跡では多数の柱穴が検出できたが、搅乱および各遺構との切り合い関係と、堅穴住居址の柱穴の可能性も考えられることから、第25号掘立柱建物 (SB-25) 1棟を検出したのみである。

SB-29は調査区の北側に位置し、SC-23を切っている。柱穴 (SP) 1~6からなる1×2間の建物で、各柱穴の遺存状態は40~60cmと比較的良く、黒色から黒褐色土が覆土となっている。柱穴中心間の距離は、SP-1・2間が1.5m、SP-2・3間が1.6m、SP-1・4間が1.66m、SP-4・5間が1.7m、SP-5・6間が1.4m、SP-3・6間が1.86mである。1×2間の建物であること、覆土が土塙群や堅穴住居址の覆土と同じであること、SC-23との切り合い関係から弥生時代終末期のものか。

3. 石蓋土塙墓

(1) SK-10 (Fig. 16)

調査区中央付近に位置し、低墳丘古墳と考えられるSD-15の東側に位置する。主軸をN-129°-Eにとる。墓塙は全体に削平を受けているが、南側角はわずかに残存している。この部分からみると墓塙は長さ約2.3m、幅約1.3mの隅丸方形の平面形が推定される。

蓋石は略長方形に加工した泥岩質の板石3枚を使用している。このうち2枚は削平時に一部欠失したものと思われる。蓋石は土塙両端をおおいきれず、南北側の隙間を小さな割石で埋めている。東端は水成粘土で目張りを施している。蓋石裏面全面に赤色顔料が付着している。

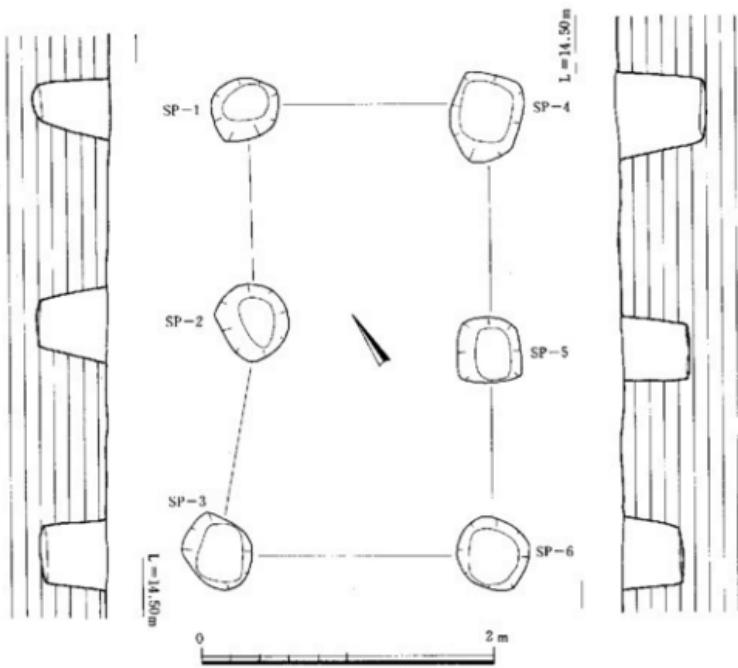


Fig. 15 第25号掘立柱建物実測図

土塙は上端で長さ約1.9m、幅約0.5mを測り不整形である。床面は長さ約1.7m、幅約0.4mを測り中央がややふくらんでいる。深さは平均して約0.3mを測り、北東の床が長さ約30cm、高さ約5cm高くなっている。小口壁は北東で約70°傾斜し、南西ではほぼ垂直に立ち上がる。床面直上には全面に赤色顔料が薄く分布し、これは北東側に顯著である。顔料はベンガラ（酸化鉄）である。頭位方向は、北東側の枕状の高まりや顔料の散布状態からみて北東位と推定される。

(2) SK-12 (Fig. 16・21・22)

調査区の中央付近に位置し、低墳丘古墳と考えられるSD-15の北側に位置する。主軸はN-41°-Eである。削平が蓋石上面まで及んでいるため、墓塙の規模や形態は明確でない。

蓋石は泥岩質の板石2枚を使用している。つなぎ目は板石片でおおっている。石蓋裏面には少量の赤色顔料が付着している。

土塙は上端で長さ約1.8m、幅約0.8mを測り不整形を呈する。床面では長さ約1.6m、幅は

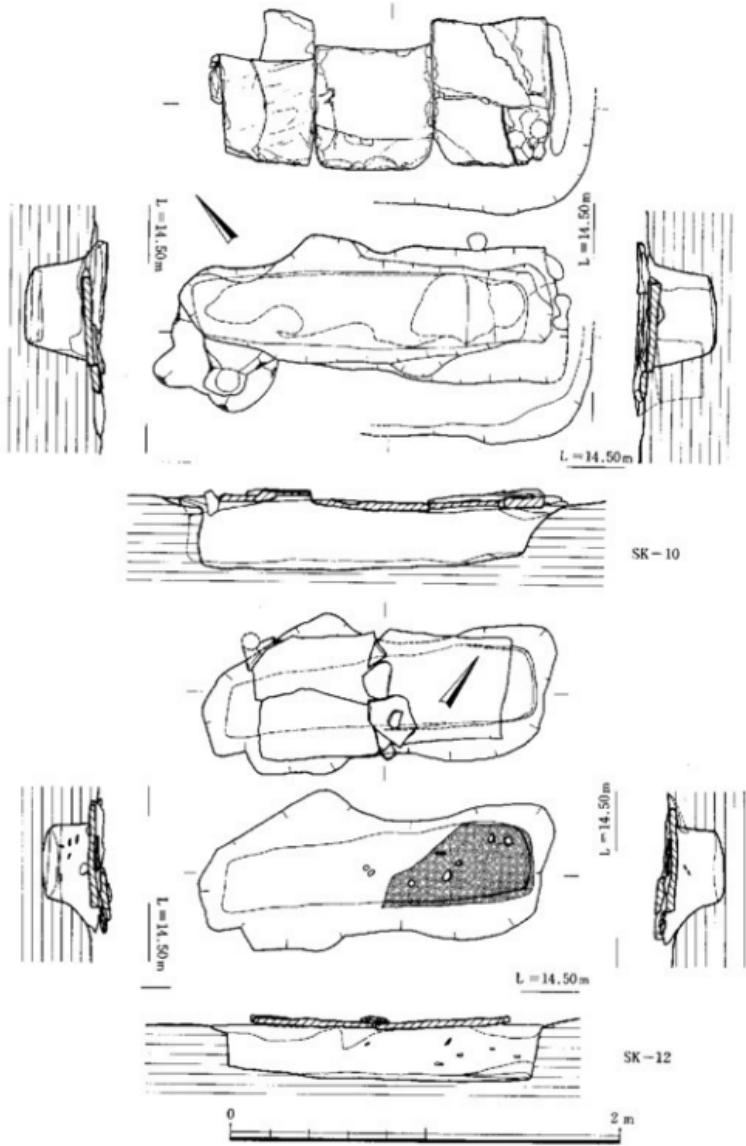


Fig. 16 石蓋土塚墓実測図

南西側で約0.3m、北東側で約0.4mを測る。深さは南西で約0.2m、北東で約0.25mを測る。土塙内の北東側床面直上では厚さ2~3cmの赤色顔料を含む砂が約0.4×0.6mの範囲に分布し、それを厚さ2~3cmの明黄褐色粘土がおおう。顔料はベンガラ（酸化鉄）である。これから頭位方向は北東位と考られる。

本遺構では、土塙内流入土から若干の土器細片と鉄器が出土している。土器片（15）は、弥生時代後期中葉に位置づけられる。土器片は直接、本遺構に伴うとは考えられない。鉄器（29）は板状を呈している。

4. 土塙墓（SK）

(1) SK-2 (Fig. 17)

調査区南端に位置し、SK-3の西側約1mに継列するように位置する。主軸をN-85°-Eにとる。

墓塙は、西側を中心に削平を受けているが、東側の残存部から墓塙は長さ約0.85m、最大幅約0.25mの隅丸方形と推定される。東端より約0.25mの部分でわずかなくびれが認められる。床面は長さ約0.8m、幅は東側で約0.2m、西側で約0.1mを測る。深さはくびれ部から東で約0.1m、西で約0.13mを測る。

埋土中東側で床面から約5cmの位置で黄褐色土を染めるようななかたちで赤色顔料が幅約0.1mに分布している。さらに東側床面直上にも約0.2×0.2mにわたり薄く分布している。顔料はベンガラ（酸化鉄）と朱である。頭位方向は、東側の枕状の高まりや顔料の散布状態からみて東位と推定される。

本遺構では、ベンガラの分布範囲内で、朱にくるまれた状態の銅鏡と思われるものが検出されており、銅製品が存在した可能性を示している。

(2) SK-3 (Fig. 17)

調査区南端に位置し、SK-2の東側約1mに位置する。主軸はN-71°-Eである。

墓塙は全体に削平されているが、検出面での平面形は長さ約1.1m、幅約0.33mの隅丸方形を呈する。床面は長さが約1.04m、幅約0.25mを測る。深さは東側で約0.24m、西側で約0.26mを測る。頭位方向は、東側床面の高まりからSK-2と同じ東位と考えられる。

本遺構では、赤色顔料は検出されなかった。

(3) SK-4 (Fig. 17)

調査区南東、SK-3の東側3mに位置する。主軸はN-84°-Eと推定される。墓塙は、西側を搅乱により完全に削られており東側部分を残すのみである。現存では、東西約0.7m、南北約1.55mであり長軸は墓塙の形状より東西方向と推定される。墓塙の掘り方は2段になって

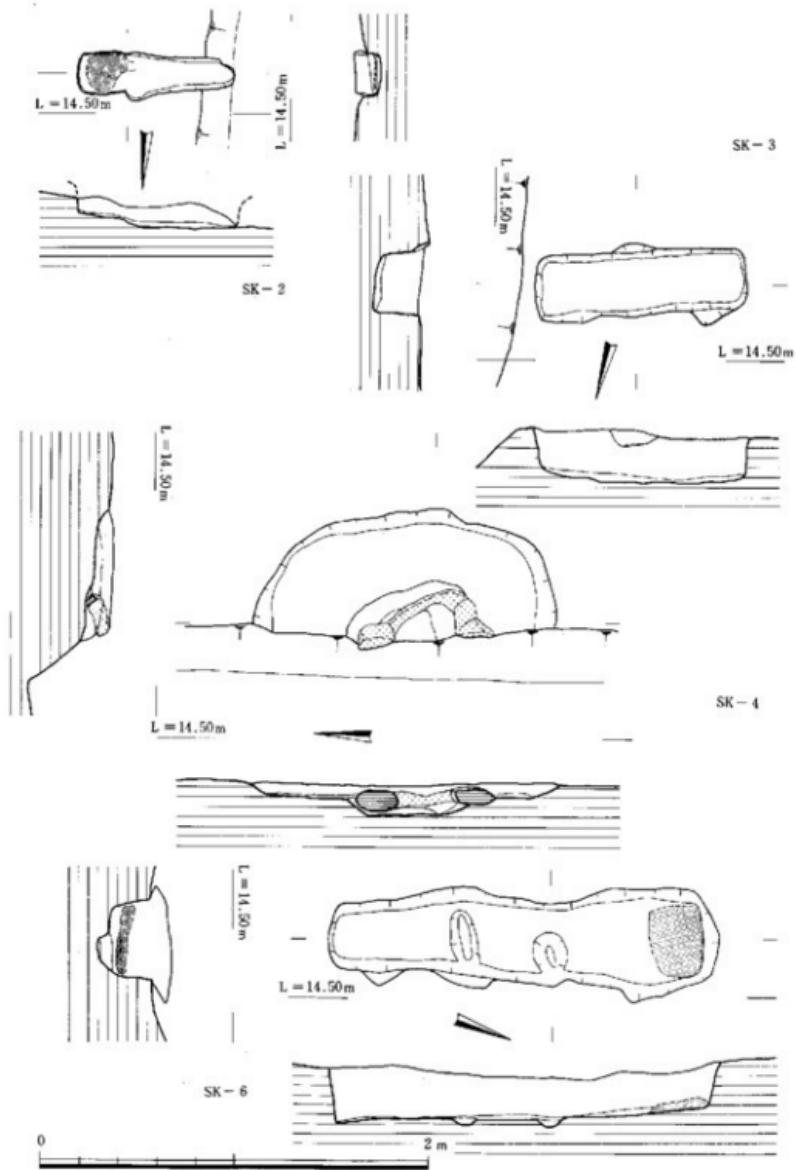


Fig. 17 第2~4・6号土塙基実測図

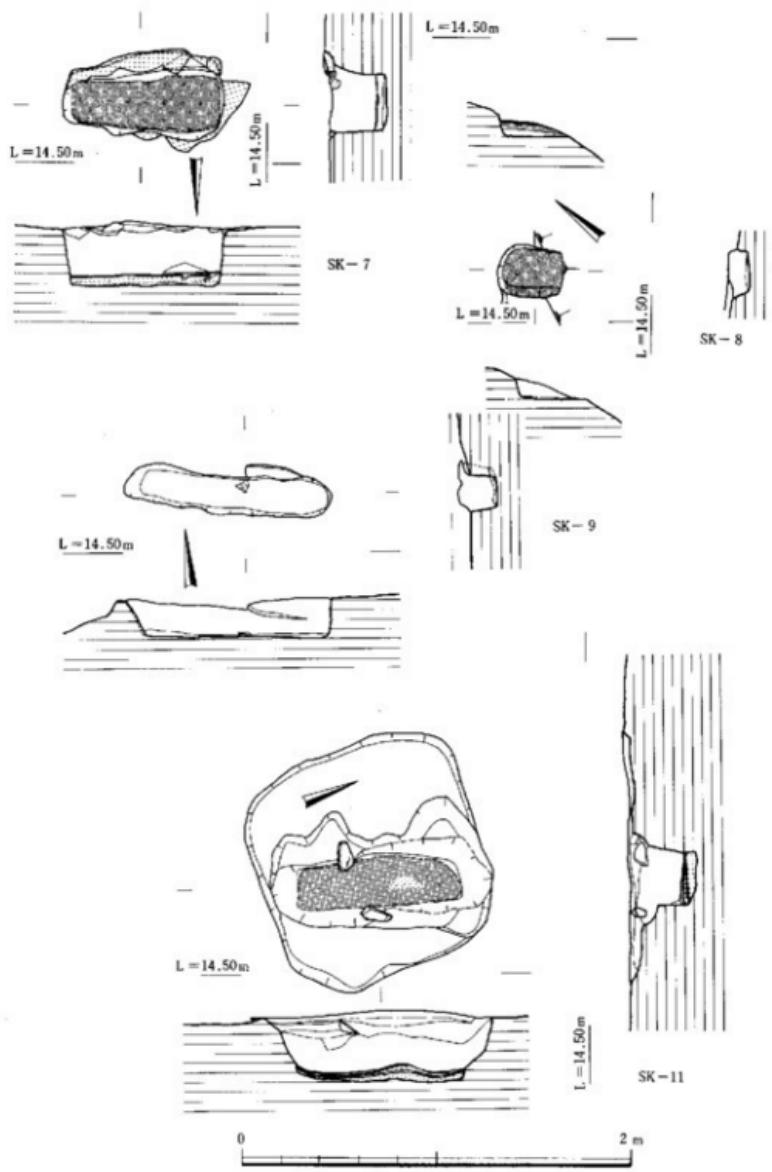


Fig. 18 第7~9・11号土塙墓実測図

おり、1段目の深さは約0.1mと約0.14mである。2段目の掘り方に沿って厚さ約0.1mの粘土が貼られている。

本遺構では赤色顔料の検出はできなかった。頭位方向も不明である。

(4) SK-6 (Fig. 17)

調査区南部、SK-7の南側約1mに位置する。主軸はN-20°-Wである。

墓塚は検出面で長さ約2.25m、幅は北西側で約0.6m、南東側で約0.4mを測る隅丸方形の平面形である。床面は長さ約1.9m、幅は北西側で約0.45m、南東側で約0.25mを測る。深さは約0.28mを測り平坦である。墓塚内北西側床面直上で約0.28×0.18mの範囲に赤色顔料が検出された。厚さは約1cmである。顔料はベンガラ（酸化鉄）と朱である。頭位方向は墓塚の平面形と顔料の分布から北西位と考えられる。

(5) SK-7 (Fig. 18)

調査区南部、SK-6の北側約0.7mに位置する。主軸はN-89°-Wをとる。

墓塚は検出面で長さ約0.83m、幅は西側で約0.4m、東側で約0.28mを側る隅丸方形である。床面は長さ約0.76mで幅は西側で0.28m、東側で0.21mを測り平坦である。深さは約0.3mを測る。墓塚内床面全面に厚さ約5cmの粘土を貼る。さらに粘土直上は全面に赤色顔料が約1~3cmの厚さで分布している。顔料はベンガラ（酸化鉄）と朱である。また、墓塚掘り方に沿って厚さ約5cmの粘土が貼られている。頭位方向は墓塚の平面形と顔料の分布から西方位と考えられる。

(6) SK-8 (Fig. 18)

調査区南部、SK-7の東側約0.7mに位置する。主軸はN-38°-Wと推定される。

墓塚は削平をうけており、特に南東側は搅乱により消失している。現存では主軸方向で約0.34m、幅約0.27mを測る。平面形は隅丸方形と推定される。床面は主軸方向で約0.31m、幅約0.23mを測る。深さは約0.1mを測り平坦である。墓塚内床面全面には、底面より厚さ約4cmの粘土、厚さ約4cmの赤色顔料、厚さ約1cmの粘土、さらに薄い赤色顔料が互層となって認められる。顔料はベンガラ（酸化鉄）と朱である。頭位方向は不明である。

(7) SK-9 (Fig. 18)

調査区中央付近、SK-10の西側約0.7mに位置する。主軸はN-100°-Eである。

墓塚は、検出面で長さ約1.07m、幅約0.2mを測り北東側に長さ約0.3m、幅約0.1mの張り出しをもつ不整形である。床面は、長さ約0.95m、幅約0.16mを測る。深さは約0.2mを測り平坦である。

墓塚床面中央部北側に7×7cmの範囲で赤色顔料を検出した。顔料はベンガラ（酸化鉄）と朱である。頭位方向は東位と推定される。

(8) SK-11 (Fig. 18)

調査区中央付近、石蓋土塙墓 SK-10 の北側約 1m に位置する。主軸は N-20°-E である。

墓塙は、2段掘りであり、1段目は南北に約 1.15m、東西約 1.15m を測る隅丸方形の平面形である。2段目は長方形の平面形で長さ約 1.5m、幅約 0.4m を測る。2段目床面では長さ約

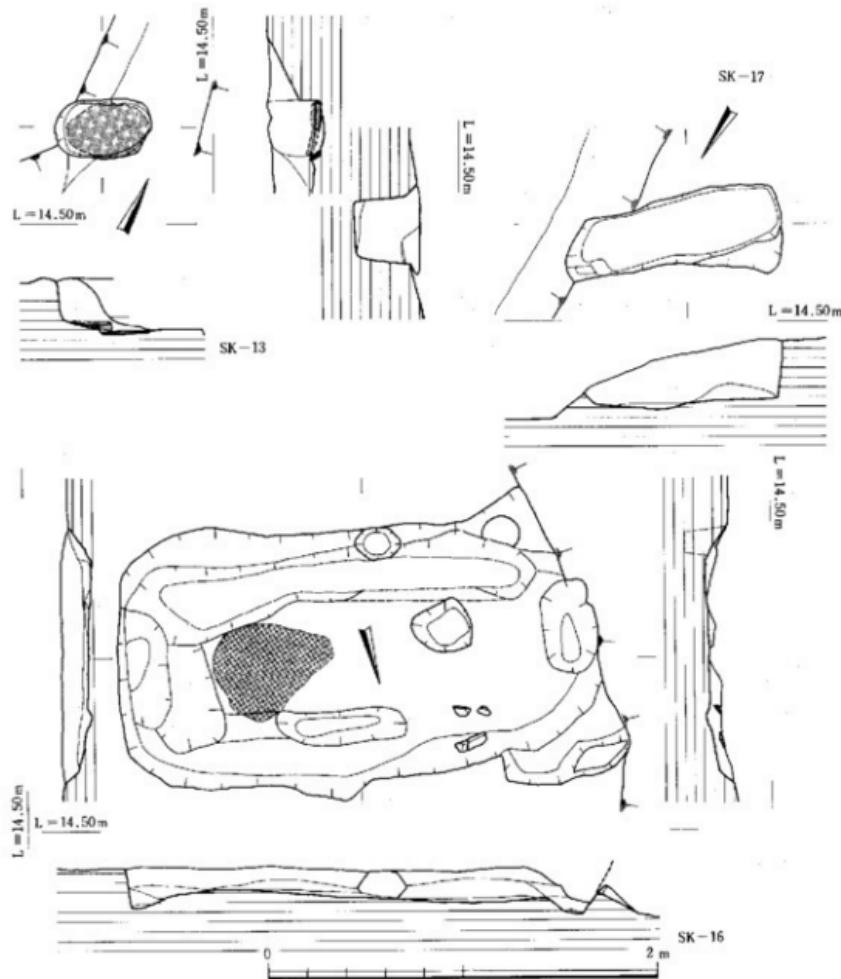


Fig. 19 第13・16・17号土塙墓実測図

0.84m、幅約0.25mを測る。検出面からの深さは約0.3mを測る。2段目床面全面にはSK-8と同様に、床面から厚さ4cmの粘土、厚さ1cmの赤色顔料、厚さ1cmの粘土、さらに2cmの赤色顔料が互層をなしている。2段目掘り込み上面には約15cmの石が2個浮いた状態で存在する。赤色顔料はベンガラ（酸化鉄）と朱である。頭位方向は、南北方向のいづれかである。

(9) SK-13 (Fig. 19)

調査区東寄り、石蓋土塚墓SK-10の東側約1mに位置する。主軸はN-65°-Eである。

墓塚は擾乱によりほとんど削られ東側は床面を残すのみとなっている。現存では長さ約0.5m、幅約0.3mの椿円形の平面形である。床面は長さ約0.4m、幅約0.25mであり検出面からの深さは約0.28mである。床面直上全面には赤色顔料が分布し、その厚さは西側で3cmを測る。顔料はベンガラ（酸化鉄）と朱である。

頭位方向は西側がわずかに枕状を呈していることから西位と推定される。

(10) SK-16 (Fig. 19・21)

調査区東部、石蓋土塚墓SK-12の東側約3.5mに位置する。主軸はN-105°-Eである。

墓塚は柱穴等により切られているが、長さ約2.5m、幅約1.25mの隅丸方形の平面形である。床面は長さ約2.3m、幅約1mと推定される。深さは約0.13mを測る。墓塚床面北東側に玄武岩石が数点あり、一部、面をそろえている。小規模な堅穴式石室であった可能性がある。床面東側中央部に床面より約5cmで微粒砂と共に赤色顔料が約0.6×0.5mの範囲に分布している。顔料はベンガラ（酸化鉄）である。頭位方向は不明である。墓塚内より土器片(22)が出土しているが、本遺構に伴うものかは不明である。

(11) SK-17 (Fig. 19・21)

調査区東部、SK-16の北東約1.5mに位置する。主軸はN-43°-Eである。

墓塚は北東側を擾乱により削られている。現存では、長さ約1.1m、幅約0.35mを測る隅丸方形の平面形である。床面は長さ約1m、幅約0.3mを測り深さは約0.27mである。赤色顔料は検出できなかった。頭位方向は不明である。墓塚内より土器(20)が出土しているが本遺構に伴うものかは不明である。

(12) SK-28 (Fig. 20)

調査区東部、SD-15に囲まれた部分の南端に位置する。主軸はN-110°-Eと推定される。

墓塚は西側を擾乱により削られている。現存では、主軸方向で約0.35m、幅約0.5mを測る。南側は柱穴により擾乱にあっており平面形は隅丸方形と推定される。床面は主軸方向で約0.29m、幅約0.2mを測る。床面全面に厚さ約2cmで赤色顔料が分布している。さらに顔料の上面東側、約0.16×0.25mにわたり厚さ約4cmの粘土が分布している。頭位方向は不明である。

(13) SK-29 (Fig. 20)

調査区中央付近、石蓋土塙墓 SK-12 の北側約 1 m に位置する。主軸は N-11°-E である。

墓塙は全体に削平をうけ柱穴により擾乱にあっている。検出面での長さは約 1.57 m、幅は北側で約 0.94 m、南側で約 1.14 m を測る。床面は長さ約 1.54 m、幅は北側で約 0.88 m、南側で約 1.09 m を測る。深さは北側で約 0.15 m、南側で約 0.11 m、中央平坦部で約 0.05 m である。南北両端の窪みは木口板固定の為の掘り方と考えられ、本遺構は木棺墓と推定される。顔料などの検出はみられず、頭位方向も不明である。

(14) SK-30 (Fig. 20)

調査区中央付近、石蓋土塙墓 SK-10 の南東に近接して位置する。主軸は N-113°-W である。

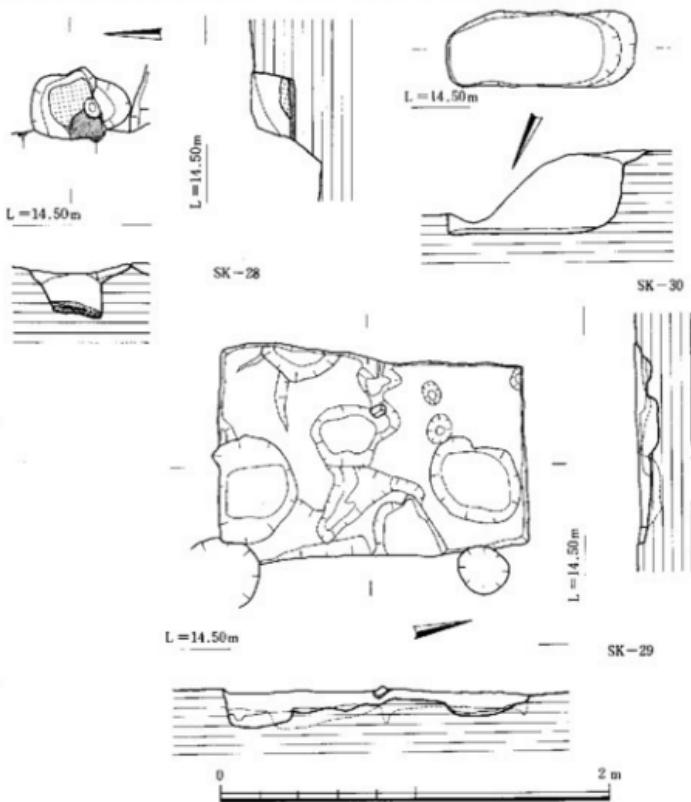


Fig. 20 第28~30号土塙墓実測図

墓壇は北東側を搅乱により底部痕跡を残すのみとなっている。現存では長さ約0.97m、幅約0.38mを測る隅丸方形の平面形である。床面は長さ約0.8m、幅約0.36mを測り平坦である。深さは0.37mを測る。顔料の検出はみられなかった。頭位方向は不明である。

5. その他の遺構と出土遺物

弥生時代後葉から古墳時代前期の遺構として、竪穴住居址・掘立柱建物・石蓋土塙墓・土塙墓について、第5章の1から4で述べてきた。本遺跡では、前述の各遺構と覆土と同じく溝状遺構や掘立柱建物・竪穴住居址の柱穴がある。ここでは、これらの遺構や出土遺物についてみていくこととする。(Fig. 4 参照)

(1) 溝状遺構 (SD) (Fig. 4・21)

溝状遺構としては、SD-1・5・15・18・26・27・32の7条がある。SD-1は、調査区の南西部に位置する幅1m強、深さ50cm弱の弧状をなす溝である。

SD-5は、調査区の南部に東西に走る幅8m強、皿状に10cm弱落ち込む溝である。

SD-15は、調査区中央部に位置する幅60cm前後、深さ8cm前後の溝である。1辺8m前後でコの字状になっているが、東側は搅乱によって切られており、方形に巡っていた可能性がある。また、この溝による区画の中央部にSK-16があることから、低墳丘古墳と考えられる。

SD-18はSC-22の北側に位置し、東西に走る幅60cm前後の浅い溝で、東側を井戸B1号墳

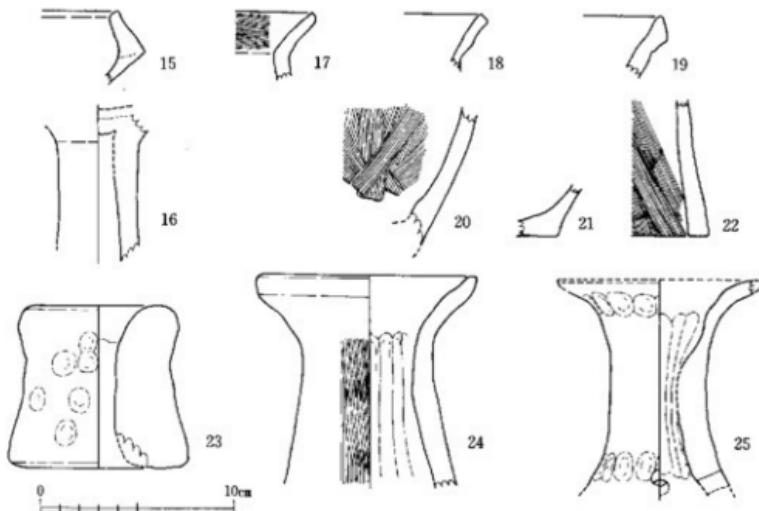


Fig. 21 各遺構出土土器実測図

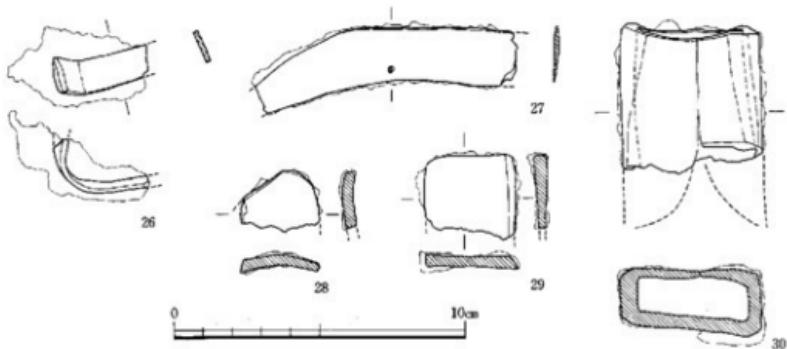


Fig. 22 出土鉄器実測図

に、北側を SC-24 に切られている。SD-26 は調査区の北側に位置し、南西から北東に走る幅 1m 弱、深さ 5cm の溝で、SC-23・24 に切られている。SD-27 も調査区の北側に位置し、南北方向に走る幅 1m 強、深さ 5cm の溝で、南を SC-24 に切られている。

SD-32 は、調査区の北西部に位置する溝で幅 50cm 前後の浅い溝である。

(2) 柱穴および出土遺物 (Fig. 4・21・22)

柱穴は、調査区の北東部・中央部・北西部に固まって検出された。北東部の柱穴は概して径 50cm 前後のものが多く、遺存状態も 30cm 前後と良く、柱痕跡も 30cm 前後あり、堅穴住居址の柱穴が多いと考えられる。また、井尻 B 1 号墳の周溝の覆土中では柱穴が確認できないことから、古墳築造以前のものと考えられる。調査区中央部の柱穴群は径 30cm 前後のものが多く、柱痕跡は 15cm 前後であり、遺存状態も 30cm 前後と良い。いずれも掘立柱建物の柱穴と考えられるが、南北に走る搅乱溝のため、建物としてまとめることはできなかった。北西部は遺存状態が 10cm 前後と悪く、柱穴と認めることができるのみである。

出土遺物 (Fig. 21・22) 16~18・21・23 は、北東部柱穴群の各柱穴から出土した土器である。23 が、器高 7.3cm、底径 9.2cm、受け部径 7.6cm の器台で、他は臺形土器の口縁部と底部の破片である。30 は、北東部柱穴群の柱穴から出土した鉄斧の基部で、刃部は欠損している。

(3) その他の出土遺物 (Fig. 21・23)

24・25・31 はいずれも井尻 B 1 号墳周溝内の出土である。24・25 は、出土位置から SC-23 の遺物の可能性が高い。24・25 は器台で、24 の器表面はナデ調整後、ハケ目調整が、受け部は横ナデ調整が施されており、内面のクビレ部下は指ナデ痕が残っている。31 は、小豆色凝灰岩ホルンフェルス製の両刃の石製穂摘具で、穿孔は表裏から行なわれている。

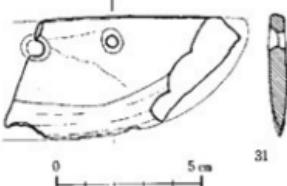


Fig. 23 出土石庖丁実測図

第6章 調査の記録 —古墳と出土遺物—

1. 古墳について

(1) 調査前の状況

調査区の北東端で発見したものであり、表土除去後に周溝の一部を検出し、古墳の存在を確認した。調査前には古墳の存在を示すような地形の高まりや周溝の落ち込み等はまったく認められなかった。古墳の立地する地点は、南北に延びる丘陵の中央部にあたり、周辺のゆるやかな地形のなかでもわずかに高い部分といえる。後述するように江戸～明治期ころまでは付近に古墳の存在が確かめられていた。しかし、調査期間中に地元の方々から話を伺ってみたが、この周辺に古墳の存在を確かめられるような事実はなんら得ることができなかった。墳丘の削平は相当早い時期に行なわれ、1940年代にはすでに存在していなかったものと推定される。

調査区内で検出した周溝は一部であり、墳形や規模も不明確であるがその延長は隣接する宅地、雑居ビル、銀行の駐車場などの下部に埋没していると推定される。

なお、本古墳は後述するように記録に残る「井尻大塚」古墳である可能性があるが、現状ではなお確定することが困難であるのでこの名称を用いることは避けたい。本報告ではとりあえず「井尻B 1号墳」と仮称しておきたい。

(2) 墳丘、周溝

表土を除去した後、地山である淡褐色ローム（新期上部ローム）を掘り込んでいた幅4.3～4.0mの周溝を確認した。調査区内には墳丘盛り土は残存しない。周溝は正円を描くようにゆるやかにカーブしながら調査区外に延びている。周溝は深さ0.5～0.7mであり、長さはおよそ12m程度を検出した。周溝壁の傾斜は墳丘側で20～25度、外側で15～20度を測る。周溝外縁

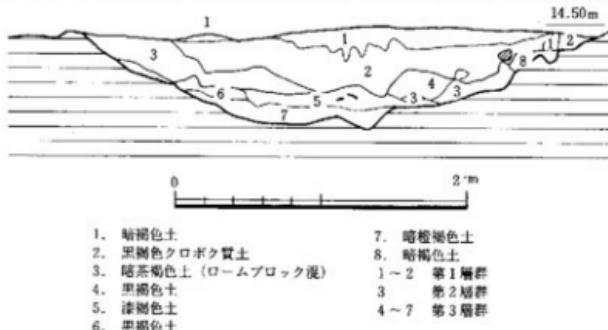


Fig. 24 井尻B 1号墳周溝土層断面図

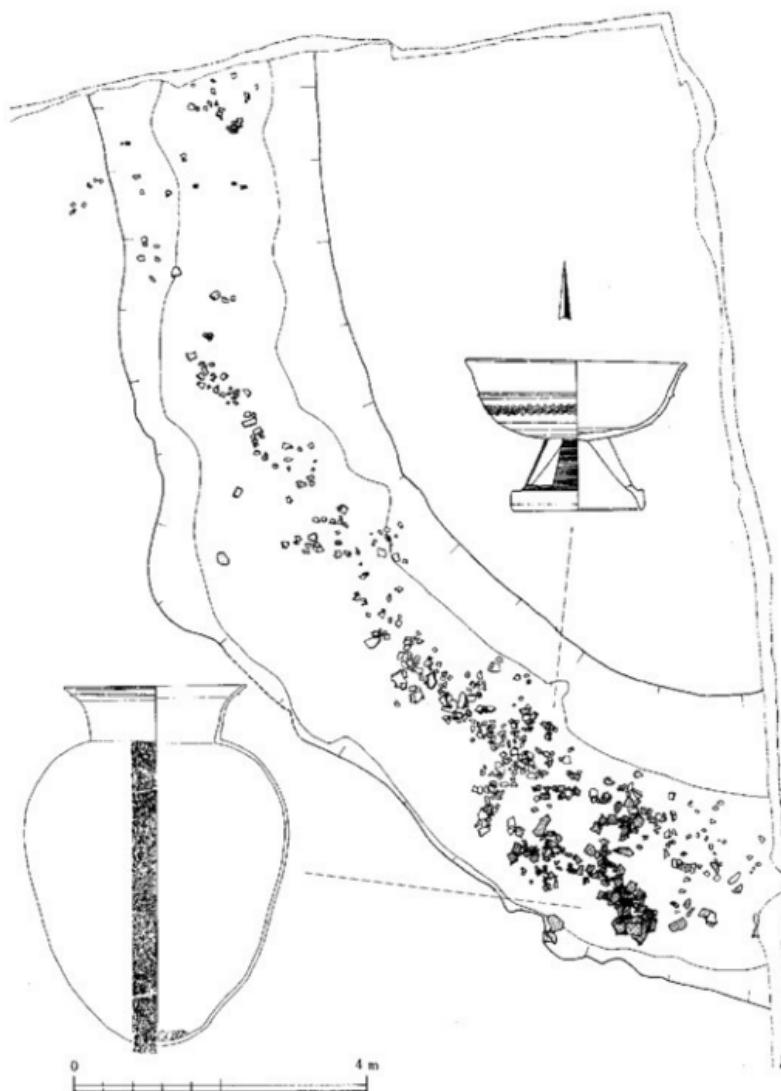


Fig. 25 周溝および遺物出土状態

に7～8世紀の竪穴式住居が構築されている。そのため周溝のカーブから墳形を推定するのは困難であるが、墳丘側の検出面や周溝底の下場ラインを模擬として復元すると、墳丘は周溝底に接する部分で径18.0～19.0m、検出面での周溝外縁で径24.0～25.0m程度の円丘と考えられる。しかし、調査した周溝は全体の四分の一以下であり、この数値が正確な墳丘規模とはい難く今後再確認する必要がある。また、墳形も円形であるとは推定できるものの円墳であるのか、小規模な前方後円墳の後円部であるのか決定できない。

周溝内の堆積土は地点により変化があるが、全体として次の3層群に区分される。上部の第1層群は暗褐色～黒褐色土でありクロボク質である。中部の第2層群は墳丘側に堆積しロームブロックを多く含む茶褐色土である。下部の第3層群はロームブロック混じりの黒褐色土である。各層群は相互に漸移的に変化している。周溝内には多量の遺物が出土し、特に第3層群中からは埴輪、須恵器などの破片が全域から認められた。第2・3層群はその性状から墳丘盛土の崩落土も含まれていると判断される。周溝の埋没の過程は、まず周溝底へ黒色土が形成、堆積した後、墳丘の崩壊が進み、再び腐植土が主体になっていったと推定される。

なお、調査区の西壁に近い部分で周溝内外壁に付設された埋葬用と推定される遺構SK-31を検出したが、これについては後述する。

(3) 遺物の出土状態

本古墳に伴う遺物はすべて周溝内からの出土である。出土遺物には円筒形埴輪、朝顔形埴輪、家形埴輪、須恵器大甕、同高坏、鉄刀、鉄剣、刀子、ガラス製小玉などがある。これらのうち埴輪類と須恵器は先に述べたようにおもに周溝底に近い第3層群中から出土した(Fig. 25)。いずれも調査区内では南側に多く出土した。円筒形と朝顔形の埴輪は大破片で同一個体が比較的近接して出土する傾向があるが、家形埴輪は周溝内の広範囲に小破片として出土した。また、須恵器大甕は南側の径約2mの範囲に破碎状態で集中して出土した。この大甕は頸部から胴部の一部を欠くが、ほぼ完全な状態に復元

することができた。注目されるのは肩部の破片が粉々に碎かれている点と、底部に径10cm程の内側からの穿孔の跡がある点である。須恵器高坏も比較的狭い範囲に細片として出土したが、ほぼ完全な状態に復元できた。鉄器類は調査区北端に近い周溝内の第1層群からおもに出土した。

周溝内からはこの他に玄武岩板石や花

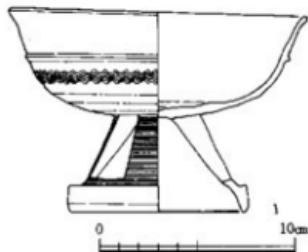


Fig. 26 出土高坏実測図

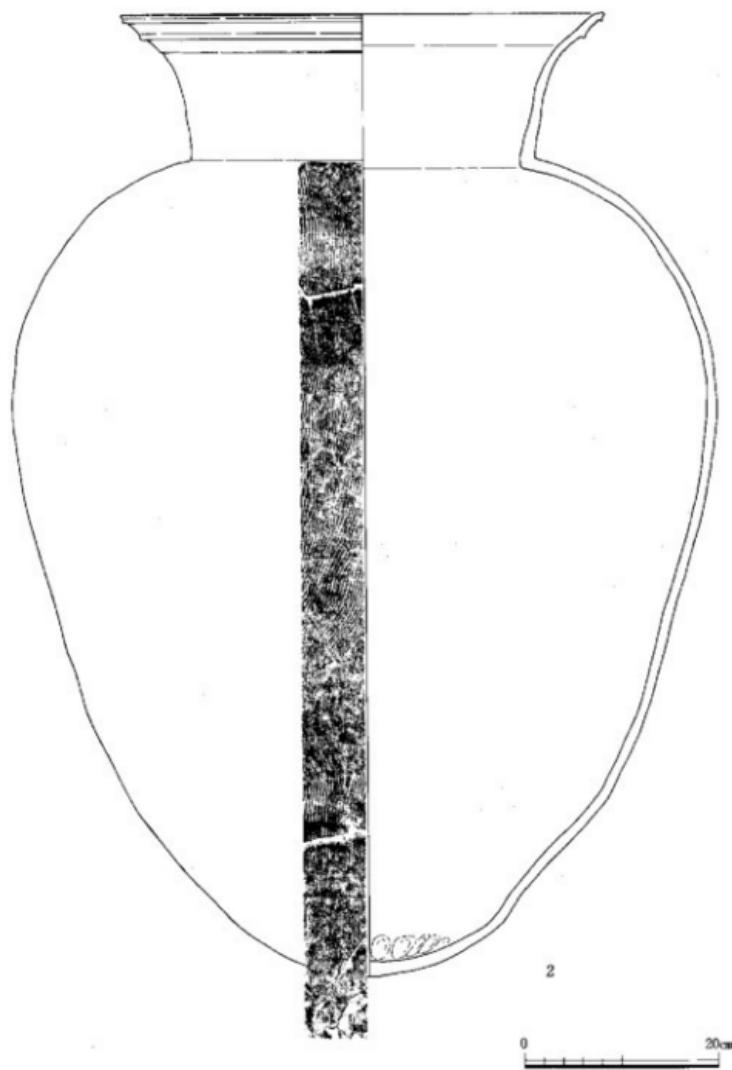


Fig. 27 出土甕実測図

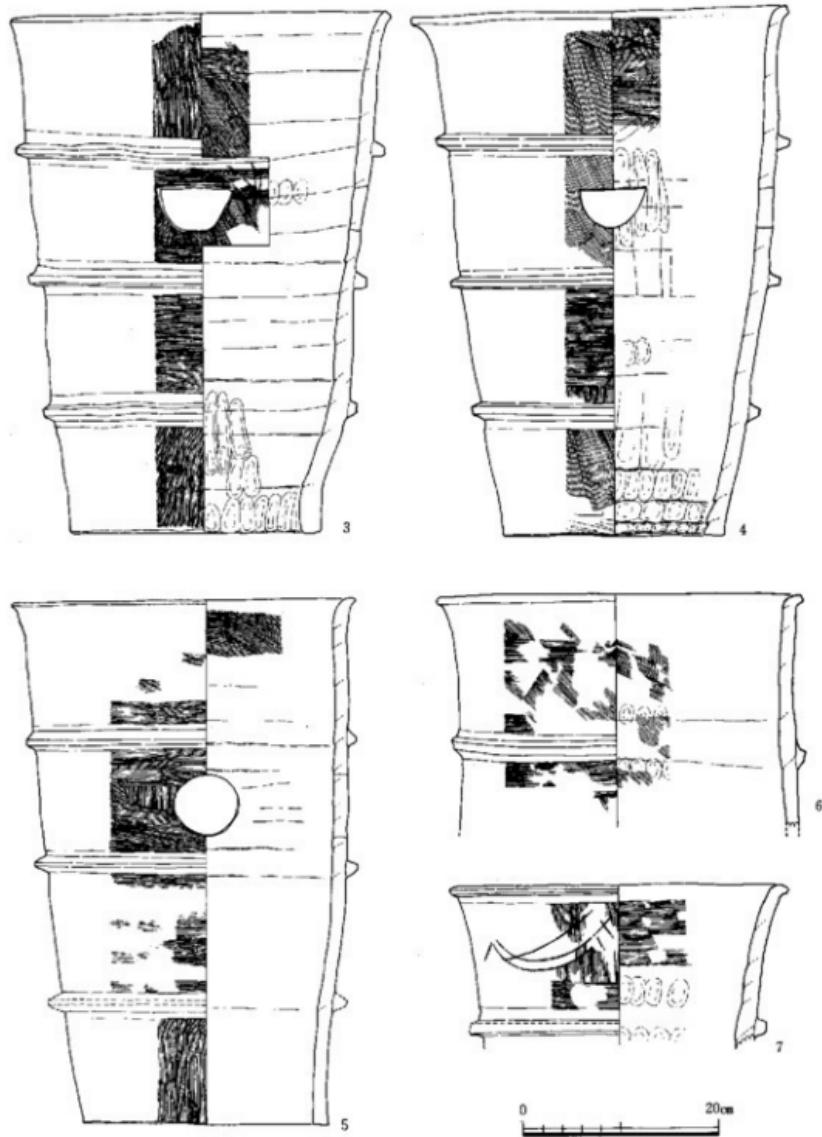


Fig. 28 円筒形埴輪実測図

岡岩小角礫が整理箱に2~3箱程度出土した。これらの石材は葺石の転落物としては量が少なく、板石のなかには小口面に赤色顔料が塗布してあるものが認められることから、その一部は本古墳の主体部を形成した石室材の可能性がある。

2. 出土遺物について

(1) 須恵器

須恵器は2点ある。高坏は坏部を一部欠損するものはほぼ完形に復元できた。口径15.2cm、底径9.2cm、器高10.5cmを測る。透しは3ヶ所にあり、等間隔である。内外面ともに黒灰色を呈し、調整、焼成は極めて良好である。坏部は薄く仕上げられ口縁端はゆるやかに外反している。坏部の深さは5.1cmあり、外面上方寄りに鋭い稜をもつ突帯がつき、その下方に櫛描き波状文を巡らせる。下方はヘラ削りである。脚部は開き、安定している。細かなカキ目で仕上げている。大甕は肩~胴部の一部を欠損する。口径50.0cm、器高99.7cm、胴部の最大径72.8cmを測る。暗灰色~黒灰色を呈し、焼成は極めて良好である。底部に窯詰め焼成時の焼台の痕跡が9ヶ所残存し、うち6ヶ所は凹み焼台片が付着している。口縁部は焼成によりわずかに焼け歪み波打っている。頸部は直口からだいに拡がり、口縁部分で大きく外反する。口縁端部の直下およびその下方に鋭い稜をもつ突帯が二条巡る。器表の調整は頸部から口縁部で荒い横ナデであり、胴部は外面平行タタキ後かるくナデ、内面は丁寧なナデである。

(2) 塙輪

埴輪には、円筒形埴輪、朝顔形埴輪、家形埴輪が認められた。3~8は円筒形埴輪、10、11、13は朝顔形埴輪、16~30は家形埴輪片である。これらの埴輪にはほぼすべてに赤色顔料の塗布が認められた。胎土は全体に砂粒に富み、0.1~0.3cmの石英を主体に長石、雲母などが含まれている。なお、朝顔形埴輪の10、11にはそれらの砂粒とともに特徴的な赤色粒子が含まれている。

円筒形埴輪は破片で整理箱で5箱程度出土した。小片が多く風化が著しいため個体識別は困難であったが、7個体は識別でき、うち3個体は全体を知る程度に復元できた。なお、胎土等の特徴からもう数個体は存在するようである。これらの器形、調整、焼成、胎土等は共通している。3は口縁を士、底部を多程欠損し器高54cm、口径39.5cm、底形27cmを測る。底部がいくぶんしまるがほぼ直線状に立上がり、口縁端でわずかに外反する。端部はコの字状となる。3本のタガを巡らせ、3段目に半月形透孔を2方にもつ。焼成は良く、色調は明橙色~黄褐色を呈し有黒斑である。調整は、外面は一次調整として細かい縦ハケを施し、タガ貼付け後に2・3段目に二次調整としてA種横ハケを施している。タガは3本ともに器表から約1cm程度の高さであり、上下、側面を強くナデしている。上面はやや凹み、弱いM字状の突帯になっている。

口縁端部は強く横ナデしている。内面は上部に横一斜めのハケ調整がみられるが、中～下半部は指押さえとナデのみで粘土帯の繋ぎ目をみることができる。3段目にヘラ描きの沈線が認められる。4は口縁から胴部を少程欠損し、器高54cm、口径39cm、底径22.9cmを測る。底部から直線状に立上がり、口縁端で強く折れる。端部はコの字状となる。3本のタガを巡らせ、3段目に半月形透孔を2方にもつ。焼成は良く、色調は黄褐色を呈し有黒斑である。調整は、外面は一次調整として細かい継ハケを施し、タガ貼付け後に2段目に二次調整としてA種横ハケを施している。タガは3本ともに器表から約1cm程度の高さであり、上下、側面を強くナデてい

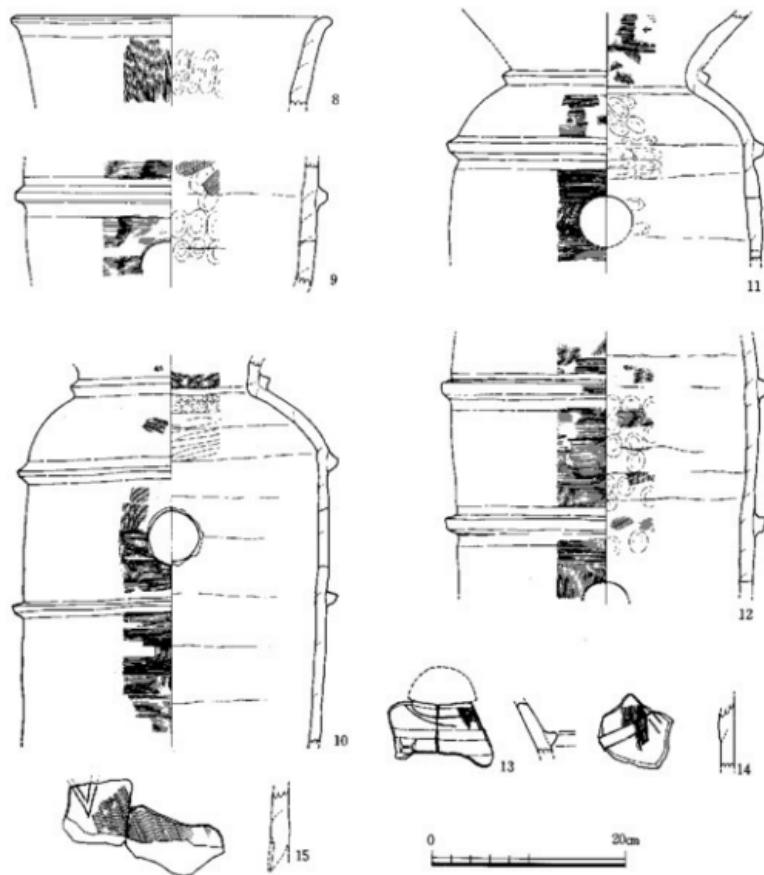


Fig. 29 円筒・朝顔形埴輪実測図

る。上面はやや凹み、弱いM字状の突帯になっている。口縁端部は強く横ナデしている。内面は上部に横位のハケ調整がみられるが、中～下半部は指押さえとナデのみで粘土帯の繋ぎ目をみることができる。特に底部付近は粘土輪積みのままといえる状態である。5は口縁から胴部を少しお折し、器高55cm、口径35.6cm、底径25.5cmを測る。底部から直線状に立上がり、口縁端でわずかに折れ、端部は尖る。3本のタガを巡らせ、2・3段目に円形透孔を直行してそれぞれ2方にもつ。焼成は良く、色調は黄灰褐色を呈し有黒斑である。調整は、外面は一次調整として細かい綫ハケを施し、タガ貼付け後に2～4段目に二次調整としてA種横ハケを施している。タガは最下段を剥落欠失するが、その他は器表から約1～1.5cm程度の高さであり、上下、側面を強くナデしている。上面はわずかに面取りするが断面三角形を呈している。口縁端部は強く横ナデしている。内面は上部に横位のハケ調整がみられるが、中～下半部は指押さえとナデのみで粘土帯の繋ぎ目をみることができる。6は口縁から24cm程度が残存し、そのうち $\frac{1}{2}$ を欠損する。口径37.8cmを測る。ほぼ垂直に立上がり、口縁端で強く折れる。端部はコの字状となる。焼成は良好であり、色調は黄橙色～黄白色を呈し有黒斑である。調整は、外面は一次調整として細かい斜めハケを施し、タガ貼付け後に二次調整として各段にA種横ハケを施している。タガは最上段だけ観察できるが、器表から高さ1cm程度で比較的幅広なものである。上下、側面は強くナデられている。上面は凹みM字状の突帯になっている。内面の調整は指押さえ、ナデ後斜めハケを施している。口縁端部は強く横ナデしている。7は口縁から16cm程度が残存し、そのうち $\frac{1}{2}$ を残存する。口径35cm程に推定される。ゆるく外反しながら垂直に立上がり、口縁端で強く折れる。口縁端部は小さなコの字状となる。焼成はやや不良であり色調は黄褐色を呈する。調整は、外面は一次調整として細かい綫ハケを施し、タガ貼付け後に二次調整としてA種横ハケを施している。タガは最上段の剥落痕だけが残り、詳細は不明である。上部は強くナデされている。口縁端部は強く横ナデしている。内面の調整は指押さえ、ナデ後、上部のみに横ハケを施している。外面の上部にヘラ描き沈線が施されている。8は口縁から9cm程度が残存し、そのうち $\frac{1}{2}$ を残存する。口径33cm程に推定される。ゆるく外反しながら垂直に立上がり、口縁端で強く折れる。口縁端部はやや丸く仕上げられている。焼成はやや不良であり、色調は黄褐色を呈する。調整は、外面に細かい綫ハケを施し、内面は指押さえ、ナデ調整である。口縁端部は強く横ナデしている。

朝顔形埴輪は3個体が識別できた。そのうち径の推定ができたのは2個体である。10は頸部から胴部が復元できた。そのうち胴部は十程度が残存している。頸部はよくしまり径18.5cmを測る。胴部は最大径が31.5cmを測る。胴部最上段のタガ間に円形透孔を二方にもつ。焼成はやや不良であり、色調は黄褐色を呈する。有黒斑である。調整は風化のため不明瞭である。胴部外面は細かい綫ハケを施し、タガ貼付け後にA種横ハケを施している。タガは器表から約1cm

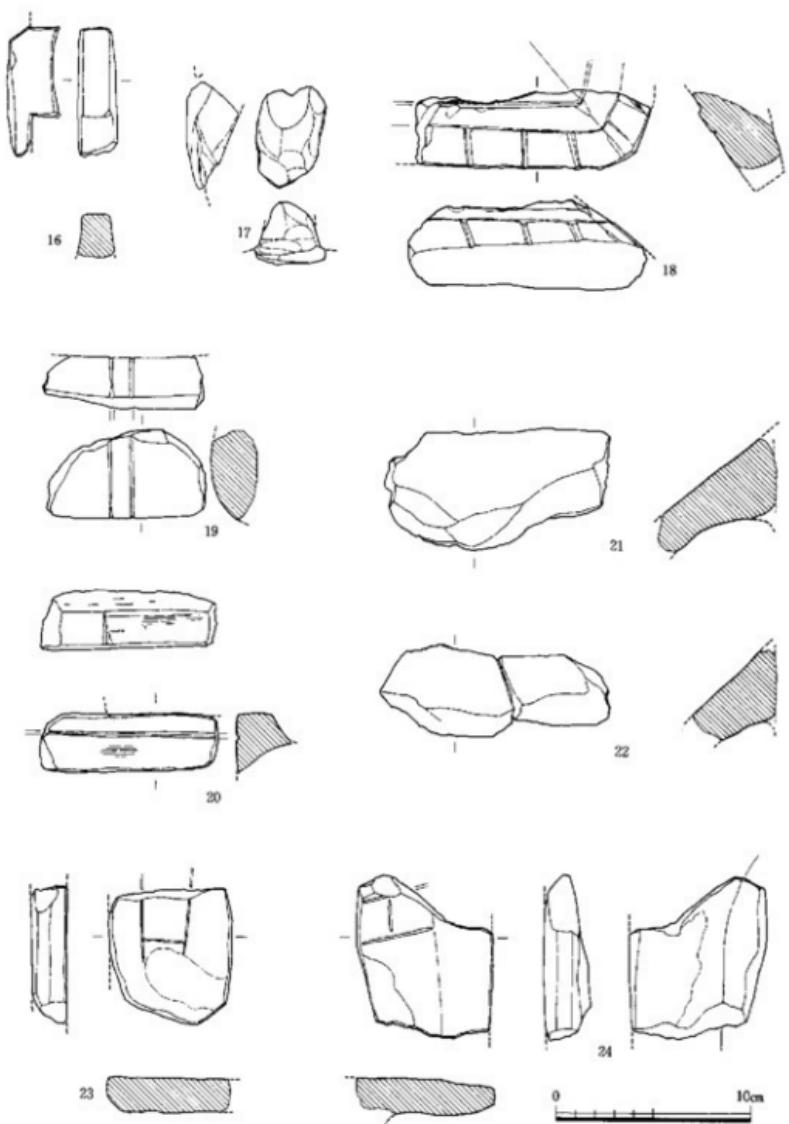


Fig. 30 家形埴輪実測図(1)

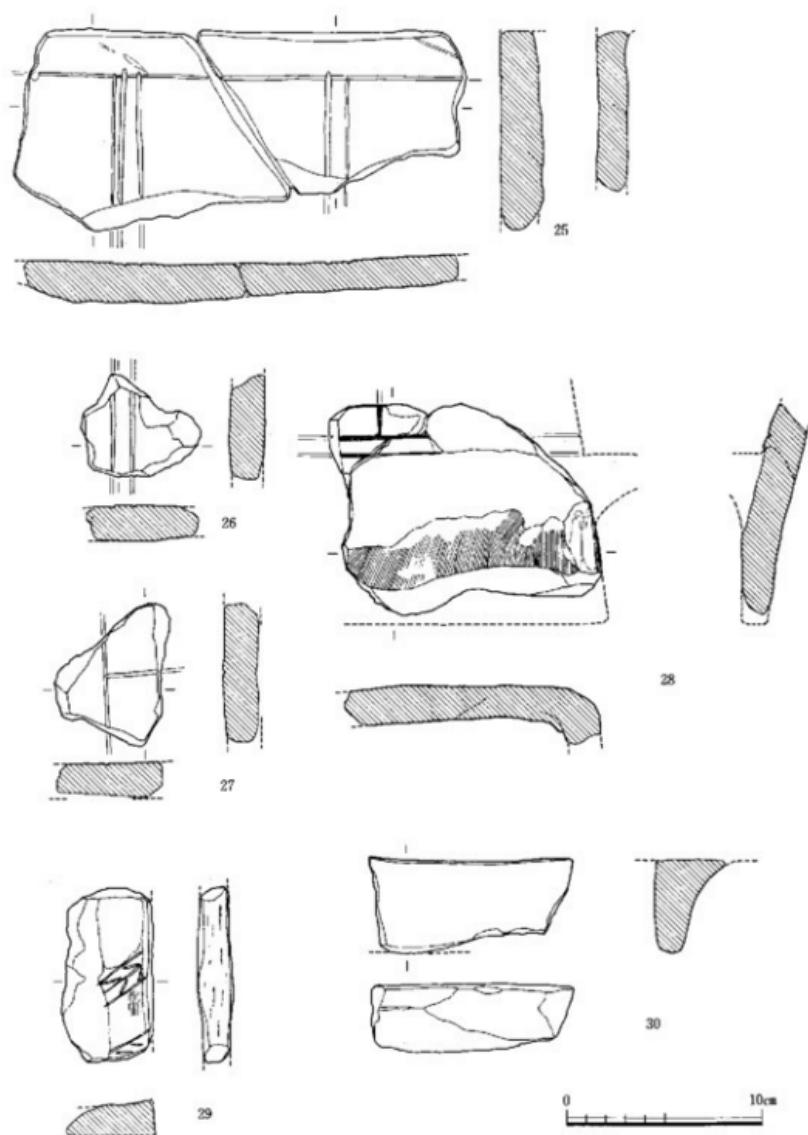


Fig. 31 家形埴輪実測図 (2)

程の高さであり、上下と側面をかるくナデている。断面は略三角形を呈する。内面は指押さえ、ナデ調整である。頭部外面縫ハケの痕跡があり、内面は横ハケである。11は頭部から胴上部が復元できた。全体の $\frac{1}{2}$ 程度が残存している。頭部はよくしまり径19.5cmを測る。胴部は最大径が32.0cmを測る。胴部最上段のタガ間に円形透孔を二方にもつ。焼成はやや不良であり、色調は黄褐色を呈する。有黒斑である。調整は風化のため不明瞭である。胴部外面～肩部は細かい縦ハケを施し、タガ貼付け後にA種横ハケを施している。タガは器表から約1cm程の高さであり、上下と側面を強くナデしている。断面は上側に高い台形を呈する。内面は指押さえ、ナデ調整である。頭部外面の溝整は不明であり、内面は横、斜めハケである。13は頬きと特徴から朝顔形埴輪の肩部の破片と推定される。焼成はやや不良であり、黄褐色を呈する。最上段のタガの上部に半月形の透孔を持つ。タガと透孔の間にはヘラ描き沈線が施される。肩部の外面は斜めハケ、内面は縦ハケ調整である。タガは器表から1cm程の高さであり、上・側面を強くナデしている。断面は台形を呈する。

9は胴部破片であり、径の十程が残存する。焼成はやや不良であり、黄橙色を呈する。円形透孔が認められる。調整は外面がタガ貼付け後にA種横ハケを施している。内面は指押さえ、ナデ後上部に斜めハケが施される。タガは器表から1cm程の高さであり、上下と側面を強くナデしている。断面形は台形を呈する。12は胴部破片であり、径の十程が残存する。焼成はやや良好であり、赤褐色を呈する。残存する最下段に二方の円形透孔が認められる。調整は外面に細かい縦ハケを施し、タガ貼付け後にA種横ハケを施している。内面は指押さえ、ナデ後部分的にハケが施される。タガは器表から1.5cm程の高さであり、上下と側面を強くナデしている。断

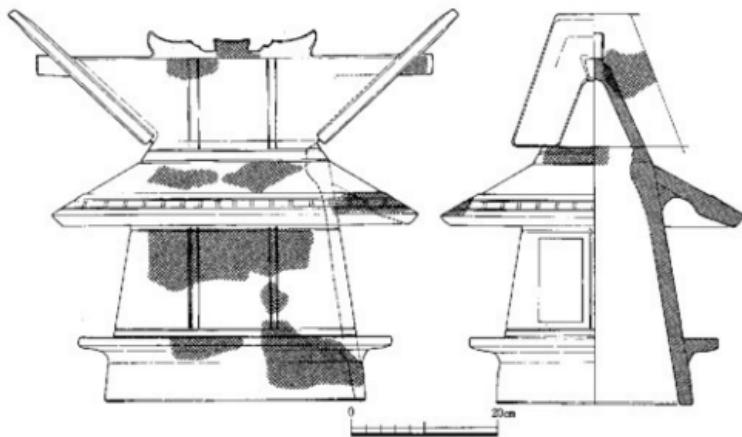


Fig. 32 家形埴輪復元図

面形は弱いM字状の台形を呈する。14、15は胎土、焼成、色調が類似し、同一個体の可能性が高い。形態については不明であるが、両者ともに外面にヘラ描き沈線が施される。外面は斜め～縦ハケ、内面は指押さえ、ナデである。

家形埴輪はすべて小破片で出土し、器表の風化が著しい。胎土、焼成等が共通し同一の個体とみられる。胎土は0.2cm以下の砂粒を含む。砂粒は石英がおもであり少量の長石、雲母も認められる。焼成は良好であり、色調は黄褐色～赤褐色を呈する。有黒斑である。20・28-30の外面には赤色顔料の塗布痕が認められる。

16は鱗状の立飾りであり、棟飾りの可能性がある。17は破風に付設する棟木の破片と推定される。指押さえとナデで成形されている。破風の貼付け部分から剥落している。剥落面と棟木下面とは約41°を測る。18は四注屋根の隅部の破片である。外縁部は欠損するが、軒先を削り出し、0.3cm程高く表現し、その上にヘラ描きを施している。屋根の傾斜は破片の長軸側で30～35°、短軸側で35～40°を測る。19は屋根の頂部に近い破片である。二本の沈線を描いて押縁を表現している。20は透しの表現をもつ破片であり、調整や顔料の保存が良好であることから四注屋根と切妻屋根の接続部分で妻側になると推定される。

21・22は四注屋根の壁との接続部と推定される。剥落面から壁と屋根の傾斜角は45～50°を測る。壁から7～8cm程張り出している。23・24は破風板である。23には屋根との接続部の剥落痕がある。破風の表面にはヘラ描きによる装飾が施される。25～27は壊破片である。外面の調整は不明、内面は指押さえ、ナデの荒い調整である。26・27は切妻屋根の破片の可能性もある。28は上部に横方向のヘラ描き沈線が1本あり、それから垂直に下された沈線が約10cmの距離を

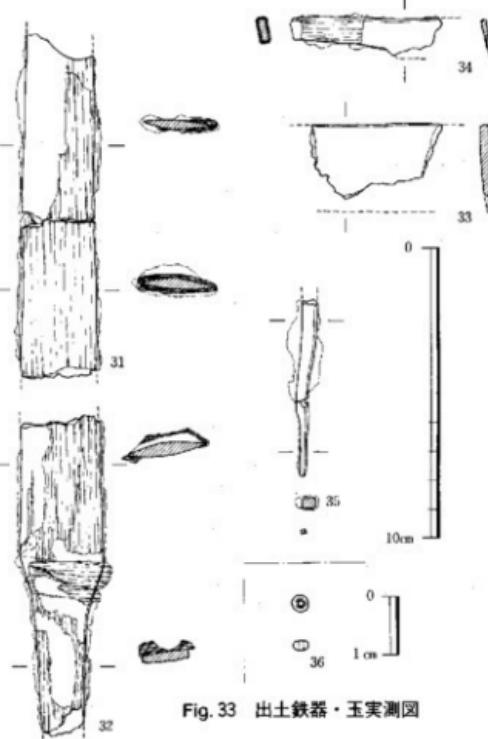


Fig. 33 出土鉄器・玉実測図

おいて描かれている。右側は2本、左側は3本ある。垂直の沈線は平側の柱を、横方向の沈線は梁をそれぞれ表現していると推定される。28は一側邊が透孔となり、窓か入口になると推定される。表面にヘラ書きによる装飾がある。29は壁下部と基部の破片である。基部は垂直に近いが、壁は約10°内傾している。基部端部および裾廻り突帯は剥落している。基部外面は縦～斜めハケ調整であり、内面は指押さえ、ナデである。突帯の上部には2条の横方向のヘラ書き沈線があり、それから垂直に沈線が描かれている。垂直の沈線と豊溝部とは約10cm離れている。30は裾廻り突帯であり、幅約4.5cmを測る。

以上、破片が少ないので正確な復元は困難であるが、おおむね Fig 32のような入母屋造の家形埴輪と推定できる。

(3) 鉄器

すべて周溝内の出土であり、破断、断片化している。31・32は鉄剣である。いずれも破片になっているが、形態と特徴から同一個体と推定される。31は刃部の破片であり、現存長11.8cm、刃の見幅は最大幅2.6cm、厚さは背で0.4cmを測る。32は茎部を有する破片であり、現存長11.0cm、刃部の見幅は区部で2.9cm、厚さは0.5cmを測る。茎部は茎尻を欠損するが、現存する長さは6.0cm、幅は1.8～1.5cm、厚さは0.45cmを測る。目釘穴は鏽のために不明である。推定される剣の刃渡は16.8cm以上である。全体に柄および鞘の木質が残存している。特に区部には幅1.5cmで本目の直行する部分があり、柄の間部固定具かと推定される。33は鉄刀である。刃部の破片であり、現存長4.5cm、刃の現存する見幅は2.6cm、厚さ0.4cmを測る。34は刀子である。先端部と基部を欠損するが、現存長5.2cm、残存する関部での刃幅1.3cm、厚さ0.2cmを測る。茎部は現存長3.3cm、幅0.8～1.0cm、厚さ0.25cmを測る。頭部には柄の木質が残存している。

(4) 玉

36はガラス小玉である。コバルトブルーを呈する。径3mm、厚さ1.7mm、孔径0.8mmを測る。

3. 付設遺構 SK-31と出土遺物

(1) 遺構の検出状態

SK-31は周溝内の南側外壁に構築された遺構である。形態と埋土、出土遺物の検討から埋葬施設と考えられる。これは周溝外壁に横穴状に穿たれた土塙と、その開口部の前面である周溝底外壁寄りに設けられた浅い土塙からなる。両者は約7cmの距離で接して検出された。以下、説明の都合上前者を横穴部、後者を前庭部と仮称する。周溝埋土との層位的関係をみると、SK-31は周溝内埋土第3層群上面から掘られており、第1・2層群がそれを覆っている。このことから本遺構は周溝埋没初期に構築されたと考えられる。

横穴部は近年の造成で直上まで削平が及んでおり、保存状態は良好ではない。また土塙内部

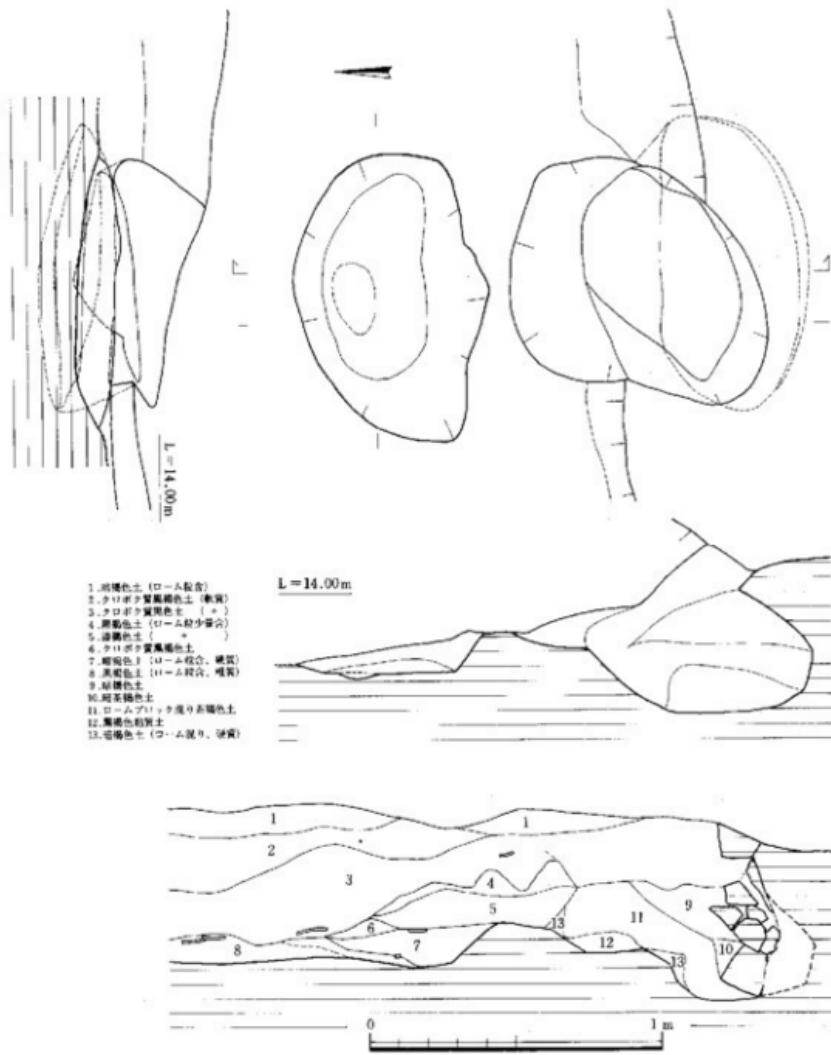


Fig. 34 第31号土壤実測図および土層断面図

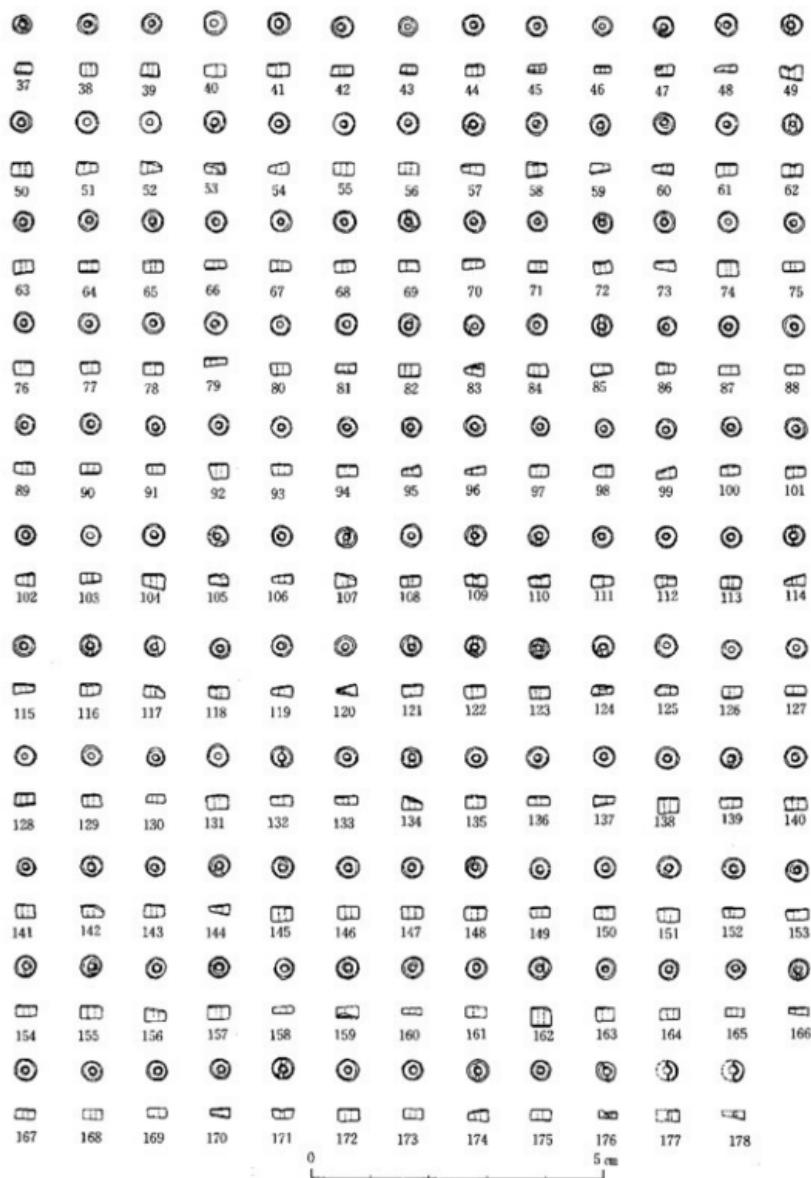


Fig. 35 出土玉実測図

には周溝内埋上第3層群に混在して人頭大の地山土塊が充満しており、天井部の崩落は周溝の埋没段階には進んでいたと考えられる。開口部の形態は天井、両壁の崩落のために不明確であり、現状で幅75cm、長さ50cmを測る。この部分は、周溝外壁の下部に幅77cm、奥行き25cmの隅丸方形の浅い掘り方となっており、この床面は横穴内部に向って約10°で下降している。さらに45°の傾斜で横穴内部に有段で連続する。横穴内部の形態は平面形が不整梢円形を呈し、長軸開口方向に対して直行して設けられている。いわゆる「平入り」である。規模は幅102cm、長さ77cm、床面で幅98cm、長さ47cmを測る。長軸の方位はN-95°-Wである。頭位方向は不明であるが床面は東側が高く、両端で15cmの差がある。壁は床面から一旦ゆるく立ち上がり、さらに10~15cm程ほぼ直立し、天井へ連続する。天井の立面形は崩落のため不明であるが、奥壁のカーブからドーム形になると推定される。天井の高さは推定で約40cmと考えられる。横穴部内からは遺物の出土はなかった。

前庭部は平面形が不整の半月形を呈し、長軸を横穴部の開口部に直行している。幅99cm、長さ66cmを測る。床面は平坦であり、横穴部側で深さ15cmを測る。埋土は暗褐色~黒褐色土であり、堅くしまっていた。床面直上で赤色顔料、鉄錫片、滑石製小玉が出土地した。

SK-31とその上部の埋土について報告する。堆積状態は基本的に周溝内埋土と連続するものである。1~3層は第1層群であり、最上位の周溝内埋土である。4~5層は黒褐色土であり、比較的明瞭に区分できた。4層の上面には腐植に伴う凹凸が認められる。6~7層は先述した前庭部内埋土である。8層は第3層群であり、周溝内の最下部の埋土である。9~12層は横穴部内の埋土であり、天井や壁の崩落したローム土塊の混入が多い。横穴部の陥没に伴って流入したと推定される。この埋土は、4層が不整合で接することや、1層が水平堆積に近いことから3層堆積時に流入したと推定される。13層は汚れたローム土塊である。なお、前庭部から横穴部前面にかけて堆積する4~5層は、周溝内埴丘側の第2層群に近似した性状を示す。4層上面には第1層群(3層)からの腐植による凹凸がみられ、ローム小ブロックを含む比較的堅い堆積物である。堆積方向や性状は横穴部崩落に伴う流土(9~12層)とは明瞭な差を示している。調査中にこの堆積物の平面的な拡がりを確認していないために決定的な根拠に乏しいが、横穴部の閉塞に伴う埋め土の可能性がある。

SK-31の出土遺物は前庭部からの鉄錫1点と滑石製小玉142点である。出土状態から小玉は連珠の状態で埋置されたものとみられる。35は鉄錫である。基部のみであり形態は不明である。現存長6.1cm、軸部の最大厚0.4cmを測る。37~178は滑石製小玉である。おおよそ同形態を示すが、径は3~4mmとばらつきが少なく、長さは1.5~4mmとばらつきが多い。上下が水平でないものも多い。すべてを繋ぐと25.6cmを測る。

第7章 調査の記録 —その他の遺構と遺物—

1. 壁穴住居址 (Fig. 22・36・37)

SC-19～21の3基は調査区の北東部に位置している。まず、切り合ひ関係からみていくと、SC-20が最も古く、SC-21に切られている。SC-20・21は、井尻B1号墳の周溝によって切られている。また、SC-19は井尻B1号墳周溝が埋まつたあと、造られている。

SC-19は、1辺5m前後の方形プランをもつ壁穴住居址と考えられるが、削平を受け、床面と主柱穴、カマドが残っているのみである。カマドは、北側縁辺のほぼ中央部に焚口を南に向けて設けられている。床は浅く皿状に掘られ、コの字状に黄白色粘土を固めており、内側は焼け、中には焼土および剥落した壁がつまっていた。床面は堅くたたきしめられており、2～2.2m間隔をもつ主柱穴がある。主柱穴は南側の二本が深く、床面から90cm・70cmあり、掘り方径も1m前後ある。柱痕跡は

径30cm前後である。一方、北側の2本は床面から55cm・45cmと浅く、柱痕跡も径25cm前後である。

出土遺物 (Fig. 37、1～4・8・9、Fig. 22、26) 遺構の遺存状態は悪いが、床面に密着した状態で比較的まとまった遺物が出土した。1～3は須恵器、他は土師器である。1は返りをもつ蓋で、体部と天井部の境は明瞭で、体部内外面は回転横ナデ調整、天井部はヘラケズリ後、ナデ調整が施されている。変形しているが、口径は15.8cm、器高3.3cmである。2は壺の口縁部、3・4は皿である。3の外底はヘラ切り、4はナデ調整が

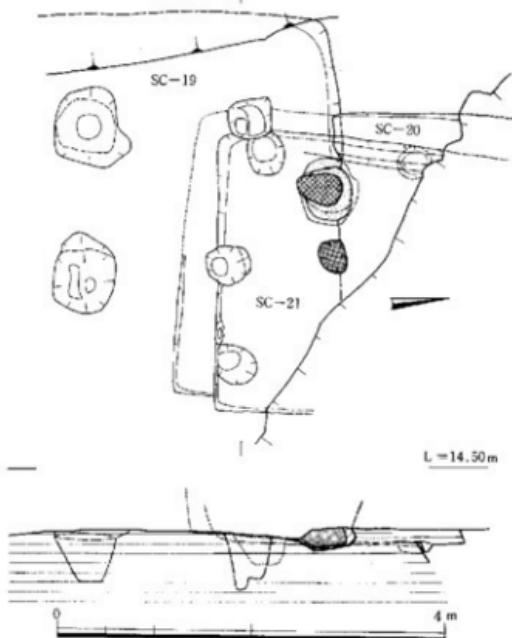


Fig. 36 第19～21号壁穴住居址実測図

施されている。なお、3・4とも体部内外面は回転ナデ調整で仕上げられている。3は口径15.2cm、器高2.4cm、4は口径17.0cm、器高2.7cmである。8・9は甕である。8は口縁部がナデ調整、体部は縦方向のハケ目調整、内面の屈曲部下はヘラ削りが施されている。9は口縁部がナデ調整、体部が縦方向のハケ目調整、内面の屈曲部下はヘラ削りが施されている。26 (Fig. 22) は幅1cm、厚さ2mmの板状をなす鉄器である。

以上の出土遺物から、SC-19は7世紀後半から末の竪穴住居址といえよう。なお、5～7は他の柱穴から出土した須恵器の坏で、ほぼ同時期のものといえよう。

SC-20は一辺4m強の方形プランをもち、4本主柱穴からなる竪穴住居址である。床の大部分はSC-21に切られているがたたきしめられており、壁はほぼ直に立ち上がっている。柱穴は、40cm前後の深さをもっている。炉は、ほぼ中央部に位置している。弥生時代後期後半か。

SC-21は1辺3.5m前後の方形プランをもつ住居址と考えられるが、大部分は井戸B1号墳によって壊されている。床面はたたきしめられており、壁溝をもち、壁はほぼ直に立ち上がっている。2本の主柱穴からなる竪穴住居址と考えられる。弥生時代終末から4世紀代のものと考えられる。

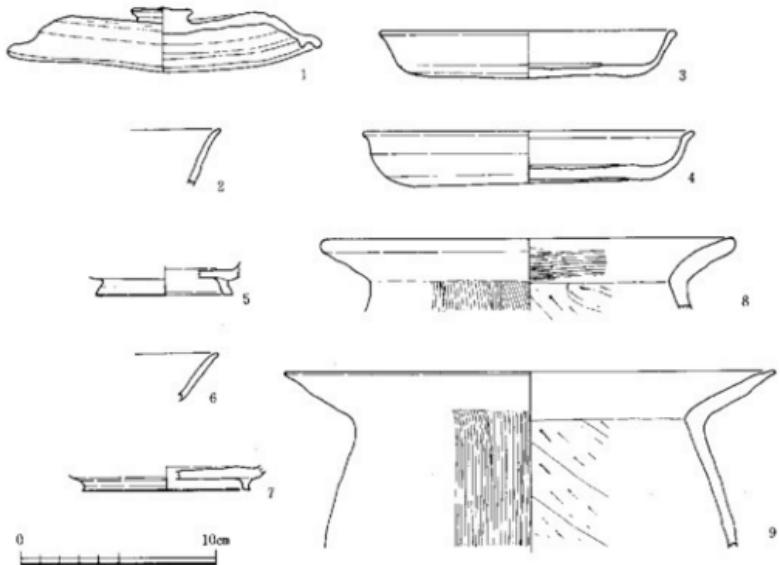


Fig. 37 第19号竪穴住居址等出土土器実測図

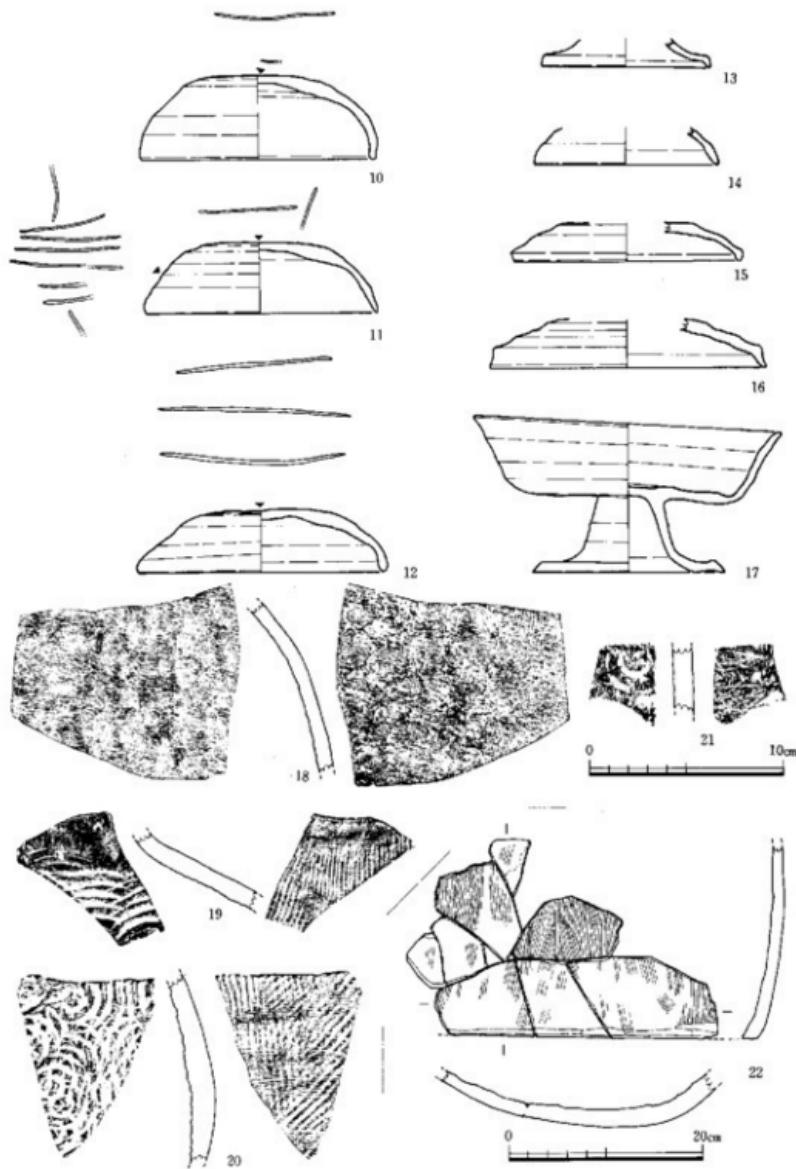


Fig. 38 その他の出土土器実測図

2. その他の出土遺物

10~12、17~22は井戸B 1号墳周溝覆土上部出土であり、13~16は表探資料である。10は坏蓋である。口径11.9cm、器高4.3cmをはかる。色調は淡赤褐色を呈し、焼成はやや不良である。天井部から体部は丸味をおび口縁部はほぼ垂直に下りる。端部は丸く仕上げる。回転ヘラケズリの範囲は、天井部の約半分である。11は坏蓋である。口径11.9cm、器高3.8cmをはかる。色調は青灰色を呈し、焼成は良好である。天井部はやや平らな感じで、体部から口縁部は直線的に伸びる。端部は丸く仕上げる。回転ヘラケズリの範囲は天井部の約半分である。12は坏蓋である。色調は外面が灰褐色、内面が灰青褐色を呈する。焼成は普通である。若干焼けひずんでいるが、天井部はやや平らな感じで口縁部はやや肥厚しほぼ垂直に下りる。回転ヘラケズリの範囲は天井部の約半分である。10・11・12の時期は6世紀後半である。

13は高坏の脚部と思われる。復元径8.6cmをはかる。色調は灰白色を呈し焼成は不良である。14は壺等の脚部の破片と思われる。復元径は9.4cmをはかる。色調は外面青灰色、内面灰色を呈し、焼成は良好である。15は坏蓋である。復元口径11.5cmをはかる。色調は灰色を呈し、焼成はやや不良である。天井部は平らで、天井部と体部の境ははっきりしている。口縁部は断面三角形である。天井部を回転ヘラケズリする。16は坏蓋である。復元口径14.2cmをはかる。色調は灰白色を呈し、焼成は不良である。口縁部は、折り曲げて作られしっかりといる。17は高坏である。口径15.6cm、器高7.6cm、脚部径10.0cmをはかる。色調は外面淡灰褐色で、内面は灰青色である。焼成は良好である。体部はほぼ直線的にのび、口縁部はやや外反する。脚端は嘴状をなす。調整は横ナデである。16・17の時期は7世紀後半である。

18~22は壺の破片である。18は、外面は濃緑色の自然釉がかかり調整がわかりにくいが平行タタキであろう。内面は青海波タタキの後ていねいにナデ消してある。色調は淡青灰色で焼成は良好である。19は、外面は細い平行タタキの上にカキ目を施す。内面は太目の青海波タタキである。色調は暗灰色を呈し焼成は良好である。20は、外面は平行タタキの上にカキ目を施す。内面は太目で深い青海波タタキである。色調は明黒灰色を呈し、焼成は普通である。21は、外面は平行タタキの後ナデ、その上に細い沈線が何本か入る。内面は青海波タタキである。色調は暗灰白色を呈し、焼成はやや不良である。

22は移動式カマドである。色調は外面淡赤灰色、内面黄灰色を呈し、焼成はやや良好である。調整は、外面はおもに縱方向のハケ目で、底部の器壁の厚い部分にヘラケズリを施す。内面は底部から約6cm位までは横方向のヘラ削りで、それより上部は縱方向のヘラ削りである。時期は古代に属すると思われる。

第8章 井尻B遺跡出土の赤色顔料について

本田光子

井尻B遺跡の土塙墓SK-2、6、7、8、9、11、13、16、28、および石蓋土塙墓SK-10、12、出土の赤色顔料について、光学顕微鏡とX線分析法により、顔料の種類を明らかにし、その使われかたに関して若干の考察を試みた。

試 料

16基の土塙墓、石蓋土塙墓のうち11基に赤色顔料が認められた。各遺構での赤色顔料使用量には多少はあるが、いずれも墓塙内の埋土全体が赤く染まった状態であった。床面に近くなるとその濃度が高くなることから見て遺骸に散布されたものと思われる。使用量はSK-2、SK-12は非常に少なかった。

調査時点で「赤く」見えた部分の土をほとんど取り上げ、その中から赤色顔料の小塊を探し出し、試料とした。いずれも土と混じりあった状態であり、いわゆるベンガラ色を呈している。その中でSK-2は、ベンガラ色の顔料の他に、朱と思われる顔料の小塊が認められ、さらに白緑色粉状の銅錫と思われる物質も微量ではあるが混入していた。

赤色鉱物の固定

試料とその分析結果を表に示す

赤色顔料の採取位置と分析結果

No	遺構・採取位置	蛍光X線分析	X線回折	光学顕微鏡	赤色顔料の種類
1	SK2土塙墓内	Fe・Hg	HgS・Fe ₂ O ₃	朱・ベンガラ	朱・ベンガラ
2	SK6土塙墓内	Fe・Hg	HgS・Fe ₂ O ₃	朱・ベンガラ	朱・ベンガラ
3	SK7土塙墓内	Fe・Hg	HgS・Fe ₂ O ₃	朱・ベンガラ	朱・ベンガラ
4	SK8土塙墓内	Fe・Hg	?・Fe ₂ O ₃	朱・ベンガラ	朱・ベンガラ
5	SK9土塙墓内	Fe・Hg	HgS・Fe ₂ O ₃	朱・ベンガラ	朱・ベンガラ
6	SK10石蓋土塙墓内	Fe	Fe ₂ O ₃	ベンガラ	ベンガラ
7	SK11土塙墓内	Fe・Hg	?	朱・ベンガラ	朱・ベンガラ
8	SK12石蓋土塙墓内	Fe	Fe ₂ O ₃	ベンガラ	ベンガラ
9	SK13土塙墓内	Fe・Hg	HgS・Fe ₂ O ₃	朱・ベンガラ	朱・ベンガラ
10	SK16土塙墓内	Fe	Fe ₂ O ₃	ベンガラ	ベンガラ
11	SK18土塙墓内	Fe	Fe ₂ O ₃	ベンガラ	ベンガラ

光学顕微鏡により反射光、透過光40~400倍で検鏡したところ、全試料にベンガラ粒子が含まれていた。また、No-1~5、7、9、には朱粒子も含まれていた。No-1 (SK-2) に

については朱のみを分離することができたが、それ以外はベンガラと朱の混ざり合った状態であった。(写真(1)～(3)) No-3、4、7、9は朱が少なく、No-4、7は極めて微量であった。なお、8、9のベンガラにはパイプ状粒子が含まれていた。(写真(4))

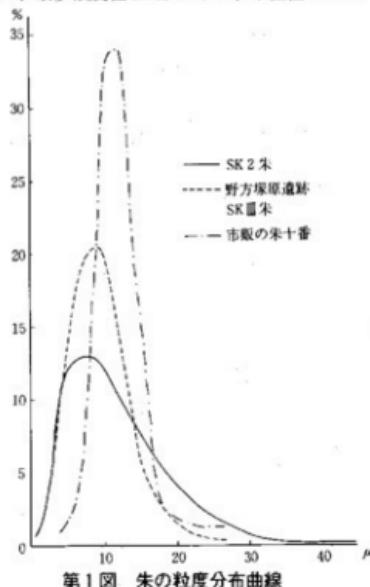
蛍光X線分析の結果、No-6、8、10、11は赤色の由来となる元素としてFeのみが検出され、他はFeとHgの両者が検出された。No-3、4、7、9はHgの量が少なかった。X線回折の結果、No-7以外の全試料に Fe_2O_3 (酸化第二鉄)のピークが認められた。また、Hgが検出された試料のうちNo-4、7以外はすべて HgS (硫化第2水銀)のピークも認められた。No-4、7はHgの量が極めて少なかったこと、また、検鏡によれば朱、ベンガラの両粒子が認められるので、試料自体の赤色部分の量が他にくらべ少なかったためと考えられる。

なお、SK-2の青錫状物質はCuが検出されたので銅製品の錫と考えられる。

以上の検鏡およびX線分析の結果から、No-1～5、7、9に含まれる赤色鉱物を朱、ベンガラ、No-6、8、11に含まれる赤色鉱物をベンガラと同定した。

朱の粒子径分布

No-1(SK-2)の朱について顕微鏡法(光学)をもちいて粒子径分布を測定した。透過写真上の朱粒子500個について二軸平均径を測定し、粒度分布曲線(第1図)および粒度累積曲線(第2図)を求めた。粒径範囲は0.5～44.5μ、最多頻度径 d_{med} は8μ、中位径は8.5μである。ほぼ同じ d_{med} の福岡市野方塚原遺跡の3号石棺墓出土朱($d_{med} 8, 1 \mu$)、市販の朱($d_{med} 10, 4 \mu$)についても比較のために図示した。SK-2出土朱は他の二者に比べて粒径範囲も大きく、カーブの高さも低く、不均一である。次に累積曲線より d_{med} および粒度の均一性を表わす算術四分偏差 $Q_a = (d_{3g} - d_{1g}) / 2$ を求め第3図に示した。ところで、市販の朱はその粒度により細かいものから順に、十四……五番までに分けられているが、これらについても同様の測定をおこない Q_a を求めた。現代の顔料については一定の相関係を認めることができるが、出土朱に関しては対象が少ないため規則性を認めるには無理があるかもしれない。しかし、門田遺跡K-21、24と三雲南小路遺跡K-1の朱は一つのグループを形成



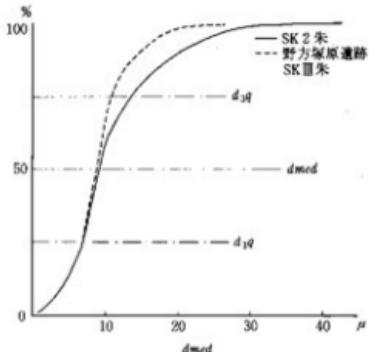
第1図 朱の粒度分布曲線

する可能性が強いと考えられ、野方塚原遺跡 S-III や本遺跡 SK-2 の朱はこれら 3 点とはまったく別のグループといえるであろう。出土朱については、その最大径、最小径、最多頻度径を基に分類を試みたが（本田1987）、このグループわけもそれを表わすものであり、第3図1～3は朱II、4、5が朱IIIとなる。

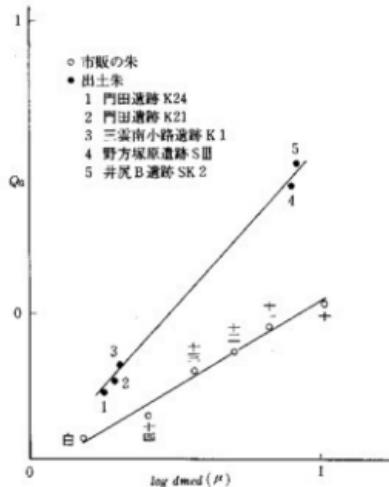
考 察

井尻B遺跡の土塙墓、石蓋土塙墓に使われた赤色顔料は、朱とベンガラの二種であった。その出土状況から見て、おそらくかなり多量のベンガラが遺骸に散布されたものと考えられる。SK-2、6～9、11、13ではベンガラの他に朱も使われていたが、SK-2と他の土塙墓ではその使われ方に違いがあったかもしれません。SK-2の場合は、ベンガラの中にはっきりした朱の小塊があり、しかも何らかの青銅器が共伴していた可能性が強い。遺骸（上半身）にはベンガラを散布し、頭部周辺に朱を施したものと考えられる。SK 6～9、11、13の場合は、限られた範囲に朱の小塊は認められず、ベンガラの中に全体的に分散していたように見受けられる。SK-2に見られるような「遺骸全体にはベンガラ、頭胸部には朱」という使われかたではなく、ベンガラと混ぜて使ったことも考えられる。

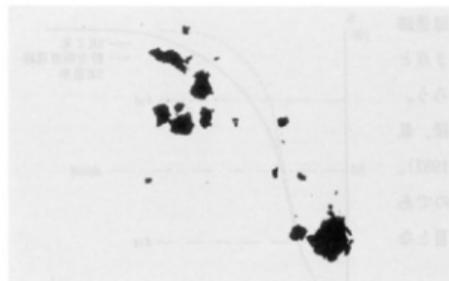
さて、SK-2の朱については、先に見たように弥生時代中期後半の堀塚墓出土の朱IIとは異なるグループ朱IIIに含まれる。この朱IIIというのは、粒径範囲および最多頻度径が、出土朱の中では大きく、現代の顔料に比べると非常に不平均なものであり、独特な色（ショッキンゲピンク）を示すタイプを指す。（本田前掲書）この朱IIIは、弥生時代後期後半から古墳時代初頭と考えられる遺構から出土する場合が多く、SK-2の時期を考える上で一つの情報となる。



第2図 朱の粒度累積曲線



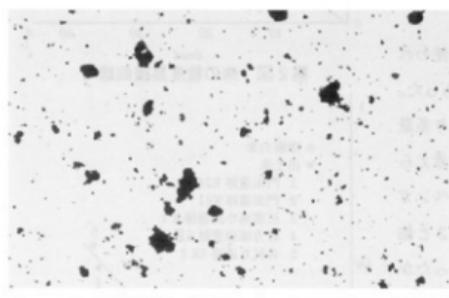
第3図 粒子径と均一性の相関関係



(1) SK 2 出土朱

透過光

250倍

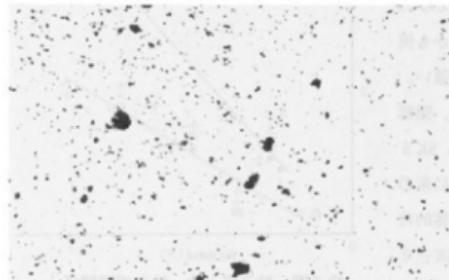


(2) SK 6 出土朱・ベンガラ

(大きい粒子が朱)

透過光

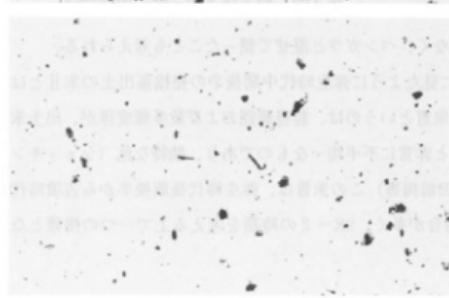
250倍



(3) SK10出土ベンガラ

透過光

250倍



(4) SK12出土ベンガラ

(パイプ状粒子を含む)

透過光

250倍

出土顔料の顕微鏡写真

〈註〉

1. 出土ベンガラに含まれるパイプ状粒子が産地や製法を示すものではないかと注目されている。(戸高1986)
2. 蛍光X線分析(宮内庁正倉院事務所成瀬正和氏に測定を依頼) 測定条件: 正倉院事務所設置の理学電機工業㈱蛍光X線分析装置、X線管球: クロム対陰極、印加電圧: 40KV、印加電流: 20mA、分光結晶: ツツ化リチウム、検出器: シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査範囲(2θ): 10~65°、ゴニオメーター走査速度: 2θ 4°/分、記録紙速度: 40mm/分、フルスケール: 2000 cps、時定数: 0.5秒
3. X線回折分析(宮内庁正倉院事務所成瀬正和氏に測定を依頼) 測定条件: 正倉院事務所設置の理学電機㈱製文化財測定用X線回折装置、X線管球: クロム対陰極、フィルター: バナジウム、印加電圧: 27.5KV、印加電流: 10mA、検出器: シンチレーション計数管、発散および受光側スリット: 0.34°、照射野制限マスク(通路幅): 4mm、ゴニオメーター走査範囲(2θ): 10~160°、ゴニオメーター走査速度: 2θ 4°/分、記録紙速度: 20mm/分、フルスケール: 400 cps、時定数: 2秒
4. 日本画顔料「天然辰砂」、ここでは、京都放光堂製「天然辰砂」白番から十番までを使用した。

文 献

- 市毛 熱 「朱の考古学」雄山閣、1975
- 久保輝一郎 「粉体—理論と応用」丸善、1979
- 神保元二 「粉体の科学」講談社、1985
- 戸高真知子 「赤い供物」「エトノス」31号、1986
- 本田光子 「赤色顔料の分析について」福岡県教育委員会「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告」9、1978「墳墓出土の赤色顔料小考」「肥後考古」6、1987
- 安田博幸 「古代赤色顔料と漆喰の材料および技術の伝流に関する二、三の考察」「櫻原考古学研究所論集」6、1984



1. 井尻B遺跡 2. 倍田遺跡 3. 諸岡館址遺跡 4. 諸岡遺跡 5. 野田日祐渡遺跡
 6. 門田遺跡 7. 柏原遺跡 8. 郡木遺跡 9. 駕與丁池畔遺跡 10. 乙積木遺跡
 11. 那珂遺跡群 12. 那珂若休遺跡群 13. 板付遺跡 14. 高畠遺跡 15. 井相田C遺跡
 16. 月佐遺跡 17. 赤井手遺跡 18. 墓内女学院構内遺跡 19. 向谷北遺跡 20. 白水池畔遺跡
 21. 大神山廬遺跡 22. 弥永遺跡 23. 柏山遺跡 24. ウト口遺跡 25. 深原遺跡
 26. 神松寺遺跡 27. カルメル修道院内遺跡 28. 五ヶ村池畔遺跡 29. 戸原遺跡

Fig. 39 先土器時代遺跡分布地図(1/100000)(■細石刃文化期、●ナイフ形石器文化期)

第9章 結 章

1. 福岡平野における先土器時代の様相

(1) 遺跡の立地と分布 (Fig. 39)

福岡平野は、北を博多湾、南を三郡山系と背振山系、東を月隈丘陵、西を油山から派生する丘陵によって囲まれ、約100km²の広さをもっている。福岡平野の東側には西流する多々良川を中心とした柏屋平野が、一方、西側には北流する室見川を中心とする早良平野が広がっている。

先土器時代の遺跡は、現在、福岡平野では中央部を北流する那珂川中流域の標高13m前後の丘陵に分布する群（Ⅰ群）、同河川の中流域の標高35m前後の丘陵に分布する群（Ⅱ群）と北流する桶井川の中流域の標高20m前後の丘陵に分布する群（Ⅲ群）、同河川の上流域との境目の標高55m前後の丘陵に分布する群（Ⅳ群）がある。また、多々良川中流域の標高10mから30mの丘陵部に分布する遺跡群をⅤ群、室見川中流域の標高30m前後の丘陵部に分布する遺跡群をⅥ群とする。

Ⅰ群の遺跡が分布する地域は、標高15mから10mの丘陵が屋根状をなし、北へいくにしたがって低くなるとともに、丘陵北端部は独立丘状をなしている。この地域では、本遺跡（井尻B遺跡）、諸岡遺跡、諸岡館址遺跡で先土器時代の包含層が検出されている。3遺跡での先土器時代遺物は、八女粘土層（阿蘇Ⅳ？）、鳥栖ローム層の上にのる鳥栖ロームの再堆積層中（諸岡館址遺跡）、新期上部ローム層上部のハード層中（諸岡遺跡）、その上にのるソフト層との間（諸岡遺跡・本遺跡）で出土している。諸岡館址遺跡は、ナイフ形石器文化期、本遺跡は細石刃文化期、諸岡遺跡は両文化期の遺跡である。他にナイフ形石器文化期の遺物が、採集および後時期の遺構から出土している遺跡として、那珂遺跡、那珂君体遺跡、板付遺跡、高畠遺跡、井相田C遺跡があり、細石刃文化期のものとしては板付遺跡、日佐遺跡がある。

Ⅱ群の遺跡が分布する地域は、標高30mから60mの開折谷をもつ台地が発達している。この地域では、野多目拈渡遺跡でナイフ形石器文化期、門田遺跡でナイフ形石器文化期・細石刃文化期の包含層が検出されている。門田遺跡では、下から上に阿蘇Ⅳ・砂疊層・淡褐色土層・淡茶褐色土層・白色粘土層・白色粘土混じり灰褐色粘土層（4層）・暗茶褐色ローム層（3層）と堆積しており、ナイフ形石器文化期の遺物は4層下部、細石刃文化期の遺物は4層上部から3層下部で出土している。他にナイフ形石器文化期の遺物が採集および後時期の遺構から出土している遺跡としては、赤井手遺跡、福岡女学院構内遺跡、弥永遺跡、柏田遺跡、深原遺跡、白水池畔遺跡、向谷北遺跡などがあり、細石刃文化期のものとしては、柏田遺跡、鳥ノ巣遺跡、ウトロ遺跡、天神山前遺跡などがある。



Fig. 40 各遺跡出土細石刃核実測図

Ⅲ群は、油山から北へ派生している標高10mから30mの丘陵部に分布する遺跡群である。この遺跡群地域では、有田遺跡で包含層が検出されている。この遺跡では、ナイフ形石器文化期の遺物が新期上部ローム層の上部で出土している。他にナイフ形石器文化期の遺物が採集および後時期の遺構から出土した遺跡として、神松寺遺跡・カルメル修道院内遺跡・五ヶ村池畔遺跡がある。

Ⅳ群の遺跡が分布する地域は、山塊部との境の丘陵部にあたり、柏原遺跡で包含層が検出されている。この遺跡は樋井川の段丘上に位置し、ナイフ形石器文化期・細石刃文化期の遺物が別地点で出土している。

Ⅴ群の遺跡群は標高10m前後の段丘上に位置する遺跡群と、標高30m以上の台地頂部に位置する遺跡群があり、今後、分けてとらえる必要があるかもしれないが、ここではⅣ群の遺跡として扱うこととする。この地域では蒲田遺跡の調査が行なわれており、細石刃文化期とナイフ形石器文化期の遺物が出土しているが、包含層を明確にするにいたっていない。他に採集および後時期の遺構から遺物が出土した遺跡として、戸原遺跡・部木遺跡・駕輿丁池畔遺跡・平原遺跡・乙植木遺跡・赤石池畔遺跡・浦尻池畔遺跡などがある。

Ⅵ群の遺跡が分布する地域は、扇状地が発達している。先土器時代の遺跡は、扇状地上や段丘上・独立丘上とさまざまである。この地域では、吉武遺跡群で細石刃文化期の包含層が検出されている。同遺跡群は標高30m前後の丘陵部に位置し、遺物は水成堆積層中に疊群を伴い、一定の分布をもって出土している。他にナイフ形石器文化期の遺物が採集および後時期の遺構から出土した遺跡として、高崎遺跡・羽根戸遺跡・馬立山遺跡などがあり、細石刃文化期のものとして、湯納遺跡・羽根戸遺跡・重留遺跡などがある。

(2) 細石刃文化

細石刃文化期は細石刃が製作・使用された時期を指し、日本列島でも多くの遺跡がある。だが、その製作過程は多様であり、残核である細石刃核に顯著にあらわれている。ここでは細石刃核に視点をあて、本遺跡をはじめとする福岡平野および周辺地域の細石刃文化についてみていくことにする。

細石刃核は残った形でみていくと、舟底または半舟底状をなすものと、円錐形や半円錐形をなすものがある。まず、細石刃核については残核の形によって、半円錐形細石核・舟底形細石核としたり（鎌本1965）、半円錐形細石刃核・円錐形細石刃核・半舟底形細石刃核・舟底形細石刃核とした（麻生1965）。また、細石刃製作の技法についても湧別技法（吉崎1961）・矢出川・休場遺跡出土細石刃製作（戸沢1964・杉原1965）・西海技法（麻生1965）・福井技法（芹沢1968・林1968）などが唱えられたり、紹介された。こうしたなかで、小林達雄は、「日本に於ける細石刃インダストリー」のなかで、細石刃製作を2つのシステム：AとBに大別してとらえた

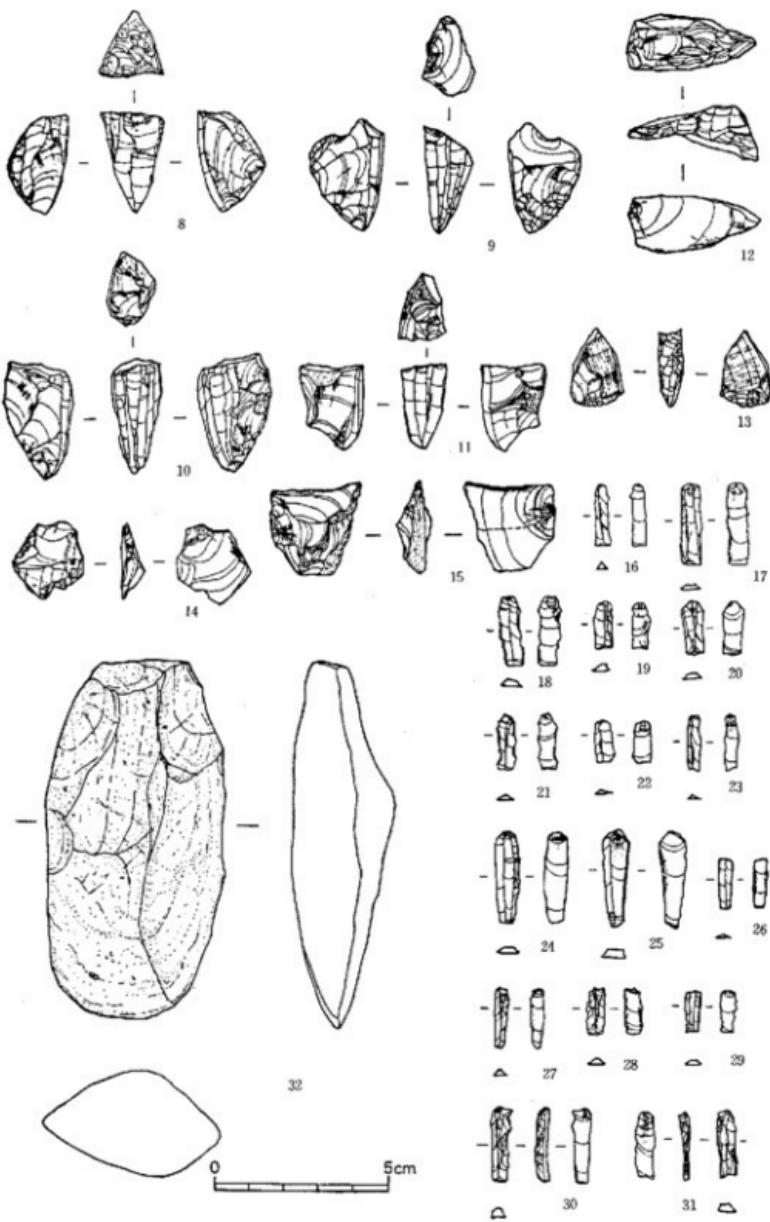


Fig. 41 門田遺跡出土石器実測図

(1970)。また、九州においては、橋昌信が「九州地方の細石器文化」のなか(1979)で、残核の形と細石刃製作技法を加味し、形態分類を行ない、I類(福井型)・II類(野岳型)・III類(船野型)・IV類(畦原型)とした。現在、形態分類については、おおむね、麻生・小林・橋の分類方法がミックスされた形で使用されているといえよう。ここでは、形態分類については、小畠弘巳が、「九州の細石刃文化」のなか(1983)で使用した分類法をとることにする。A型は舟底形・クサビ形細石刃核と称されるものである。B型は半円錐形・円錐形(野岳型)と称されるものである。C型は橋のいう「船野型」、D型は「畦原型」である。小畠はA型をAI型とAII型に分けて、AI型を広義の湧別技法・AII型を福井型に対応させている。また、B型は素材の違い・石核調整の違いからBI・BII型に分けている。

福岡平野においては、AII型とB型が出土しており、C・D型の出土はない。本遺跡出土の細石刃核は、前述したように、角礫を素材として両側面を背縁より調整し、打面を作り、細石刃を剥出するものと、側面を下縁・甲板面より調整して打面を作り、細石刃を剥出しているものがある。したがって、BII型の細石刃核といえよう。門田遺跡では包含層からはAII型(Fig.41)が、谷部の搅乱層の中からはBI型・BII型も出土している。I遺跡群では板付・諸岡遺跡でB I型・BII型が出土しており、日佐遺跡ではBI型が出土している。II遺跡群ではAII型が、柏田・深原・鳥ノ巣・天神山前遺跡などで出土している。IV遺跡群ではAII型が出土している。V・VI遺跡群ではAII型が各遺跡で出土している。AII型は、福井岩陰・泉福寺洞穴・上場遺跡・宇久島城ヶ岳遺跡で土器を共伴している。福岡平野および周辺地域では、柏原遺跡・吉武遺跡群・戸原遺跡出土の細石刃核が宇久島城ヶ岳遺跡のものと同類と考えられ、土器共伴の可能性があるが、まだ共伴していない。なお、木下修は門田遺跡谷部の調査報告書の中で、同遺跡出土の爪形文土器をAII型細石刃核共伴ととらえている(1979)が、AII型共伴の土器(爪形文・隆起線文・豆粒文土器)は平底となる可能性が高く、文様が口縁部および胴上部に集中するところから、門田遺跡出土の爪形文土器は、泉福寺洞穴・福井岩陰・上場遺跡出土の爪形文土器より新しく、細石刃とは共伴しないと考えられる。B型細石刃核は、本遺跡・板付遺跡・門田遺跡谷部・日佐遺跡・吉武遺跡群で出土しているのみである。AII型細石刃核と共伴関係がみられないのは、現時点では本遺跡のみである(Fig.40)。

次に遺物組成と遺物分布についてみていくことにする。本遺跡では細石刃のほかに、蔽石・削器・影器・使用痕のある剥片石器が出土し、門田遺跡(Fig.41)では、細石刃のほかに削器・磨製石斧・使用痕のある剥片石器が出土している。吉武遺跡群では、削器と使用痕のある剥片石器が出土している。本遺跡では径約10m前後の遺物集中が2ヶ所あり、小礫や炭化物が集中区と重なっている。門田遺跡・吉武遺跡群では本遺跡と同規模の遺物集中区がそれぞれ1ヶ所みられ、後者では礫群を伴っている。石材は、本遺跡は漆黒およびくすんだ黒曜石が主体をな

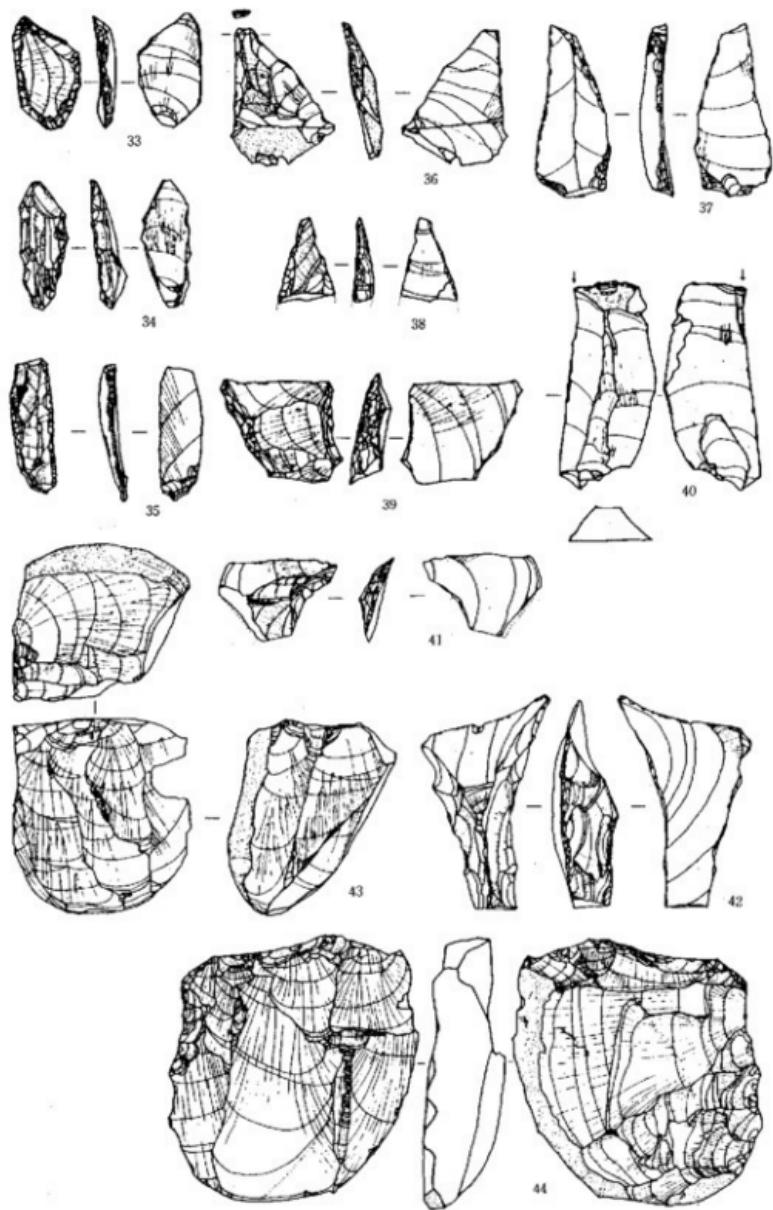


Fig. 42 諸岡遺跡出土石器実測図

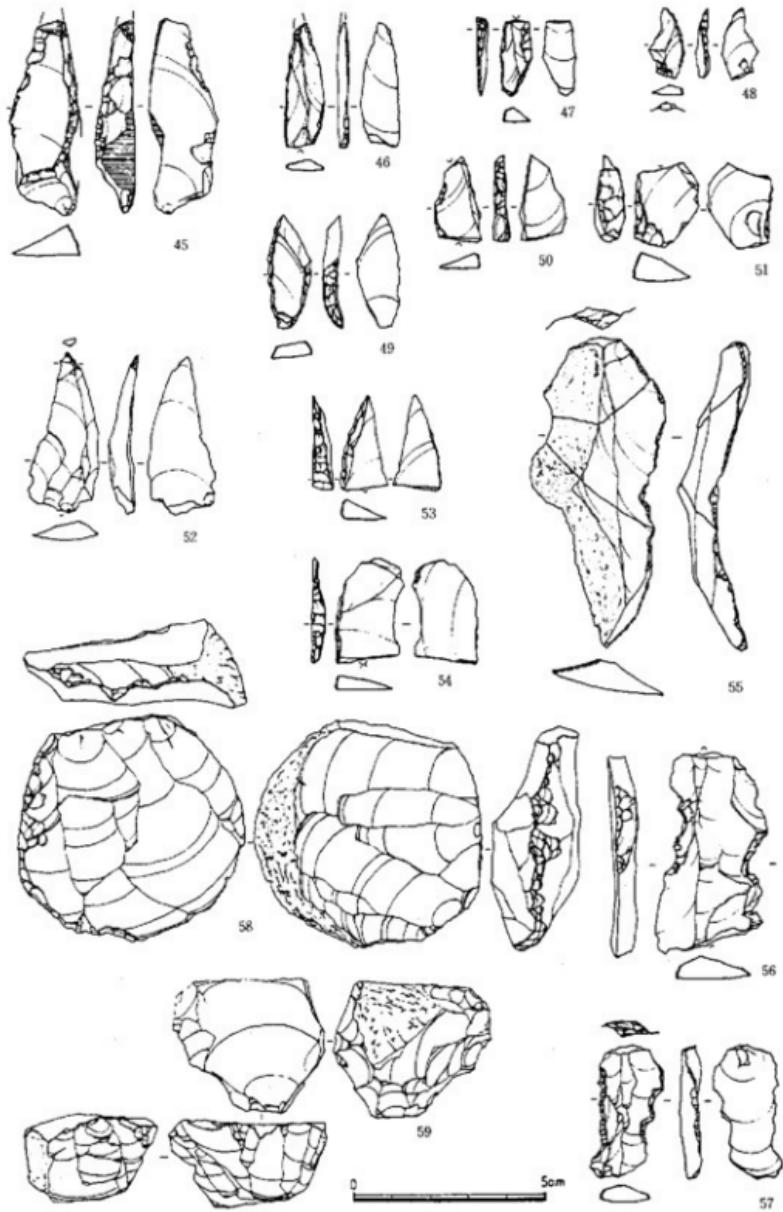


Fig. 43 諸岡館址遺跡出土石器実測図

し、古銅輝石安山岩・石英粗面岩などが使用されている。門田遺跡は磨製石斧を除いて、黒曜石が選ばれている。吉武遺跡群はさまざまな黒曜石（漆黒・乳白色など）・古銅輝石安山岩など種々の石材が用いられている。

(3) 福岡平野および周辺の先土器時代編年について (Fig. 44)

本遺跡は細石刃文化期の遺跡であるが、本遺跡をはじめとする本地域での検出石器群についてみていくことにする。なお、時期区分については、萩原博文（1980）および橋昌信・萩原博文（1983）の案にしたがった。

先土器時代を早期から終末期の6期に分けた。終末期は土器を共伴するものの、細石刃が石器組成の主体を占めていることから、先土器時代の残存形態として扱った。早期はナイフ形石器の初源期、前期は、縦長剝片を素材とした定形的なナイフ形石器に特徴づけられる時期で、前期まではAT前に位置づけられるものである。中期は横長・縦長剝片を素材としたナイフ形石器に特徴づけられる時期で、後期はナイフ形石器文化の最終段階であり、ナイフ形石器・百花台型台形石器などのナイフ形石器類の各器種が揃う時期である。晩期は、土器を共伴しない細石刃が石器組成の主体をなす時期である（山口1983）。

諸岡館址遺跡では、鳥栖ローム層中のクサリ疊を含んだ風化部から径約4mと5mに広がる地点をもってナイフ形石器文化期の遺物が出土した (Fig. 43)。同遺跡出土のナイフ形石器は2側縁加工のもの (46・47・49・50)、調整による1側縁をもつもの (45・48・51・53) 基部調整のあるもの (52)、尖端部をもたないもの (54) があり、他に抉り入り石器 (56)、削器 (55・57)、搔器 (58)、剥片石器、石核 (59)、剥片、削片がある (杉山1984)。同遺跡出土の石器は、剥片剥離技法および石器組成が駒形遺跡C地点出土のものと共通していること、包含層が新期上部ロームの下位と対比できることから、AT下の石器群と考えられる。駒形遺跡C地点での石器出土層位、完成したナイフ形石器をもつことから前期に位置づけた。

中期に位置すると考えられる石器群は、本地域では包含層が検出されていないが、本遺跡では横長剝片を用いたナイフ形石器が出土しており、近くにこの時期の包含層があると考えられる。これを井尻B I期としておく。ほかに向谷北遺跡で、横長剝片（翼状剝片）と同剝片を用いたナイフ形石器が出土している。

後期に属する遺跡としては、諸岡遺跡 (Fig. 42)・柏原遺跡・有田遺跡がある。諸岡遺跡は、2側縁加工 (33~35・37)、1側縁加工 (36) のナイフ形石器と台形石器 (39・41)、台形様石器 (42)、削器、搔器 (44)、彫器 (40)、石核 (43)、剥片、削片などが出土している。有田遺跡は (Fig. 44)、2側縁加工のナイフ形石器、剥片尖頭器、台形様石器、削器が出土している。柏原遺跡では日の岳型台形石器が出土している。諸岡遺跡に剥片尖頭器がなく、有田遺跡に百花台型を含む台形石器はないが、ナイフ形石器、台形様石器は共通点が多い。萩原は諸岡遺跡

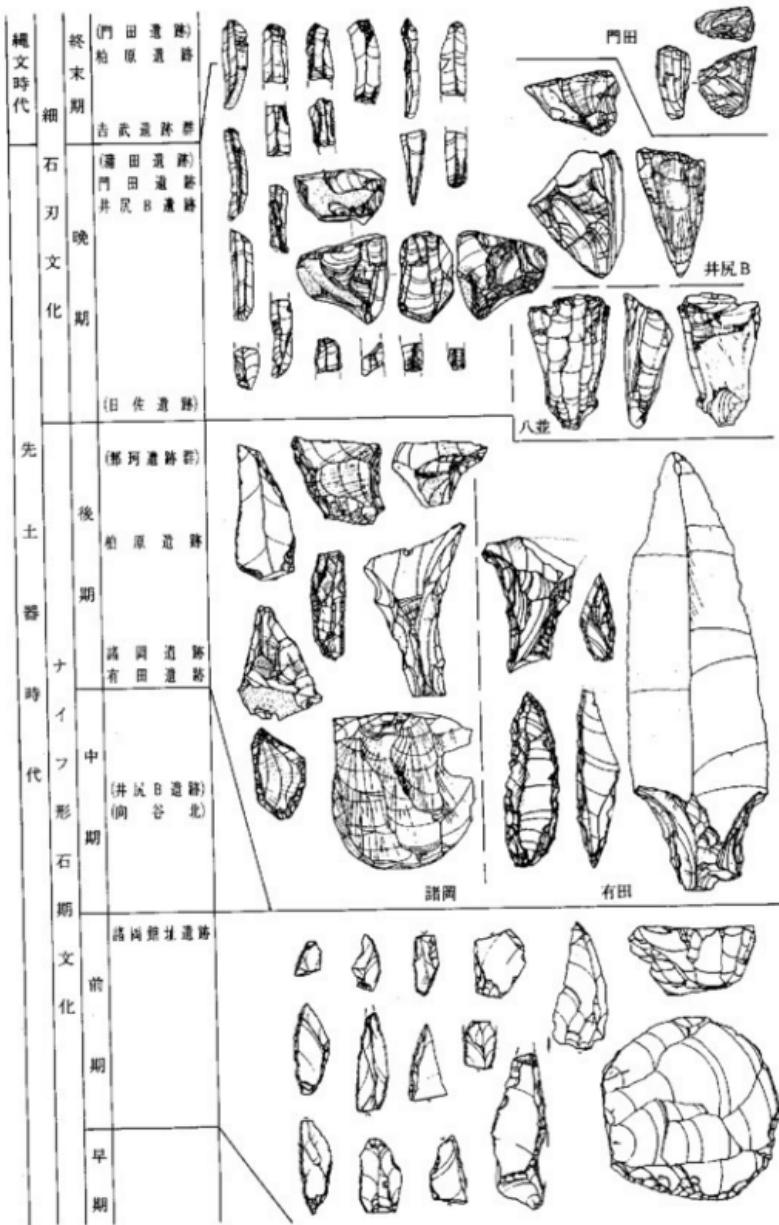


Fig. 44 福岡平野における先土器時代編年図

を中期に位置づけた（1983）が、百花台型台形石器（41）の存在は、後期に位置づけるべきであろう。有田遺跡は出土遺物が少なく、ここでは諸岡遺跡との比較から後期としたが、中期でAT直上に位置する可能性もある。柏原遺跡は、日の岱型台形石器の存在と西北九州での調査結果により後期に位置づけ、諸岡遺跡より後出のものとした。福岡平野および周辺の遺跡で採集されているナイフ形石器文化期の遺物は、ほとんどのものがこの時期に属するといえよう。

晩期の遺跡としては、本遺跡と門田遺跡がある。福井岩陰での調査を重視するならば、B型細石刃核による細石刃剥出が、A型細石刃核による細石刃剥出より先行すると考えられる。したがって本遺跡の出土石器群（井尻BII期）は門田遺跡に先行すると考えられる。All型細石刃核は西海技法（福井型）による所産であるが、打面角が30°前後で、側面形が三角形をなし、横断面も三角形のものがある（いわゆる唐津周辺型である）。泉福寺洞穴では少ないものの、土器を共伴している。この細石刃核は定形化しており、天神山前遺跡などでみられ、包含層での単独出土はないが、All型細石刃核と分けて考えていくべきであろう。時期的には福井型に先行する可能性が大であるといえる。

終末期の遺跡としては、前節で述した理由により柏原遺跡・吉武遺跡群・戸原遺跡がある。

以上、福岡平野および周辺の先土器時代の編年的位置づけを行なったが、包含層検出の遺跡も少なく、重層的な調査例としては門田遺跡（ナイフ形石器の実態がわからない）があるのみであり、今後の各遺跡群での資料の増加を待ちたい。また、ほぼ時期が確定できるのは諸岡館址遺跡・諸岡遺跡・井尻B遺跡（II期）・同遺跡（I期）・門田遺跡・吉武遺跡群であり、今後、この間を埋めていくこととなる。また、本稿は予察的なものであり、調査例を待って改訂していくこととする。

（Fig.40に使用した実測図中1～4は、小畑弘己氏の実測によるものである。）

参考・引用文献

- 麻生 優 1965「細石器文化」『日本の考古学 I』／鎌木義昌 1965「西日本の細石刃文化」『歴史教育』13-3／林 謙作 1970「福井洞穴における細石刃技術とその東南アジア・北アメリカにおける位置づけ（上）（下）」『考古学研究』64・66／小林達雄 1970「日本列島に於ける細石刃インダストリー」『物質文化』16／橋 昌信 1979「九州地方の細石器文化」『駿台史学』47／萩原博文 1980「西南日本における旧石器時代石器群の様相」『考古学研究』26-4／木崎康弘 1981「九州地方の細石核」『歴史学』55・56合併号／鎌木義昌・芹沢長介 1965「長崎県福井岩陰」『考古学集刊』3-1／木下 修 1976「門田遺跡・門田地区の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』3 1976「門田遺跡」『日本の旧石器文化』3 1979「門田遺跡・谷地区の調査」『山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告』11／二宮忠司 1975「蒲田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第33集／平ノ内幸治 1986「乙種木古墳群Ⅱ」須恵町教育委員会／杉山寛雄 1984「諸岡道路」福岡市埋蔵文化財調査報告書第108集／小畑弘己 1983「九州の細石刃文化」『物質文化』41／副島邦弘・山口謙治 1976「諸岡遺跡」『日本の旧石器文化』3／橋 昌信・萩原博文 1983「九州における火山灰層序と旧石器時代石器群」『第四紀研究』22-3

2. 石蓋土塚墓について

本調査で検出された2基の石蓋土塚墓の位置づけを行うため、福岡平野周辺の資料を収集した。入手可能なものに限ったためかなりの遺漏があることをあらかじめお断りしておく。

すでに小笠遺跡の調査報告において北部九州の石蓋土塚墓の集成と検討が行われているが、その中では時期を弥生時代後期から4世紀までと想定している。しかし、以来の調査例の増加によって再検討の必要性が出てきている。

福岡平野では一般に石蓋土塚の時期を決定し得るような副葬品、供献品の出土例はきわめてまれである。したがって近接する他遺構との関係、切り合い等を時期決定の手がかりとする場



合が多い。このような現状の中で本地域における石蓋土塚墓の初現は後期前半と推定されている小笠遺跡^{註1}、宝満尾遺跡^{註2}に求められており、その後の調査でもそれにさかのぼる例はない。その消長は千鳥22号墳^{註3}などからこれまで5世紀前半までととらえられてきたが、最近調査された堤ヶ浦古墳群SK-4が6世紀初頭の年代を与えられており、この時期まで残存するものとみるべきであろう。

小笠遺跡を始めとする弥生時代後期の石蓋土塚墓は土塚墓、石棺墓を含めた群集墓中の形態として位置づけられるものである。そのなかで門田・辻田遺跡1号石蓋土塚墓や宝満尾遺跡13号土塚墓^{註4}のように多量の副葬品を持つものもあり、その件数は石棺墓には及ばないものの決して他にひけをとるものではない。このような傾向は時代を下って弥生時代後期末～古墳時代初頭と考えられる例でもあまり大きな変化はないが、傑出した副葬品を有するものは見当たらなくなる。弥生時代後期から古墳時代初頭の段階で特徴的なことは石蓋土塚墓のみ、あるいは他の埋葬形態と共存する群集墓を形成すること、また表中では触れなかったが石蓋に粘土日張りを有し厚葬の傾向を持つことなどがあげられる。

古墳時代前期の石蓋土塚墓は古墳あるいは方形周溝墓の主体部、あるいは周溝外の副次的な埋葬施設としてのありかたを示し、小児棺として現れることも多い。中心主体に対して従属的地位を示す例が多い。なお、古賀町の千鳥古墳群22号墳では特異な例ではあるが石蓋を有する木棺墓が中心主体となっている。^{註5}さらに同町深町2号墳は独立した墳丘を持つものの1号墳に従属するという例がある。今後留意すべきである。

6世紀初頭の堤ヶ浦古墳群SK-4は小児棺であり、2号墳の地山整形後周溝外に造営された可能性が極めて高く、2号墳に直接従属的な関係を持つと考えられる。^{註6}

福岡平野の石蓋土塚は弥生時代後期に他の埋葬形態とほぼ等質なありかたとして出現するが、古墳時代以降次第に古墳あるいは方形周溝墓の第2・第3主体部として従属的な性格に後退し、6世紀初頭までには小児棺にのみに限られるものとして消滅してゆくと考えられる。

以上のような流れの中で井戸B遺跡のSK-10、SK-12を検討してみる。本例では分布状態から低墳丘の方墳に伴うものとしてとらえられ、周溝外に従属的に設けられたみるべきだろう。その時期としては、いまだ明確ではないものの井戸B1号墳に先行する時期として古墳時代前期の範疇で押さえることが可能であろう。

註1 柳田純孝他 1973「小笠遺跡」福岡市教育委員会 註2 同 註3 山崎純男他 1974「宝満尾遺跡」福岡市教育委員会 註4 飛野博文他 1987「千鳥古墳群Ⅱ」福岡県教育委員会 註5 吉留秀敏 1987「堤ヶ浦古墳群」福岡市教育委員会、吉留秀敏氏教示 註6 井上祐弘他 1978「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告第9集」福岡県教育委員会 註7 註3に同じ 註8 註4に同じ 註9 中間研志・石山鼎 1978「九州縦貫道関係埋蔵文化財調査報告XXI」福岡県教育委員会 註10 註5に同じ

福岡平野周辺における石蓋土塙墓一覧表

#1	#2	#3	#4	#5	#6	#7	#8
地	遺跡・遺構名	標高	蓋 石	墓 石	土 壈	蓋 物	備 考

福岡市

1	井戸		板状晶片岩		7×0.4×0.4	?	表面に赤色顔料? 斜面無	1
2	井戸B遺跡S K-10	14.3	板状泥岩片	1.0×1.3×0.4 縦丸方形	1.9×0.5×0.3N129°E 不整長方形	?	成人 頭頂北東	2
	S K-12	14.4	板状泥岩片		1.8×0.8×0.2-0.25N41°E	板状泥岩 士器片	赤面、石蓋面に赤色顔料	
					不整長方形		成人 頭頂南東	
3	小堀遺跡1号	27.7	板状石		1.25×0.21-0.3×0.3不整長方形	?	赤面、石蓋面に赤色顔料	3
	2号	35.6	板状花崗岩		0.95×0.55×0.25長方形	?	小児 頭頂北	
	3号	35.1	板状花崗岩片石		0.88×0.25×0.25縦丸長方形	?	小児 頭頂土	
	4号	35.1	板状砂岩、花崗岩片		1.79×0.50×0.35長方形	?	小児 頭頂土	
	5号	35.1	板状花崗岩片石		1.11×0.44×0.35長方形	?	成人 頭頂西	
	6号	35.0	砂岩、花崗岩片石		1.07×0.48×0.30縦丸長方形	?	小児 頭頂空洞	
4	日向原遺跡						13基	4
5	御園原石塙上と下		板状石		1.58×0.36×0.45長方形	?	側面、石蓋面にベンガラ	5
	下		板状花崗岩片石		1.57×0.36×0.27長方形	?	朱文式用物十件	
	上		板状花崗岩片石			?	成人 石蓋面に少額の赤色顔料	
6	堀・福吉環跡2号墳周溝外 S K-4	50.2	花崗岩片石	(0.5×1.1)×0.1長方形	1.10×0.5×0.5N26°W縦丸長方形	?	石蓋面に赤色顔料	
7	宝満町古墳丘下心置土手跡		板状多層(縦)片岩	0.77×1.25×0.38長方形	1.38×0.38-0.35×0.55N27°W長方形	勾玉2 墓玉17	小児 頭頂東	6
	宝満町遺跡6地点1号土手跡	51.1	板状花崗岩、砂岩	0.55×0.51×0.25長方形	0.70×0.35×0.25N27°W長方形	?	小児 頭頂東	7
	13号土手跡	56.4	砂岩、片岩、灰岩板		2.11×0.45×0.42N77°W長方形	?	土器片1 成人 石蓋内面赤色顔料	
8	若宮遺跡5号墳					?	成入 頭頂西 石棺と同時に埋葬	8

春日市

9	- / - 号土手跡	33.7	板状花崗岩6	0.95×0.7長方形	1.78×0.60×0.14cm		成人 頭頂北東 北東延直面化粧	9
10	池ノ下遺跡					?	2基	10
11	大森遺跡					?	2基	11
12	白石桂遺跡						13基	12
13	香平原遺跡1号	29.4	板状花崗岩片岩6	(0.6×1.1)×0.6長方形	(0.60)×0.36-0.35×0.45不整長方形	?	成人	13
	2号	31.1	板状8	2.5×1.00×0.5不整長方形	1.9×1.0×0.7N65°W不整長方形	?	成人 廻位小Dに立石 墓頂北	
14	笠塚山遺跡					?	1基	14
15	向谷北遺跡1号	34.5	板状花崗岩6	2.4×1.5×0.3縦丸長方形	2.0×0.75×0.45縦長方形	?	成人 頭頂北東	15
	2号	34.4	板状花崗岩6	0.7×1.00×1.0縦丸長方形	1.8×0.6×0.36長方形	?	成人 頭頂北西	
	3号	34.4	板状花崗岩7	2.0×2.0×0.15縦丸長方形	1.9×0.7×0.4縦長方形	ヤリゴンナ1枚外	成人 頭頂北西	
							石蓋、底面に赤色顔料	
4号	34.3	板状花崗岩1			1.30×0.6×0.4縦丸長方形	?	小児 頭頂北	
5号	34.3	板状花崗岩3	2.1×0.5×0.2縦長方形		2.0×0.5×0.5縦長方形 横口開隙式	?	成人 頭頂西	
						?	墓石底裏面に赤色顔料	
6号	34.0	板状花崗岩5	1.5×1.0×0.2縦丸長方形		1.1×0.6×0.3縦丸長方形	?	小児 頭頂北西	
7号	33.8	板状花崗岩3	0.9×0.9×0.2縦丸長方形		0.5×0.5×0.3縦丸長方形	ヤリゴンナ1枚外	墓石底裏面に赤色顔料	
8号	33.8	板状花崗岩2	上段(1.8×1.0)×0.3縦丸長方形 中央(1.2×0.9)×0.25不整長方形 下段(0.8×0.7)×0.1縦丸長方形		0.8×0.6×0.2縦丸長方形 基部内土臺1	?	成人 墓石底面に赤色顔料 小児 底面、蓋外部分に赤色顔料	

記号	通路・道橋名	標高	蓋 石	基 基	土 塗	道 物	番 号	文獻	地図	
									W2	W3
	9号	34.2	板状、楕円花崗岩5	1.8X0.8X0.1 隅丸長方形	1.8X0.3X0.4 隅丸長方形	無	成人 蓋石一部、底面に赤色顔料	15		
	10号	54.0	板状、楕円花崗岩5	2.4X1.0X0.2 隅丸長方形	1.8X0.3X0.4 不整長方形	無	成人 蓋石北、底面に赤色顔料			
	11号	33.9	板状花崗岩6	2.4X1.0X0.3 隅丸長方形	1.7X0.3X0.4 不整長方形	無	成人 底面に多量の赤色顔料			
	12号	33.3	板状花崗岩6	0.8X0.6X0.1 隅丸長方形	0.5X0.3X0.2 赤褐色	無	成人			
	13号	33.4	板状、柱状花崗岩6	1.8X0.8X0.6 隅丸長方形	1.4X0.5X0.3 隅丸長方形	無	強化北、裏側外れ、小口に顔料			
	14号	33.2	板状、柱状花崗岩6	0.8X1.1X0.2 長方形	1.8X0.4~0.6X0.4 隅丸長方形	土塗1 石臺上	成人 蓋石裏面に赤色顔料			
16	門田道跡修復新石塀	31.4	板状花崗岩5	2.4X1.5X0.1 隅丸長方形	2.2X0.7X0.3 K87W赤褐色	無	成人 蓋石底面に赤色顔料	16		
17	門田道跡古墳跡3号	26.0	板状花崗岩4、土塗塗	1.65X0.76~0.83 長圓形	1.55X0.45X0.3~0.4521E 隅丸長方形	ガラス小玉200	成人 蓋石有	17		
	25	33.5	板状花崗岩2		0.8X0.15X0.23 K87W 隅丸長方形	無	大人 戰抜中腹			

大野城市

38	中・寺尾跡1号	27.7	板状5	2.85X1.48X0.55長方形	L30X0.3X0.55K32W 長圓形	無	成人 蓋石底面 板生駆駆	18
	2号	0.0					石器・板のみ残	

太宰府市

19	西御前古墳群1号墳6号生藤原	61.9	板状花崗岩4	2.5X1.5X0.8 隅丸長方形	1.36X0.25~0.4X0.35角形	無	小兒 蓋石東 小口に赤色顔料	19
	7号土塁部	62.2	板状花崗岩6	2.5X2.0X1.8 隅丸長方形	1.7X0.2X0.35X0.2角形	無	成吉思汗土塁上に赤色顔料	
20	成吉思汗跡1号	+2.5	花崗岩2	1.4X(1.0)X0.5 長方形	0.85X0.4X0.30W30E 長方形	無	小兒 蓋石東	20
							粘土日張上に赤色顔料	
							小兒 蓋石底面 板生駆駆	

筑紫野市

21	吉柳1号下1号	43.5	板状玄武岩・花崗岩3	0.17X1.16X0.25不整円形	0.85X0.42X0.22~0.33長方形	無	小兒 蓋石西 張生	21
	2号	43.8	板状5	1.36X1~0.85X0.45不整長方形	1.02X0.36~0.31X0.22角形	無	上駆駆表面へ3C廻く	
22	唐人塚1号墳下-1号	47.2	板状花崗岩2		1.27X0.41X0.40N46W不整長方形	無	小兒?	22
	1-2号	46.8	無		0.29X0.52X0.50 N46W長方形	無	成人 蓋石北西	
23	弓橋72-2号	47.2	板状花崗岩剖石3	1.2X1.1X0.6不整形	0.95X0.45X0.30S45E (木棺蓋込みあり)	無	小兒 蓋石東南	
	2-4号	47.1	板状花崗岩剖石6	2.8X1.1X0.3 隅丸長方形	1.5X0.25X0.35S48E 長方形	刀子1	小兒 蓋石東南	
	2-7号	46.3	板状花崗岩剖石3	0.23X0.9X0.2長方形	1.8X0.25~0.35X? S49.5W長方形	無	成人 蓋石上	
25	5号墳15-1号	47.0	板状花崗岩3		1.75X0.43X0.35N47E 不整長圓形	刀子1	成人 蓋石北西	

●筑紫野郡珂川町

23	井河古墳群7号墳出雲井1号	36.6	板状3	0.9X0.7X0.1不整形	0.6X0.4X0.5不整長方形	無	小兒	23
	2号	34.3	板状5	1.5X1.0X0.3不整長方形	0.8X0.3X0.3不整長圓形	無	小兒 蓋石	
24	吉子通路1号溝底3号	37.9	板状7	1.2X1.0X0.95不整長方形	1.0X0.2X0.2長方形	ヤリカン1	小兒 蓋石赤色顔料布 潤滑布	24
25	吉子町古墳方型周溝底1号	46.1	板状、柱状花崗岩2		1.55X0.42X0.3N47E 身軸	無	溝は方形用鉄鑿?	25
							成人 蓋石 ec1?	

番号	品目	規格	基材	基材名	寸法	上部	滑物	骨子	人目
3	石蓋土上部直角	43.5	板状花崗岩、片麻岩5	1.83×1.31×0.25長方形	1.65×0.46×0.27 N22.5°E 長方形	海螺接着剤 赤褐色	成人 塗装済 一括2mの基材	26	
2号	谷筋・柱状花崗岩4	44.3	1.38×0.17×0.15 不整丸長方形	1.21×0.43×0.28 N45°E 不整長方形	赤褐色	面段落 朱面軽土塗			

糸島郡前原町

3	片尾上字直角1号	43.5	板状花崗岩、片麻岩5	1.83×1.31×0.25長方形	1.65×0.46×0.27 N22.5°E 長方形	海螺接着剤 赤褐色	成人 塗装済 一括2mの基材	26
2号	谷筋・柱状花崗岩4	44.3	1.38×0.17×0.15 不整丸長方形	1.21×0.43×0.28 N45°E 不整長方形	赤褐色	面段落 朱面軽土塗		

糸島郡志摩町

2	滑石連続5号椎	33.9	板状	0.9×0.9×0.15薄丸長方形	0.5×0.15×0.2×0.35	無		27
---	---------	------	----	-------------------	-------------------	---	--	----

柏原郡志免町

3	七夕池遺跡1号	39+	②	0.0×1.2×0.05 薄円形	1.15×0.6×0.45 長脚円形	ヤリガナ1	小見 1~6号墓は同一墓群	28
2号	39+ 3	0.6	0.9×0.9×0.15不整形	1.09×0.6×0.27 長脚円形	無	無	小見	
3号	39+ 4	1.57	1.22×0.10不整形	1.18×0.40×0.33 薄丸長方形	無	無	小見	
4号	39+ 6	2.58	1.77×0.34不整形	1.81×0.45×0.35 薄丸長方形	無	無	成人	
5号	39+ 6	2.62	1.25×0.15不整形	1.77×0.50×0.35 薄丸長方形	無	無	成人	
6号	39+ 10	0.11	1.70×0.15薄丸長方形	0.65×0.45×0.50 薄丸長方形	無	無	無	

柏原郡古賀町

3	千吉古墳群22号棺蓋1主基材	22.8	板状	上段6.8×3~3.8×0.15不整形 中央4.8×2.4×0.2薄丸長方形	3.3×0.9×0.2長方形 木棺内底 2.2×0.4	金鋼製耳鼻1付 ヤリガナ1 鉤刀子1 錆錠24 ナラ付	成人 中設置方式要より木棺 床面に小標 天井石下面にベンガ ル付	29
1号石蓋本松墨	22.9	板状③	3.9×1.3×0.5薄丸長方形	木棺内底 3.1×0.8長方形	ヤリガナ1	成人 床面側面に小標		
3	80号2号	61.4	板状金色漆引2	2.45×1.2×0.2薄丸長方形	1.16×0.54×0.25N1.0°W 嚙磨円形	無	小見 方旗 壁面古式巻帯に先行 30 3号標と出世牌	

※ 1 : №は分布図の番号。 ※ 2 : 名称は報告者にしたがった。ただし「石蓋土塗」は省略。 ※ 3 : メートルで表現し、小数点以下第2桁を四捨五入した。石蓋上面の標高を示す。 ※ 4 : カッコ内は現存数。形状の記号は統一した。 ※ 5 : ここでは石蓋の覆わない部分をさす。長×幅×深さをメートルで表現する。数値は報告者にしたがい、ないものについては筆者が実測図から起こして小数点以下第2桁を四捨五入した。カッコ内は現存値、あるいは復元値。形態については報告者にしたがった。 ※ 6 : ここでは石蓋の覆う施設をさす。長×幅×深さをメートルで表現する。数値は報告者にしたがい、ないものについては筆者が実測図から起こして小数点以下第2桁を四捨五入した。カッコ内は現存値、あるいは復元値。形態については報告者にしたがった。 ※ 7 : 棺内遺物以外についてのみ位置を表記した。 ※ 8 : 基本的に報告者にしたがった。小見、成人の別は報告のないものについてのみ土塗の数値から判断した。

○ 文 献

- (1)中山平次郎 1924「井尻の弥生式遺跡」考古学雑誌14~12,同1926「井尻及び寺福童の壇棺」考古学雑誌17~12 (2)本報告 (3)柳田純孝他 1973「小笠遺跡」市教委 (4)歳山猛 1954「環溝住居跡小論譲」史調78 (ただしこの資料は実見していない) (5)中山平次郎 1931「難御駿駿駿付近に発見せる石蓋土塗と無蓋土塗」考古学雑誌21~9 (6)吉留秀敏 1987「堤ヶ浦古墳群」市教委,吉留秀敏氏教示 (7)山崎純男他 1974「宝溝尾遺跡」市教委 (8)吉留秀敏氏教示 (9)宮小路賀宏他 1969「一の谷遺跡」春日町教委 (10)丸山康晴氏,平田定幸氏教示 (11)同 (12)松岡史,龜井勇 1966「伯玄社遺跡」県教委,春日町教委(詳細未報告) (13)前田義人,馬渡圭子,伊崎信治 1981「西平塚遺跡・ナライ遺跡」春日市教委 (14)同 (15)丸山康晴,平田定幸 1982「春日地区遺跡群」春日市教委 平田定幸氏教示 (16)佐々木隆彦他 1978「山陽新幹線第6集」県教委 (17)井上裕弘他 1978「山陽新幹線第9集」県教委 (18)川辻博他 1977「中・寺尾遺跡」大野町教委 (19)森田勉他 1976「太宰府町の文化財第一集・芦北浦古墳群」太宰府町教委 (20)三野章 1968「咸屋形遺跡」県教委,エーザイ株式会社 (21)中間研志 1978「九州縦貫道XXIV」県教委 (22)川辻昭人,森田勉,平ノ内幸治 1977「九州縦貫道XXV」県教委 (23)沢田康夫 1983「井河古墳群」郡河川町教委 (24)茂和敏他 1986「恵子遺跡群」郡河川町教委 (25)高橋徹也 1975「恵子若山遺跡」恵子遺跡調査会,東洋開発株式会社 (26)岡部裕俊 1987「井原遺跡群」前原町教委 (27)浜田信也 1984「熊添遺跡」志摩町教委 (28)上野精志 1974「七夕池遺跡」志免町教委 (29)飛野博文他 1987「千鳥古墳群II」県教委 (30)中間研志,石山豊 1978「九州縦貫道XXI」県教委

3. 井尻古墳群について

(1) 「井尻大塚」について

井尻遺跡において古墳の存在を指摘したのは青柳種信である。著名な銅剣鋲形の出土に関する記載と共に触れてある。「筑前國統風土記拾遺」那珂郡井尻村の条に次の文がある。

「村の東南藤崎人家の後を大塚と云、塚あり、いかなる人を葬りし歟詳ならず。又寛政の末の頃熊野権現の後廣籬を開き、溝を掘たりしが、百姓悲吉という者塚の際か鉢の鎗範を掘出せり。石型長三尺斗、上下合せて有、石質温石の如し。須玖村に有鎗範の類なり。其の柄より炭屑多く出たり。然れば古此所に銅鉢を銷たりしなるべし。由來不詳。此邊土中より古瓦多く出る。昔大寺など有し跡なるべき歟。」

すでに中山平次郎氏も注意しているのであるが^{註1}、この文中には2つの「塚」が記録されている。一つは藤崎人家の後の「大塚」であり、もう一つは熊野権現の後の「塚」である。文章のつながりからみてもこれらは別個の対象を示しているようである。中山平次郎氏は現地踏査も含めて検討し、熊野権現社の後の「塚」は「溝」であり、傳寫上の誤りであろうと結論している。この点については、井尻遺跡における古墳の位置と分布を知るうえで重要であるのでここで再検討を加えたい。

先の『拾遺』の中で「大塚」は、それが井尻村の東南にあたり、「藤崎」という人家の後に位置していることを明記している。調査期間中に聞き取りを行なった結果、「藤崎」は近年は番地の使用と共に使われなくなりつつある地名で、現在の井尻5丁目付近にある。戦後は井尻4丁目、横手、平原の一部を含めた地名になったが、古くは二軒茶屋と呼ばれた旧道の通り



Fig. 46 井尻周辺地形図

の一部の範囲を示している。いずれも近世に南側に造寺された本行院に由来する地名であるという。また、「大塚」の字名が残っており、およそ地神社から南西の付近である。

中山平次郎氏は1927年の資料紹介の中でこの「大塚」の位置について触れている。「…爾後の搜索によって、今日でもこの塚が藤崎人家の傍にあることが知れてきた。現状では塚の痕跡といふべきもので、その原形を知り難いが、塚跡と認むべき隆起は藤崎と井戸の間の畠中に存して居る。」

中山平次郎氏が確認したこの「塚跡と認むべき隆起」は残念ながら現在は市街化によって確認是不可能であり、畠中の隆起について地元の方々に聞いてみたが記憶に残されていない。この付近で地形にわずかでも隆起が認められるとすれば、現在の地神社の部分であろう。いずれにしても、「大塚」は現在の井戸5丁目と4丁目の境界付近の比較的限られた範囲にその位置が求められると考えられる。

さて「拾遺」ではこの他に熊野権現社のうしろの廣敷にも「塚」があると記されている。現在の熊野権現社は地神社境内に合祀されているが、1913年に現在の井戸公民館の位置から移設されている。そこは今世紀初頭頃は井戸集落の東にあたり、井戸丘陵から西側へ樹皮状にのびた小丘陵の頂部である。近年踏査をしてみたものの周囲は宅地化が進み、地形の変化は著しく公民館の庭から少量の土器片を探集したにとどまった。この地点については1910~20年代に中山平次郎氏が現地での踏査も含めて検討を加えている。その成果について報告中から抜き出し簡単にまとめてみよう。

まず、1916年の踏査では「熊野権現社の所在を尋ね、その附近を搜索して見ると、その裏地に籠や雜木林を貫いて畠地に出る小路があり、これに沿て深さ一間許の空溝が掘られて居り、この出はづれ邊に多く古瓦が散列せるを見出したが、他には別に獲るところが無かった。」「併しこの地の熊野権現社付近一帯は籠や雜木林で、加うるに下草の繁茂が極め旺盛で、搜索不便迫ても満足な調査を為し能わぬ地域であった…」とある。

また1924年の報告では、「村民からの聞き取りから熊野権現社の後には「溝の邊には塚らしきもの一ヶ所も無い」という。」

こうした結果から中山平次郎氏は、「塚の際」は「溝の際」とあるべきを傳寫の際に間違えたようである。」と結論している。

しかし、この結論に若干の疑問がある。それは、青柳種信が『柳園隨筆』で先の青銅器の鎗範出土、発見の状態について触れている項にある。以下に収録すると、

「剣を鋳たる形の事、今歲寛政9(1797)年7月25日太宰府天満宮に詣で帰るさ、那珂郡井戸村を過る。爰に此春の頃村の東北方に廣き籠有りしを墾て畠とせしが古瓦多く掘出せしと云へり。依之見まく思ひ立寄りたるに、其墾たる地廣さ一町ばかり、西北は村に連り、東南は田

なり。其畠の中央に小高き岡あり、此より瓦多く出しこと云（此岡自然の岡に非ず、田土を以てわざと築きたる者なり。其土の性畠の地と違し里民いへり立寄りて見）其瓦の制三宅觀音寺などのと同様に綱目あり裏は布目なり。又其側より石の鉄形を鑿出せり、劍の形なり。（中略）此石の鉄形は懶吉と云う農夫獲たるとて己が家の中に取入置たり。（以下略）

以上の文章を要約すると、村の東北に位置する城を開墾した際にその城の中央に小高き部分があり、その周囲より多くの古瓦と共に鎧範を出土した、ということになろうか。ここで問題となるのは、「畠の中央に小高き岡あり」とありその岡が人為的な盛土で構築されていると観察されている点である。盛土中には水成堆積土の存在も推定される部分もある。こうした記載に中山平次郎氏が検討を加えていないのは疑問であるが、おそらく寛政年間に進んでいた開墾は早い時期にこの岡も削平してしまったにちがいない。また、「柳園隨筆」でこの中では現地で追跡の鍵となった熊野権現との関係を明記していない。さらに記された当時の地形とあまりに異なるために検討を避けたとも考えられる。青柳種信が『拾遺』を著する過程で、先の人の為的岡を「塚」と表してもこれは誤らではあるまい。さて、この人為的な岡はすでに再検討のしようもないが古瓦等の出土から、未発見の廃寺の基壇跡の可能性もあるが、古墳の可能性も考えておきたい。

（2）井尻B 1号墳とその周辺

井尻古墳群について 今回の調査で古墳時代の埋葬遺構を多数検出することができた。このうち井尻B 1号墳は5世紀後葉の周溝を巡らす古墳と判明した。また、それに先行する墳墓としてSD-15とSK-16がある。擾乱や削平が著しいが、低墳丘の方墳と推定される。この方墳とその周辺に分布する木棺墓、石蓋土塗墓、土塗墓などはいずれも時期を決定する遺物等の出土がなく、年代と性格を検討することが困難である。しかし、別項で述べたように石蓋土塗墓の特徴と性格、棺内に遺存していた赤色顔料の分析等から、消極的ながら古墳時代初頭～前葉に位置づけられるものもある。このように井尻丘陵の最高所の一角に遅くとも古墳時代前葉には墳墓の築造が開始され、同中期には井尻B 1号墳が造られている。調査区内ではこの時期の他の遺構は認められず、付近は一環して墓域を形成していたと考えられる。なお、先述した旧熊野権現社の「塚」と現在の地縁神社の高まりもなお古墳の可能性がある。また、「井尻大塚」と井尻B 1号墳とが同一古墳であると断定はできず、別古墳である可能性も残される。

以上のように、井尻丘陵には少なくとも数基の古墳が存在し、一定期間墓域を形成していたことが明らかになった。これを井尻古墳群と命名する。今後の調査の進展で先の古墳の可能性を探り、また井尻古墳群全体の構成と範囲を明らかにしなければならないと考えられる。

方墳（SD-15、SK-16）について 調査区内でコの字状に巡る溝SD-15を検出した。擾乱と上部の削平によって部分的に溝底のみを残す状態であったが、中央部に検出された主体部

SK-16との関係で、一辺約8mの方形の墳墓であると判断した。墳墓には2基の主体部を検出した。SK-16の掘り方は浅くかつて墳丘が存在したことを推定させる。主体部の保存状態は悪いが、小規模な竪穴式石室であった可能性がある。周溝の周りには石蓋土塚墓、木蓋土塚墓、土塚墓などが検出されている。周溝を切る例がないことから本古墳築造後に付設された埋葬主体もあると考えられる。本古墳からは築造時期を推定させる遺物の出土はなく、その判断は困難である。類似する墳墓群を形成する例として、周辺では那珂川町恵子若山遺跡や妙法寺古墳群などがある。埋葬施設の形態、主体部内の赤色顔料の特徴などから井戸B1号墳に先行する時期の古墳時代初頭～前葉に位置づけられると考えたい。

井戸B1号墳について 本古墳は調査開始以前に墳丘を削平されており、周溝だけが残存していた。しかも調査範囲が周溝全体の1/4以下と狭い範囲であった。そのために本古墳に関する知見はかならずしも多くはない。ここではその成果をまとめ、ある程度の推定を含めて可能な限り古墳の形態を復元しその性格を検討したい。

墳形は周溝の形態から円墳か前方後円墳と推定される。その規模は墳丘側周溝底を仮に墳端とすれば直径18m、周溝外縁で約24mと推定された。仮に前方後円墳であれば最大で全長約35m前後と推定される。

墳丘形態や構造についてはすべて不明であるが、周溝内への転石が少なく、葺石はなかったと考えられる。内部主体についてはすべて不明である。しかし、周溝内から小口面に赤色顔料の付着する玄武岩板石や、副葬品の一部と推定される鉄器、玉などが出土したことから、石室は早い時期に破壊されていると考えられる。石室は石材の特徴から、本地域ではこの時期（5世紀後半）に一般的な竪穴系横口式石室と推定される。その規模や開口方向についても不明である。

本古墳の周溝内からは埴輪が出土した。完形品はなくすべて周溝内に転落した状態であった。そのうち円筒形・朝顔形埴輪は破片でも個体別に比較的近接して出土し、赤色顔料の塗布裏も比較的良好に残ることから、墳丘斜面の近い距離に樹立してあったものが転落埋没したものと推定される。埴輪は調査区内で円筒形7、朝顔形3の合計10個体が個体識別できた。なお、その他に未接合の破片数も多く実数はこれより少し増えると思われる。以上のあり方から本古墳での埴輪樹立のあり方を検討してみたい。

円筒形・朝顔形の埴輪は周溝内での出土にやや疎密があるものの、おおよそ全体から出土することから墳丘を巡るように樹立されていたと推定される。それが一重か二重かも明確でないが、風化程度や接合などの出土状態から一重と考えられる。埴丘は円丘部で径18mと推定され、埴輪樹立の位置はそれより2～3m内側を巡るとするなら、その円周はおおよそ38～44mとなる。円周の1/4周で10個体強が出土するのであるから、約1mおきに1個体を据えたと考えら

れる。また円筒形と朝顔形の比率から円筒形2個体につき朝顔形1個体を据えたと考えられる。このような想定が可能であり、本古墳が円墳であるならば円筒形約30、朝顔形約15個体程度の埴輪が使用されたとみられる。

家形埴輪は小破片として出土し、器表の風化が著しいことや調査区内の周溝から分散して出土したことから、墳頂部に樹立してあったと推定される。

周溝内から出土した須恵器は故意に打ち割られており、供獻祭祀ではなく墓前祭祀に使用されたと推定される。須恵器大甕は周溝内南側に一括して出土した。復元過程で底部に穿孔の痕跡があることに気づいた。またその割れ口の形状から、内部から棒状の工具で刺突穿孔していると推定された。調査時の所見では大甕出土点に埋甕として埋置した痕跡ではなく、破碎した破片を一括して周溝内に投棄した状態と考えられた。(須恵器については本章5項で詳述している。)

付設遺構 SK-31について 井尻B1号墳の周溝外壁に構築された本遺構は埋葬遺構と推定された。時期は周溝の第3層群が堆積した段階であり、古墳築造後まもない頃と推定される。したがって、5世紀後葉～5世紀末葉に位置づけられる。形態は開口部と天井部が崩壊しているために詳細は不明であるが、開口部から内傾し、横長の横穴部に達する半地下式となる。開口部の閉塞構造は不明である。横穴部の規模は成人を埋葬するにはやや狭小である。前庭部の床面からは供獻（副葬）品と推定される遺物が出土した。本遺構に類似する遺構には「横口式土塙墓」と「初期横穴墓」がある。この両者は類似点はあるが、出現する時代と地域が異なることからそれぞれ別の系譜をもつものと考えられる。前者は北部九州の弥生時代中期から古墳時代初頭にみられる埋葬形態である。後者は北部九州でも豊前地域を中心に5世紀後葉に出現をみる埋葬形態である。このうち「横口式土塙墓」は形態、規模などに本遺構と類似する点がある。この埋葬形態は台地上などの平坦面から墓塙が穿たれる点、墓塙の形態や蓋の構造などから、指摘されているように土塙墓、甕棺墓に出自を求める考え方である。また、この埋葬形態は弥生時代中期中葉から後期中葉に多くみられるものであり、最も新しい例で筑紫野市唐人塚2～9号土塙墓³¹²の1例のみ古墳時代初頭として位置づけられている。もちろん本例で5世紀代まで降りる例ではなく、本遺構との関係を求めるのは困難である。本遺構が斜面に構築される点は基本的に「初期横穴墓」に類似する。また平面形態が不整橢円形で開口方向に対して横長の例は、行橋市竹並遺跡³¹³や中津市上ノ原横穴墓群³¹⁴にある。しかし、それらの例は群集墓を形成するものである。福岡平野およびその周辺でこの「初期横穴墓」の検出例が少ないとからもその関係は疑問視される。しかし、近年小郡市横隈鍋倉遺跡II区において「初期横穴墓」群³¹⁵が検出された。これは玄室長軸に羨道部が付くいわゆる妻入り形態である。またその供獻遺物の須恵器は5世紀後葉を下るものではなく初源期の一例といえる。したがって、「初期横穴墓」

は筑前地方にも分布していると判断され、本遺構もその一例の可能性がある。なお、本遺構の場合は横穴墓が独自にあるものではなく、あくまで井戸 B 1 号墳に従属的に付設している点が注意される。今後、類例を待って検討を加えたい。

井尻B1号墳出土の埴輪について 九州における埴輪の研究は高橋徹氏(1976)による「九州の埴輪概観」に端緒が求められよう。そこでは当段階での九州の埴輪資料を統括的に捉え、編年と技術的な様相を示している。その後、資料は増加しているが、基本的にこの研究を基礎として進めることができると考えられる。

さて、井尻B1号墳では比較的保存の良好な一括資料を得ることができた。時期的にも5世紀後葉という資料数の少ない時期の例である。また、近年福岡平野で5世紀代とみられる埴輪資料の出土があいつぎ、九州でも最も早く埴輪を導入する本地域での埴輪技術を編年的に検討する良い機会といえよう。残念ながら、ここでは紙数の都合で詳細については別稿を用意したが、その概略を述べておきたい。

井尻B1号墳の埴輪は高橋編年による第Ⅲ期に位置づけられる。そのおもな特徴は外面に施されたA種横ハケを基調とする2次調整である。また、すべてに墨斑を有しこちらは窯窯焼成でなく、いわゆる野焼きであると考えられる。これに先行する資料としては博多1号墳出土埴輪^{注17}があり、第Ⅱ期に位置づけられる。後出する資料としては那珂川町貝徳寺古墳出土埴輪^{注18}があり、第Ⅳ期に位置づけられる。貝徳寺古墳は出土須恵器が陶邑でいうTK-23~TK-47に併行する時期とされ、井尻B1号墳にすぐ後続する段階といえる。その埴輪には墨斑が認められず、窯窯焼成であると考えられる。北部九州での窯窯焼成の初現は井尻B1号墳以降に求められる。

井尻B1号墳出土の家形埴輪は、全体をおおよそ推定できる数少ない資料として貴重である。先に示した博多1号墳、貝徳寺古墳でも良好な資料が出土している。その比較検討は別稿で果しない。博多1号墳の家形埴輪は本報告書に改めて掲載しているので参考とされたい。

註1 中山平次郎1924「井尻の弥生式遺跡」考古学雑誌14-12
註2 地元での聞き取り調査に際して野上淳次、金子久吉両氏にお世話になった。記して感謝したい。
註3 中山平次郎1927「井尻及び寺福
竜の土塁」考古学雑誌17-12
註4 地球社は井尻丘陵の中央部にある。本殿基壇の部分が周辺より0.5m程高まっていることが以前より注意されていた。福岡市教育委員会による「福岡市文化財分布地図」(1980)作成の折、「井尻大塚」の候補地として挙げられている。
註5 註1と同じ。
註6 青柳種信者の「柳園隨筆」は、筑後国三井郡高良山(現久留米市御井町)高良神社祓銅鉢の縁に「柳
園隨筆、劍を創たる形の事」としてその部分の抄出がある。この文は高橋健自1916「劍ノ源創考」⁴⁾考古
学雑誌7-3と註1の論文に採録されている。本稿ではこれを使用した。
註7 高倉洋彰、崎井二郎
註8 池田康夫1981「妙法寺古墳」那珂
川教育委員会
註9 早見信也1985「櫛口式土塁墓について」『横隈気塚遺跡』小都市教育委員会
註10 上野精志1975「初期軒轅墓研究の現状」『考古学ジャーナル110』、註11 註9と同じ。
註12
川沼昭人1977「九州福島白鳥郡追田係埋蔵文化財調査報告書」⁵⁾福岡県教育委員会
註13 赤崎敏男他
1979「竹アベ遺跡」竹又遺跡調査会
註14 村上久和編1982「上ノ原遺跡群」⁶⁾大分県教育委員会
註15 片岡宏1986「横隈鍋食遺跡」⁷⁾小都市教育委員会
註16 高橋徹1976「九州の埴輪慨観」「二子
塚遺跡」久留米市開発公社
註17 井沢洋一編1987「博多Ⅳ」福岡市教育委員会
常松幹雄1987「博多
Ⅹ」福岡市教育委員会
註18 佐藤昭司編1987「貝塚寺古墳」那珂川町教育委員会

4. 博多1号墳出土の家形埴輪

本古墳は福岡市博多区祇園町1番に所在し、井尻B1号墳と同様に那珂川右岸に立地する古墳である。ちなみに両者の間は直線で約5.5kmを測る。1985・1986年に中世都市遺跡である「博多遺跡群」の調査中に発見、調査された。立地の地形は那珂川と御笠川に挟まれた河口に近い三角州の中央最高所であり、墳丘基底部の標高は約3.1~3.4mを測る。墳形は前方後円墳であるが、中世以降の遭構、擾乱によつて破壊が著しい。墳端にあたる葺石の基底部だけが部分的に残存し、墳形と規模を知る手がかりとなつた。報告書によると後円部径38~41m、くびれ部幅13~17mを測り、全長60~65mと推定されている。これは福岡平野では最大級の規模といえる。築造の時期は出土した円筒埴輪などから5世紀前葉と推定され、福岡平野の首長墓系列としては老司古墳に次ぐ時期になる。

ここで報告する家形埴輪は本遺跡群の第28・31次調査において、本古墳のくびれ部付近から前方部付近にかけて破片として出土したものである。その一部はすでに報告されている。その後の整理作業の結果、新たに破片が見つかりその個体数とある程度の推定復元が可能となった。井尻B1号墳の家形埴輪を検討するうえで参考となるので、あらためてここに紹介する。なお、本調査区の周辺のこれまでの調査資料の再検索や今後の調査により、関連資料の増加が予測されるので、推定復元は現状の判明部分に限る。増加分については隨時紹介してゆきたい。

家形埴輪の破片は27点あり、接合の結果22点となった。これらは胎土や焼成、器面調整の特徴から4~5個体分の破片であると考えられた。これを個体別にA~Eと仮称する。A(1~14)は16点の破片からなる。28・31次調査地点から出土している。胎土には石英を主とする

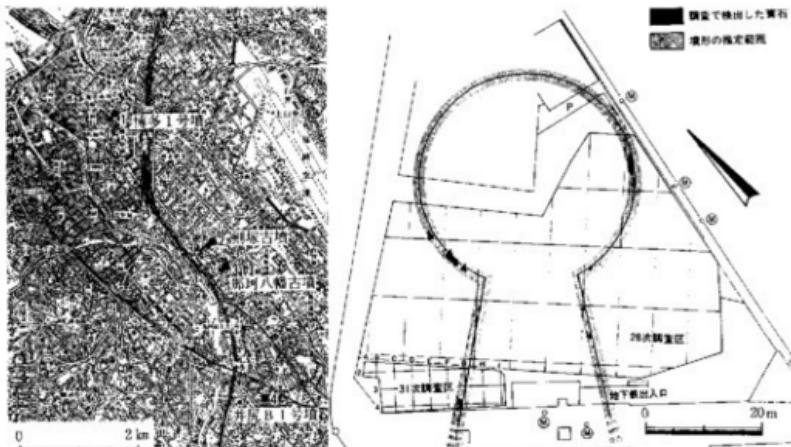


Fig. 47 博多1号墳の位置と調査区

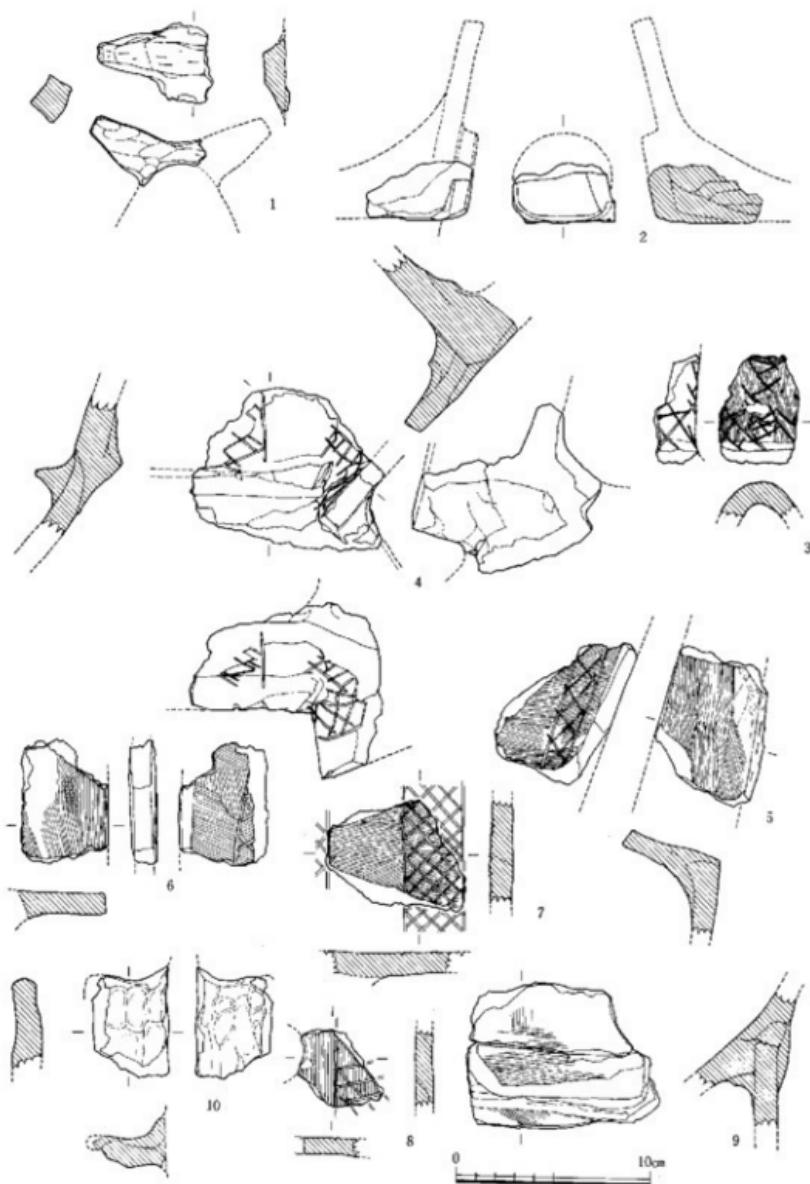


Fig. 48 博多 1号墳出土家形埴輪実測図 (1)

る砂粒を多く含み、焼成は良好である。器面には特徴的なハケ調整が残り、外面には赤色顔料が塗布されている。B (15) は3点の破片からなり、28次調査地点で出土している。胎土には石英を主とする多くの砂粒が含まれ、赤色粒子を少量含む。焼成はAより悪い。外面には赤色顔料が厚く塗布されている。C (16~19) は4点の破片からなり、28次調査地点から出土している。胎土には比較的微細な砂粒を含み、焼成は堅緻である。外面には赤色顔料が塗布されている。D (20・21) は2点の破片であり、28次調査地点から出土している。胎土は細かい砂粒を含み、ざらついている。荒いハケ調整が施されている。外面には少量の赤色顔料が塗布されている。E (22) は1点の破片であり、28次調査地点からの出土である。胎土には石英を主とする砂粒を多く含み、赤色粒子を少量含む。焼成は良好である。外面に赤色顔料の塗布が認められる。

家形埴輪A 1は堅魚木である。指押えとナデで成型され上部は削り痕がある。丸みをもった屋根部から剥落している。2は破風に付設する棟木の破片である。下面は平坦であり、側面は100°の傾斜で立ち上る。破風面より1cm突出しており、上面は円形になると推定される。指押さえとナデで成型されている。3は切妻屋根の丸棟部破片である。一端はゆるく立ち上り破風に連続すると推定される。調整は外面が破風との接続部をナデ、その他は横ハケであり、内面は指押さえ、ナデである。丸棟部と屋根側面にヘラ描き沈線による格子文が描かれている。網代の表現であろう。4 (31/P22-8) は切妻屋根と四注屋根との接続部分であり、破風板も残っている。切妻屋根と四注屋根は168°で接している。両者の接続部には断面三角形の突帯を付けている。破風板は四注屋根の隅部から始まる。断面観察から、屋根部を形成した後に突帯と破風を接続成型している。調整は全体に接続部を指押さえ後ナデで仕上げている。破風板の切妻屋根との接続部と切妻屋根には格子のヘラ描き沈線を描いている。網代の表現であろうが、切妻屋根には3.5cm間に継位に区画し、一定の間隔を開けているところから押縫も示している。

5、6は破風板である。幅5cm、厚さ1cmを測る。5は破風上部の破片である。調整は外面がハケ調整、内面が上方へのヘラ削りである。切妻屋根との接続部にヘラ描き沈線で幅2cmの平行線とその間に格子を描いている。7 (28/P17-13)、8は切妻屋根の側面と推定される。調整は外面をハケ、内面をハケ後ナデしている。7は4cm間隔を開けて幅3cmの区画に格子のヘラ描き沈線を施している。8には透孔がみられる。9 (31/P22-4) は四注屋根と壁の接続部分である。粘土帶の接合面から分離しているために製作工程を知ることができる。まず壁を成型し横ハケ調整を施した後、四注屋根の軒先を接合し、接合部を下方から粘土で補強する。さらに上方にのびる四注屋根を接合し、裏面の壁とを繋ぐように粘土を張り付けて補強する。補強部分は強い指押さえとナデで仕上げている。屋根の外面はハケ調整後、丁寧にナデしている。壁面と軒先は48°、四注屋根とは62°で接し、この壁との接合部分で屋根の傾斜が変化している。

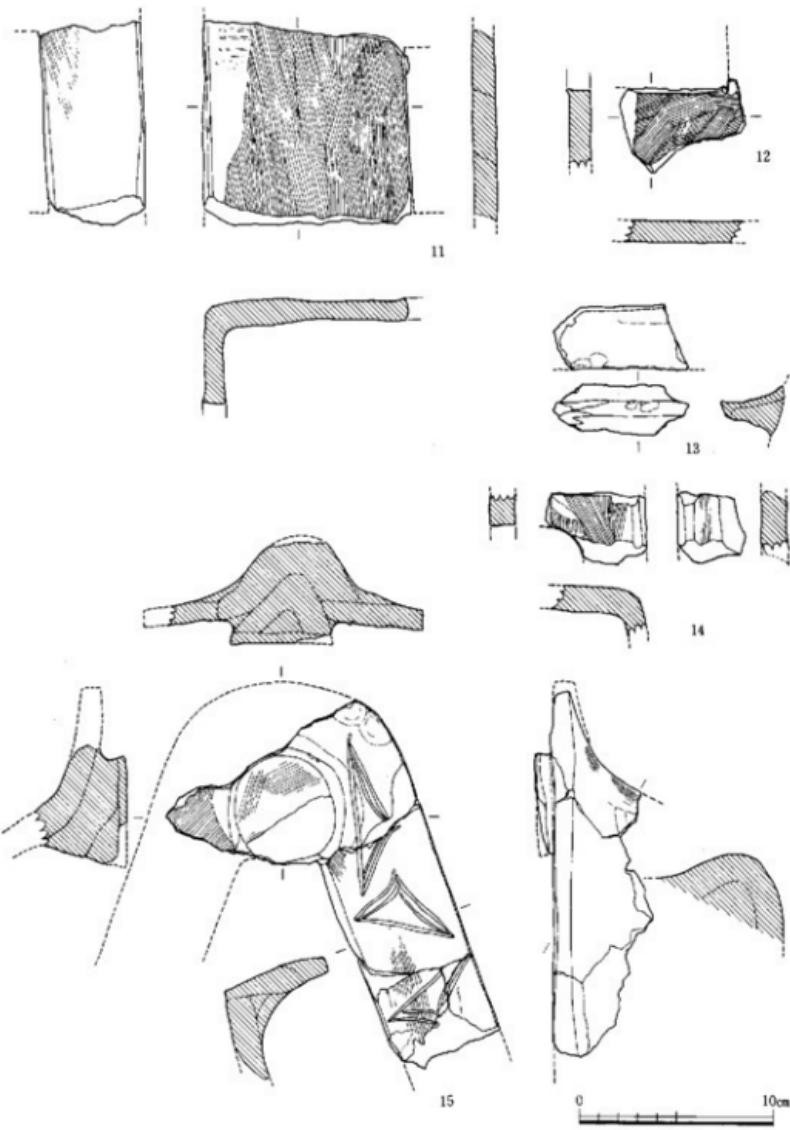


Fig. 49 博多1号墳出土家形埴輪実測図(2)

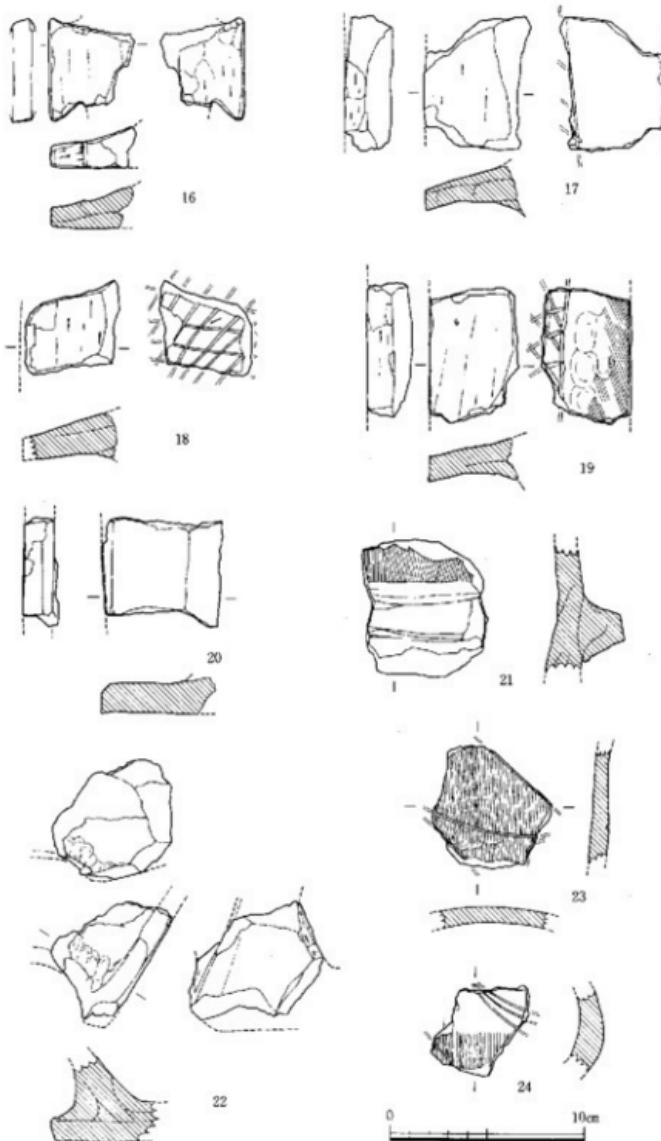


Fig. 50 博多1号墳出土家形埴輪実測図(3)

軒先は3cm以上のびる。10は部位不明である。指押さえ、ナデで調整している。剥離面は平坦であり、上面にのみ赤色顔料が塗布されている。破風板に付く桁かも知れない。11・12(31/P22-7)は壁の破片である。11は壁隅部であり、両方の稜部に窓もしくは入口の表現がある。調整は外面が縦ハケであり、隅部はナデている。一部にタタキ痕が残る。指押さえ、ハケ後ナデしている。透しは粘土が柔かい段階に鋭利な刃物で切り出している。13(31/P22-5)は捲回り突帯の破片である。断面は略三角形であり、外面はナデで仕上げている。壁面から約3cm張り出している。14は基底隅部の破片である。隅部から約3cm離れて弧状切り取りがある。調整は外面をハケ後隅部をナデ、内面をナデで仕上げている。

以上の家形埴輪Aは、なお破片が少ないので正確に全体を復元するのは困難である。おおよそFig. 51のような入母屋造になると推定できる。

家形埴輪B 15(28/P17-11・12)は破風板である。切妻屋根との接合部も残存している。破風に付設する棟木は径5~5.5cm、破風面から約1cm突出した円形の粘土板で表現されている。破風は約40°で開き頂部から20cmの高さが残存する。外面はハケ調整後ナデしている。内面は下方から上方へのヘラ削りである。破風の妻面にはヘラ描きによる装飾が施される。破風面と屋根とは約30°で接合する。本個体は他なく、全体の形態は不明である。切妻屋根の傾斜が急角なことから、おそらくやや大形の入母屋形か細身の切妻形と推定される。

家形埴輪C 16は蟠状の立飾りである。器面は指押さえとナデで成型してあり、切り込み部は

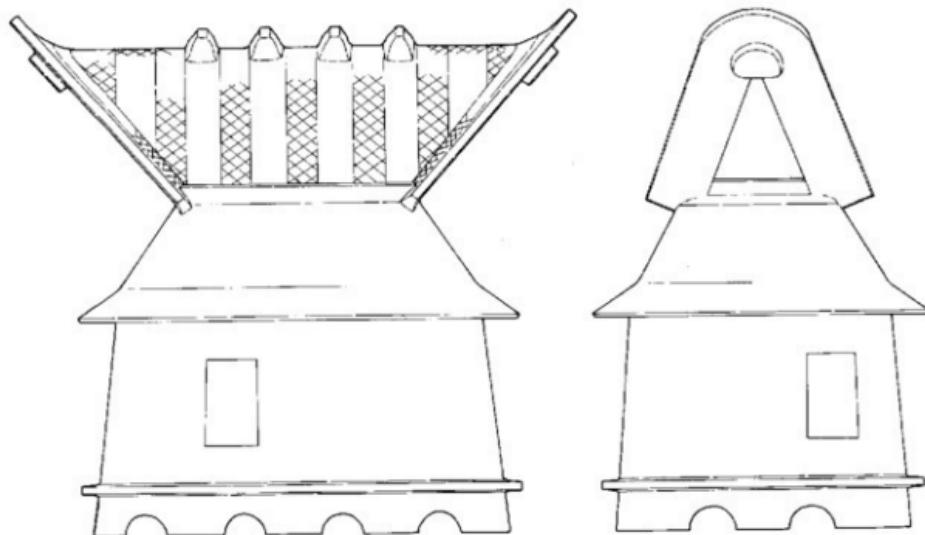


Fig. 51 博多1号墳出土家形埴輪A復元図

ヘラ状の工具を使用している。断面形が三角形に近く、また上面にのみ赤色顔料が塗布されているところから使用部位は軒先と推定される。17~19は軒先か破風板と推定される破片である。接合面から剥落しており、約4.5cm伸びている。調整は上面が丁寧なナデであり、下面が指押さえ後ナデである。19の下面にはハケが残る。下面にはヘラ描きによる格子文が施されている。網代の表現と推定される。本個体についても全体の形態は不明である。17~19には赤色顔料が上面にのみ塗布されていることから、屋根の軒先の可能性が高い。そうであるなら屋根の角度が緩やかなことから四注造り（寄棟）と考えられる。なお、16は胎土が若干異なり別個体の可能性がある。

家形埴輪D 20は破風板か四注屋根の軒先と推定される。全体をナデで丁寧に調整している。上面にのみ赤色顔料が塗布されている。21は基底部に近い嶺回突帯を含む破片である。外面はやや荒いハケ調整であり、突帯張り付け後ナデしている。内面は指押さえ後ナデしている。突帯は断面台形であり器面から約2cmの高さがある。赤色顔料は上部嶺から突帯上部まで塗布されている。本個体については全体の形態は不明である。

家形埴輪E 22は切妻屋根の下方隅部で破風板と接続する部分である。外面は指押さえとナデで、屋根部内面は指押さえ、ハケ後ナデにより、内面破風部は上方へのヘラ削りによって調整している。外面には赤色顔料が塗布されている。本個体も他に破片がなく全体の形態復元は困難であるが、屋根の傾斜が60°と比較的緩やかであることから小形の切妻形と推定される。

その他 23・24はヘラ描きの沈線文を有する埴輪片である。その形態は不明である。曲線があり、円筒形もしくは朝顔形埴輪の可能性がある。

（本文中で遺物番号の後に付記した番号はすでに報告済であることを示し、（調査次数／報告書頁数－遺物番号）を示す。）

参考文献

- 博多遺跡群第28次発掘調査報告書
井沢洋一編1987『博多Ⅶ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第147集 福岡市教育委員会
博多遺跡群第31次発掘調査報告書
常松幹雄1987『博多Ⅹ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第150集 福岡市教育委員会

5. 井尻B 1号墳出土の大甕と高坏について

近年、北部九州においては甘木市池の上墳墓群、古寺墳墓群（以下、“池の上”“古寺”と略す）での陶質土器および初期須恵器の大量出土や、朝倉郡夜須町の小隈・山隈・八並窯跡の発見により、初期須恵器に対する関心が高まっている。今回の井尻B 1号墳（以下、“井尻”と略す）の調査において、初期須恵器の大甕と高坏が出土した。ここでは、その編年的位置づけと若干の考察を加えてみたい。

北部九州において陶質土器および初期須恵器の編年は、まず、池の上出土資料をもとに橋口達也氏が行なった。これは壺の口縁部の形態および波状文の精粗から4形態に分類し、それらの形態を出土遺構の序列や共伴土師器との関係からI～IV式に分けたものである。それぞれの年代は、I式が4C末葉、II式が5C初頭～前葉、III式を5C前半のなかでも中頃に近い時期、IV式を5C中頃に比定した。この編年に対して柳田康雄氏は、橋口氏の分類の基準となった壺の口縁部の形態は小差であり、しかもII式に共伴した土師器甕は5C前半に位置づけられるとした。また、池の上I～III式は5C前半におさまるとし、III式とIV式の間には大きな時間差があるとした。そうしたうえで柳田氏は橋口氏のI式、II式をそれぞれIa式、Ib式とし、III式をIIa式、IV式をIIa式とした。また、蒲原宏行氏、多々良友博氏、藤井伸幸氏らは柳田氏の編年のはうがより実状に即しているとしながらも、陶邑編年との比較も含めて、池の上出土遺物の新しい編年を行なっている。

上記の編年で問題となっているのは、編年の型式としてのとらえ方と年代観である。分類の規準となっている壺の口縁部形態の変化自体は各編年とも一致しているように思われる。

そこでこの分類基準にもとづいて、まず、大甕について検討する。池の上では大甕の出土例がないため、法量の近い古寺6号土塚墓の大甕と小田茶臼塚古墳（以下、“小田茶臼塚”と略す）1号大甕との比較を行なう。

まず、井尻の大甕であるが、口縁部の形態は、口唇部は下端が上端より出ないものであり、口縁部上部はわずかに平坦面をなす。口縁下2.6cmの位置に三角突帯を有する。頸部はゆるく外反して立ち上がり、接合部から10cmほどのところからやや強く外反する。肩部の張りは強くなく、ゆるやかにカーブを描く。胴部最大径は胴部中央部より上部に位置し、底部付近は凹みがみられ、底部は丸底である。

古寺の大甕の口縁部の形態は、口唇部上端と下端がほぼ同じ位置にあり、口縁部上部は平坦面をなさない。口縁下2.8cmの位置に三角突帯を有する。頸部はほぼ垂直に立ち上がり、口縁部付近で外反する。肩部の張りは強く、胴部最大径はほぼ中央にある。底部付近も張りが強く、底部は丸底である。

小田茶臼塚1号大甕は、口唇部下端が上端より中にあり、井尻や古寺の大甕と比較するとかなり下がっている。また、頸部の突帯も口縁下5.4cmとかなり下がる。頸部はゆるく外反して立ち上がり、突帯の上部から外反が強くなり、「コ」字状に近くなる。肩の張りも弱く、ゆるやかにカーブを描き、胴部最大径は胴部の中央より上部に位置する。胴部から底部にかけてはゆるやかにカーブを描き、底部は丸底である。

以上、形態の比較からみると、井尻の大甕は古寺の大甕と小田茶臼塚1号大甕の中間に位置する。形態の古い順にならべると、古寺、井尻、小田茶臼塚1号となる。

ここで問題となるのは、これらの年代順である。橋口氏の分類では、古寺の大甕は池の上II式の新しいほうに属し、5C前葉となる。しかし、柳田編年や蒲原氏らの編年ではIb式に属し、5C中頃となる。また、小田茶臼塚1号大甕を、柳田氏は5C中頃あるいは後半の早い時期に比定している。どちらの編年を使うにせよ、古寺の大甕と小田茶臼塚の大甕との中間にあら井尻の大甕は、5C中頃という年代が与えられる。

次に高坏である。井尻で出土した形態の高坏は、池の上、古寺や小田茶臼塚では出土しておらず、前述の編年を使用することはできない。むしろその形態は大阪府の陶邑窯跡群で出土する例に近く、陶邑編年を参考にしたい。

この高坏は、坏部に1条の突帯がめぐり、その下に波状文を施す。口縁端は丸く仕上げられ、口縁部はあまり強く外反しない。脚部には台形のスカシを3ヶ所に入れ、脚端の上部は突出し脚端部が丸く仕上げられている。これらの特徴から、本例は陶邑編年のI(I型式4段階)に属すると思われる。年代は5C後半に比定される。

以上の結果、大甕は5C中頃、高坏は5C後半と時期差が認められることになる。しかし、この大甕と高坏はどちらも周溝の溝底近くより近接して出土したことから、同時に使用された可能性が高い。したがってこれらの時期は、より新しい年代が比定される高坏の時期から5C後半に位置づけておきたい。

次に大甕の法量について触れてみたい。大甕の法量をまとめたものが表である。この表によると、特に井尻の大甕と古寺の大甕、小田茶臼塚1号大甕の器高および口径がきわめて近いことがわかる。また、ほかに近似した数値を見出すことができる。このことから、大甕の生産においてなんらかの規格と尺度の使用があった可能性が想定される。この規格のもつ性格については不明であるが、須恵器生産者集団の動向を追求するうえで重要な要素となるのは違いない。この法量の問題は、今後の資料の集積や胎土分析などの結果を踏まえて再考したい。

最後に、大甕の出土状態について井尻、小田茶臼塚、古寺の大甕を比較してみたい。

まず、井尻の大甕は周溝内からかたまって出土した。復元するとはば完形になることや、出土地点に埋置したような痕跡がみられないことから、周溝外で破砕したあと、周溝に一括投棄

出土品	計測部位	高さ	口径	底径	(単位: cm)		
					最大径	底面積	底面積
井尻B 1号壺		99.7	50.0	35.5	72.8	58.7	15.0
古寺D-6		99.6	48.7	38.0	81.6	53.2	18.8
小田茶臼塚1		99.6	52.7 55.2	40.0	84.8	58.8	12.0
2		65.0	23.3	19.8	50.0	43.2	6.2
3		86.0	49.4 49.8	36.0	70.7	31.6	12.8
4		90.2	47.9	29.4	85.0	56.1	10.1
5		93.4	53.7 54.3	36.0	83.7	57.6	13.6
6		100.0	45.4	32.5	82.0	(65.4)	12.4

大甕法量計測値

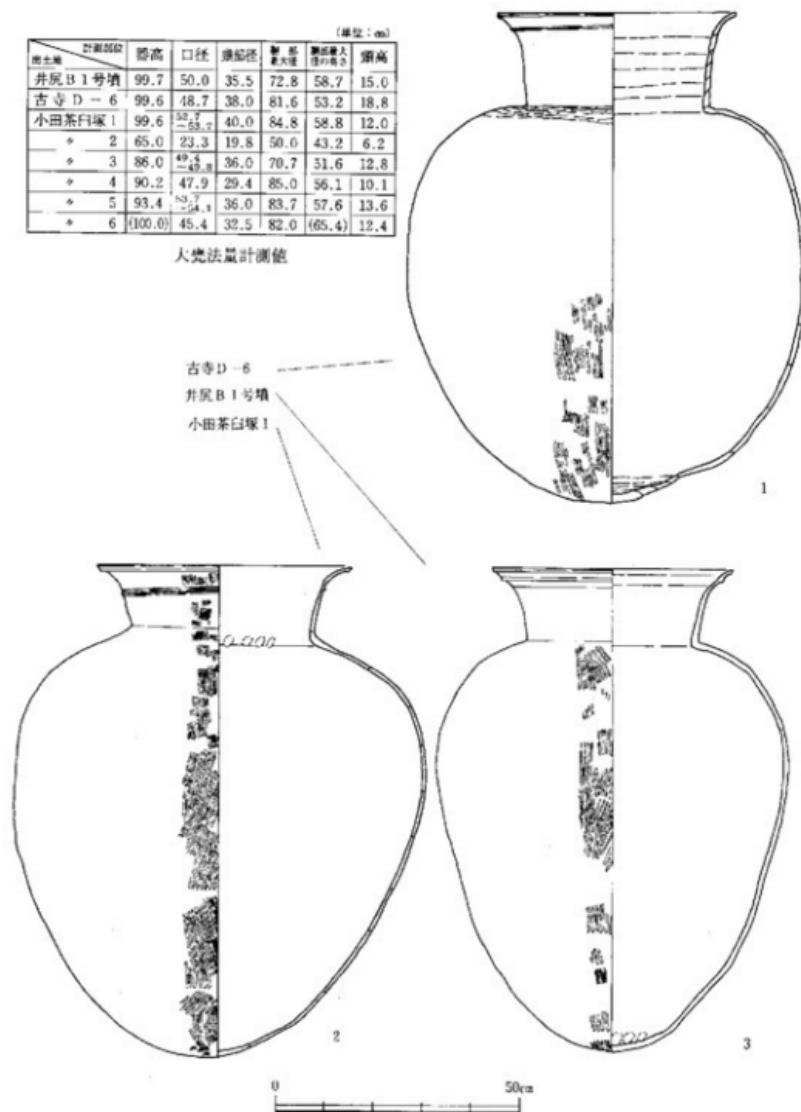


Fig. 52 県内各遺跡出土大甕実測図
(柳田1979、橋口1982を一部改変)

されたものと思われる。

小田茶臼塚の大甕の内、1号～5号までは、後円部2段目裾線から2.5mの前方部と後円部の境目といえる平坦面で検出されている。これらの大甕は据え置いたままで意識的に破砕されており、すべてに底部には穿孔のあとがある。

古寺の大甕は、主体部の北西約3mの地点に岩盤を少し掘りくぼめて据え置かれた後に、破碎されたと考えられる。底部に穿孔はみられない。

三例ともに共通しているのは、大甕を破碎するという行為である。破碎されるのは大甕だけではなく、井戸の場合は高坏が、小田茶臼塚の場合は器台や盖が同じように破碎されている。古墳における祭祀には、葬送儀礼に使用したと思われるこれらの須恵器を破碎するという行為が、重要な位置を占めていたと考えられる。

以上、井戸B1号墳出土の大甕と高坏について考察した。今回の考察ではまだあいまいな部分があり、残された課題も多い。また、初期須恵器の編年自体がなお流動的である。今後、編年の確立とともにより詳しく検討を加えたい。

参考文献

橋口達也他1979「池の上墳墓群」甘木市文化財調査報告書第5集 橋口達也他1982「古寺墳墓群」甘木市文化財調査報告書第14集 柳田康雄1982「甘木市史」上巻 柳田康雄他1979「小田茶臼塚古墳」甘木市文化財調査報告書第4集

6. おわりに

井戸B遺跡群は須玖丘陵の北端部に位置し、現在は市街化しており、各時代の遺構は削平されていると考えられていた。しかし、本遺跡の調査の結果、以下に示す多大な成果を得ることができた。

1. 先土器時代のⅠ期（細石刃文化期）・Ⅱ期（ナイフ形石器文化期）の遺物が出土し、同時代Ⅰ期の包含層が検出できたこと。
2. 弥生時代後半から古墳時代前期の区画された墓地群と集落を検出したこと。
3. 家形埴輪など埴輪類をもつ5世紀後半の古墳を検出し、今まで所在地がわからなくなっていた“井戸大塚”的可能性があること。

この地域は、大正年間に中山平次郎氏も発掘調査の必要性を説いていた。今後、再開発が予定されており、本調査の対象地として取り組んでいく必要があるといえよう。なお、本遺跡群内での調査は今回が2回目のものであり、本遺跡群における様相の一部がわかっただけであり、今後の調査に期待したい。

図 版

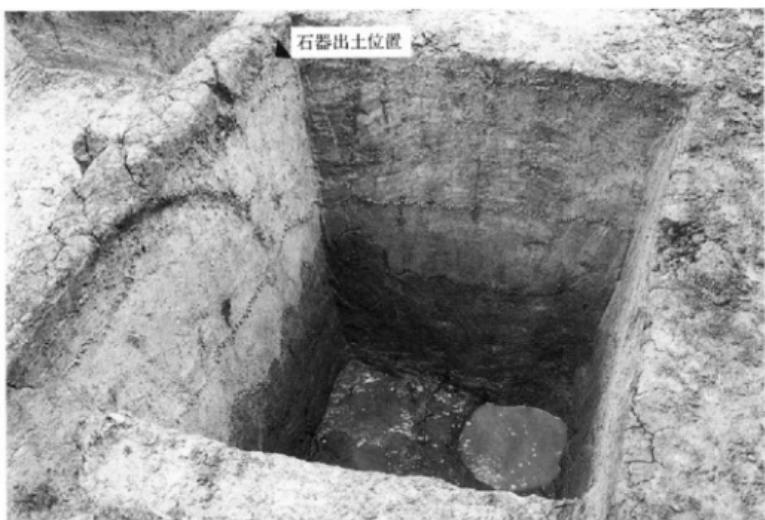
PLATES



(1) 調査区全景（南より）



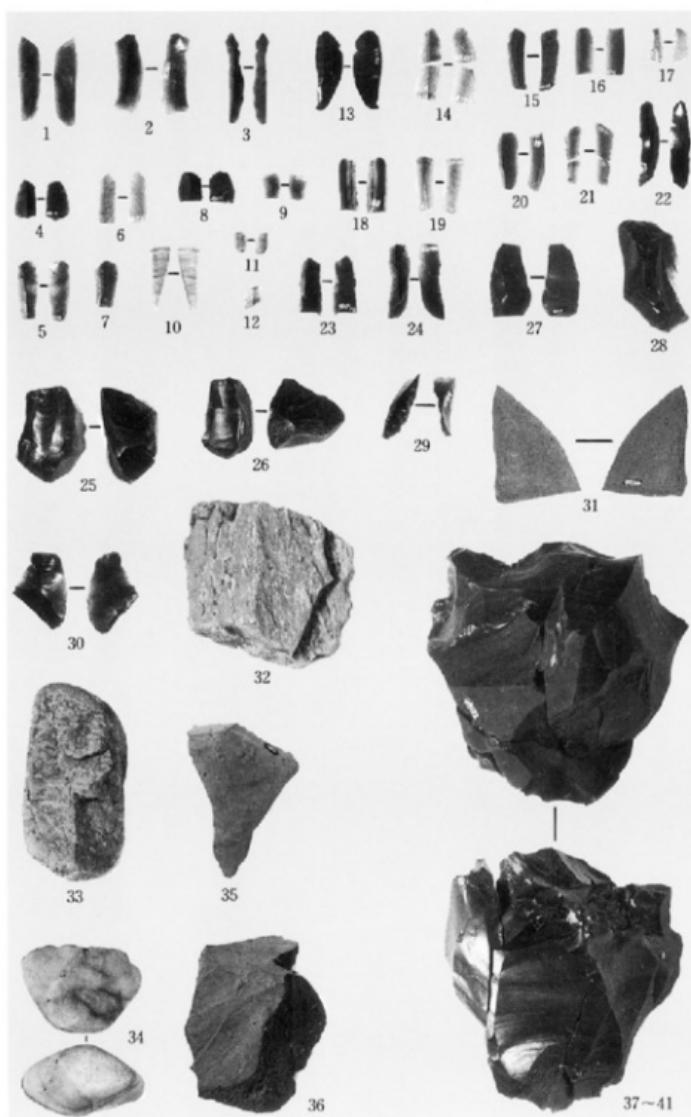
(2) 調査区全景（北東より）



(1) 先土器時代土層断面



(2) 先土器時代遺物出土状況 (西より)



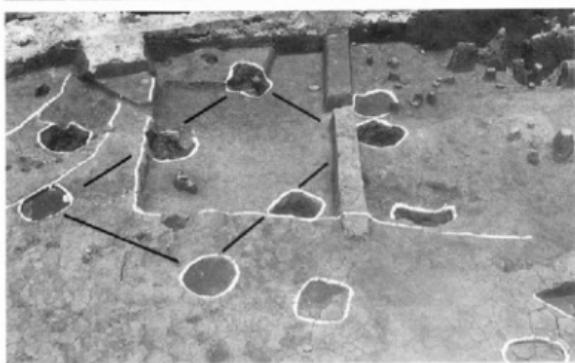
出土先土器時代石器

堅穴住居址

(1) SC-22
(南より)

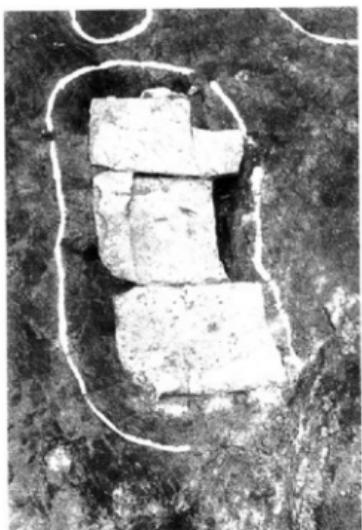


(2) SC-23および
第25号掘立柱
建物 (SB-25)
(南より)



(3) SC-24
(南より)





(1) 検出状況（南東より）



(2) 完掘状況（北西より）

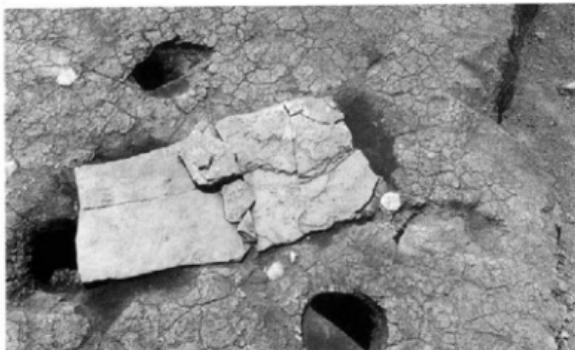


(3) 完掘状況（南西より）

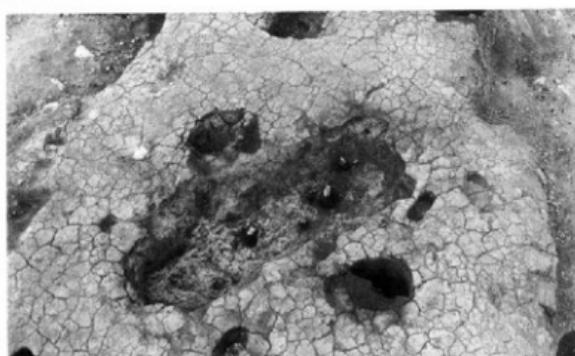
第10号石蓋土塚墓（SK-10）

第12号石蓋土塚墓
(SK-12)

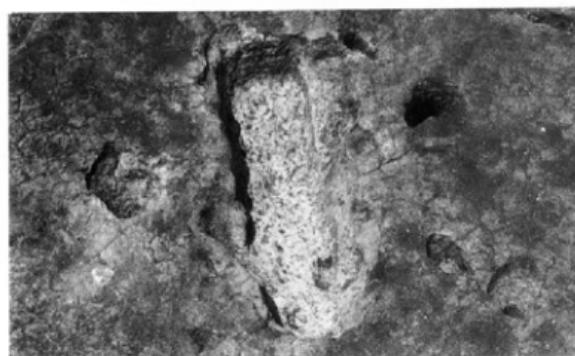
(1) 検出状況
(北西より)



(2) 遺物出土状況
(北より)



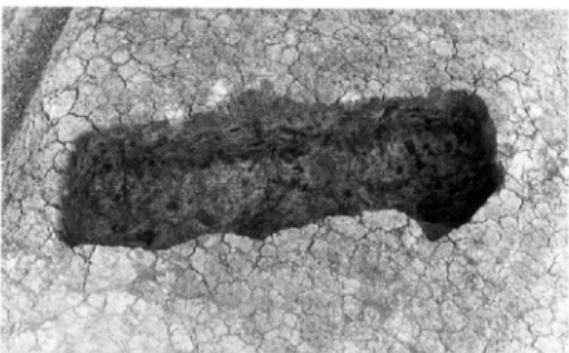
(3) 完掘状況
(南西より)



土塙墓完掘状況(1)



(1) SK-02
(南より)



(2) SK-03
(北より)



(3) SK-06
(東より)

土塙墓完掘状況(2)



(1) SK-07
(南より)



(2) SK-08
(南東より)



(3) SK-09
(南より)

土塙墓完掘状況(3)

(1) SK-11
(東より)



(2) SK-28
(東より)



(3) SK-13
(西より)





(1) 井尻B1号墳周溝内遺物出土状況（南東より）



(2) 井尻B1号墳周溝内遺物出土状況（北西より）



3



4



5



10

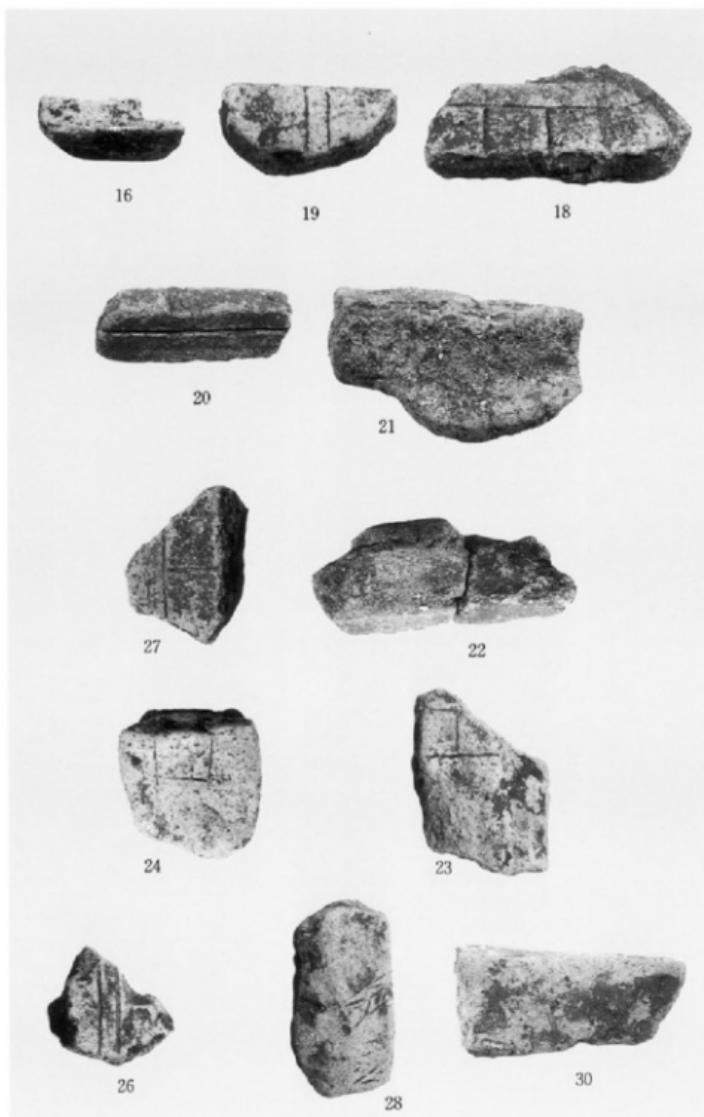


6



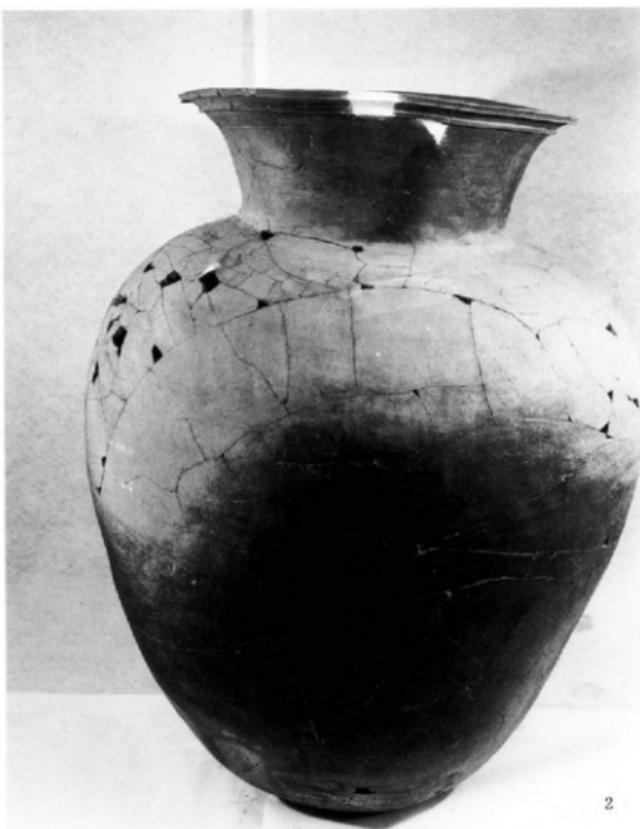
11

井戸B 1号墳周溝内出土円筒埴輪



井尻 B 1 号墳周溝内出土車輪

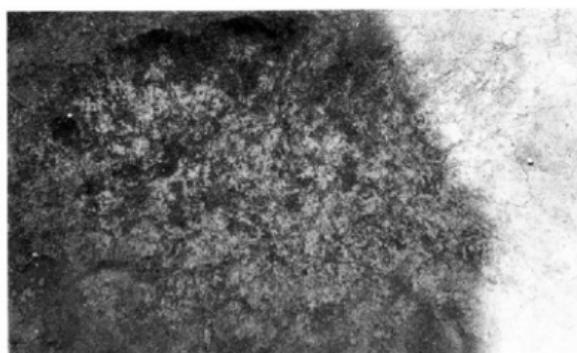
井尻B 1号墳
周溝内出土須恵器



井尻B1号墳
周溝内付設土塁
(SK-31)



(1) 横穴部完掘状況
(北より)



(2) 前庭部完掘状況
(南より)



(3) 前庭部出土玉
取り上げ状況

37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47
48	49	50	51	52	53	54	55	56		
57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	
67	68	69	70	71	72	73	74		87	88
78	79	80	81	82	83	84	85	86		
89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99
100	101	102	103	104	105	106	107	108	109	110
111	112	113	114	115	116	117	118	119	120	121
122	123	124	125	126	127	128	129	130	131	132
133	134	135	136	137	138	139	140	141	142	143
144	145	146	147	148	149	150	151	152	153	154
155	156	157	158	159	160	161	162	163	164	165
166	167	168	169	170	171					

井戸B 1号墳周溝内付設土塙前庭部出土玉



出土鐵器、玉、石庖丁、須患器

井 尻 B 遺 跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第175集

1988年（昭和63年）3月31日

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区大名2丁目10-29

印 刷 同盟印刷株式会社

Fukuokashi Maizō Bunkazai
Chōsa Hōkokusho No. 175

Ijiri B Site

Location :

175-1, Ijiri, 5 chōme,

Minami-ku, Fukuoka-city

Duration of Investigation :

April-May 1986

1988

Fukuokashi Kyōiku Linkai